
明日を描こう

aga0

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日を描こう

【Nコード】

N5788C

【作者名】

aga0

【あらすじ】

美香は25歳の美人起業家。ビジネスのために自分の心を変化させてきた。アイドルグループの一員、翔と出会ったのは、偶然なのか、それとも必然だったのか。ビジネスの世界に没頭する美香とアイドルの翔。異質な二人の関係は、本人同士の思惑とは裏腹に流れていく…。美香が翔と出会ったのは、ほんの偶然がきっかけだった。異なる世界に住む二人は、互いの仕事に没頭していた。美香にどんどん惹かれる翔に、出来るだけ応えようとする美香。しかし、二人の間には、翔が蒔いていた小さな種が大きな憎悪となり、立ち

は
だ
か
っ
た。
。

第1章：別れ

美香は呆然としていた。

だって、突然の出来事だったから。

ソファに座ったまま、動けない。

手に持った携帯電話は、3050円という料金表示をしばらく残した後、パネル照明が消えた。

「あっけないな」

恋の終わりというのは、本当にあっけない。

ドラマや小説のように、綺麗でもなく、汚くもなく、ただただあっけない。

美香は、携帯電話を閉じて、おもむろに洗濯物を干し始めた。

別れの電話は、午前9時。

2時間話して終了。

洗濯機の中で、干されるのを待っている洗濯物を放っておくわけにもいかない。

干さなければ、洗濯機の中で臭くなってしまう。

女というのは、こういう時は、案外冷静なのかもしれない。

美香は洗濯物を淡々と干した。

ベランダの外に広がる空は、ずっとずっと遠くまで青い。

きつと洗濯物は2時間もあれば乾くだろう。

そういえば、今日は30度以上だと天気予報で言っていたな。

洗濯物を干した美香は、パソコンに向かい、メールのチェックを始めた。

いつもと同じ仕事の始まり。

いつもと同じ、一人の仕事。

藤村美香25歳。

宮城県から上京して東京の大学を卒業後、そのまま東京に残った。

戻って来いという親の説得を振り切り、東京で就職することを決めたのだ。

別に、東京で就職したい企業があつたわけじゃない。

名古屋に住んでいる健太郎との距離を、これ以上広げるわけにはいかなかっただけ。

「東京にいる意味が無くなったな……」

大学を卒業してから名古屋に行けば良かったのかもしれない。

もちろん、その選択肢も考えた。

でも、【男のために】自分を動かすことができなかった。

急に名古屋に行くなんて行ったら、親も心配する。

だから、美香は東京での就職を選んだ。

学生の頃と変わらない、東京と名古屋の中距離恋愛。

「東京から名古屋まで、たった2時間じゃない」

こんな甘い考えのせいで見事にすれ違いの二人になってしまった。

健太郎は大学院生。

今年卒業の予定だったけど、美香のほうが先に卒業して社会人になってしまった。

この差は予想以上に大きかった。

社会人とは言え、学生の頃よりも収入が少なくなった美香は、名古屋に行くお金をなかなか貯めることができなかった。

学生時代は、奨学金で毎月10万円の生活費を手にし、アルバイトで20万近くは稼いでいた。

毎月30万円もの収入があったのに、社会人になった途端に収入は20万円にまで下がった。

さらには、そこから奨学金の支払いが2万円近く。

都内の家賃も払って生活していくとなると、とてもではないが名古屋までの新幹線代はもったいなくて仕方が無い。

金の切れ目が縁の切れ目、とはよく言ったものだ。

所詮、あたしには貧乏を乗り越えてでも健太郎を愛し続けるほどの
気持ちがなかったということだ。

健太郎と別れても、案外ショックは少ない。

何故だろう。

好きじゃなかったのか…？

いや、そんなことはない。

会いに行くときはウキウキしていたし、抱き合ったときは涙がこぼ
れそうになった。

でも別れた後、一度も涙は出ない。

思えば、あたしはいつも振られてばかりだ。

あたしから別れを切り出したことなんて、今まで一度もない。

いつも

「別れよう」という言葉ばかりを受け入れてきた。

そして、別れる間に女の勘が働いて、

「そろそろ別れるのかな」という感情が沸くから不思議だ。

そう思った途端、急に熱が冷め始める。

だから、

「別れよう」と言われても、

「やっぱり」と思うことが多い。

やっぱり。ってことは、あたしは別れを予測していて、できるだけ傷つかないように、心の準備をしているのかもしれない。

そんな経験ばかりを重ねて、ついには、今回のように涙も出なくなつたのかな。

（こんな自分、嫌だな）

ため息を一つついて、パソコンの前に座った。

メールのチェックは美香の大事な仕事だ。

仕事、というよりも、ビジネスだ。

大学を卒業してから、すぐに会社員として働いたが、それも2年しか続かなかった。

健太郎と別れるまで、がむしゃらに男性同様に働いてきた。

それこそ、部署の建て直しなどで家に帰れない日は何日も続く時もあった。

それほどがむしゃらに働いた2年だったが、

糸が切れてしまった。

糸が切れた原因は、単純なことだ。

お金。

ボーナスの額が希望していたものよりも低かった。

ただそれだけのことだったが、明細を見た途端に辞表を出すことを決意した。

「こんな仕事、意味がない」

こき使われるだけ使われて、その報酬を満足に受け取れない仕事なんて、何の意味があるのだろうか。

部門採算制のおかげで、

個人がどれほど頑張っても、希望通りの評価をしてもらえない。

儲かるのは社長だけ。

そう、社長だけが儲かるのだ。

社員は軽自動車に乗っているのに、社長はベンツに乗っている。

（あたしも、ベンツに乗れるようになりたい）

自分のビジネスを起業するきっかけだった。

（もう半年も経ったんだ…）

起業を本気で考え、手当たりしだいに行動して半年が過ぎた。

健太郎と別れてからは1年になる。

第2章：出会い

益田との会食は楽しかった。

やはり、自分よりも稼いでいる人の話を聞くことは面白い。

考え方、ものの見方がまったく違う。

【金持ちになるためには、金持ちの考え方になる必要がある】

この言葉通りだった。

それに、

【自分と同じ年収の人とだけ付き合っていると、一生その年収から抜け出せないんですよ。

金持ちになりたい、稼ぎたいと思ったら付き合う人を変えるべきです】

この言葉は、胸に響いた。

確かに、あたしの年収はここ1年でぐっと変わった。

それは、付き合う人が変わったからだ。

情報起業家の益田さん、不動産投資家の谷村さん。

この二人としか付き合っていないけれど、話を聞くだけで自分の考え方が、どんどん変わっていくのが手に取るようにわかる。

自分が、金持ちへの道をひた走っているような感覚になっている。

「ねえ、美香ちゃん。面白いおっさんがいるんだけど、会ってみたい?」

益田さんが、ニヤツとした顔で言った。

「面白い? しかも、おっさんですか?」

あたしはつられて笑いながら答えると、益田さんはポケットから携帯電話を取り出して電話をかけ始めた

「あ、美村さんですか?

どうも、益田です!

美村さん、今暇ですよ?

え、暇じゃない? それはウソでしょ (笑)。

美村さんが暇じゃないわけがない。

あ、いやね、僕今、美女と一緒にいるんですけど、是非会わせたいなーと思って。

来ます? やっぱり暇なんじゃないですか (笑)!

えーっと、場所はですね…」

益田さんは、周りのお客さんのことを気にかけながら、あたしに入り口のほうを指さして、席を外した。

あたしは軽く頷いて益田さんの背中を見送っていた。

（美村さんって、誰…？）

（つてか、今から来るのか。おっさんって言うてたよね。何を話せばいいんだろ？

まいっか。どうせ益田さんが一人で喋ってるだろうし…）

美香は、ワインを一口飲んでタバコに火をつけた。

益田さんと一緒に食事をする、こういうことがよくある。

あたしをいろんな人に紹介してくれて、ビジネスの話をどんどん進めてくれたり、面白い話や聞いたこともない場所の説明をしてくれる。

何が面白いって、益田さんが付き合っている友達はみんな資産何億、何十億、コンサルタント会社経営、情報起業家、などとにかく信じられないくらいの金持ち。

だから、その人たちの話はめちゃくちゃ面白い。

普通の人が思いもしないようなことを考えているし、ビジネスの話となると、とことんだ。

聞いていてわからないこともあるけれど、そういうことも丁寧に説明してくれるし、何よりも、何十億もの資産を持っている男性が自分には

「女性だ」という気を使ってくれるのが嬉しい。

タバコを半分ほど吸ったところで、益田さんが戻ってきた。

「今来るって。なんか近くで食事してたみたいだから、場所変えて飲もうか」

レストランを出て、益田さんが向かった場所は居酒屋だった。

通されたのは、8人用の個室。どうやらもう予約をしていたみたい。

（さすが益田さん、手配が早い！）

こういうところも、金持ちになるために必要な小さな行動なのかもしれない。

普通は、10分程度で人を呼んで店を予約して、さっさと自分たちが最初に席について迎える体制を取ることは難しい。

モタついてしまうだろう。

ささつとこういうことが出来るのは、経験や訓練がないと出来ないことだ。

「ちよつと俺、店の外で待ってるよ。

美香ちゃんはここに居て」

益田さんは、部屋の間所だけ確認すると、またすぐに店の外に出た。

（この居酒屋、初めて来た！。ってか、なんか高級そうなんだけど…）

綺麗な畳、ピカピカのテーブル、シミ一つない座布団。

生花が飾ってあって、額にはなんか凄そうな絵。

普通だったら、さつさとメニューとおしほりを出す店員も来ない。

（やばい、対応できるか？）

高級料理店でのマナーを、美香は知らない。

ナイフとフォークですら、まともに使えているかわからない。

仰々しい料理の食べ方もわからないし、カニやエビもあまり好きではないから綺麗に食べることができない。

焼き魚だって、一人で食べることができないのだ。

一生懸命キレイに食べようと思っても、終わってみるとぐちゃぐちゃになってしまう。

昔から、父がいつも娘たちに、魚の身を取り分けていたからだ。

だから美香は、いまだに

「魚食べたいから、身ほぐして」と平気をお願いしてしまう。

しかし、これも友達同士ならOKだが、さすがに資産何十億の人に

は通用しないだろう。

（まずい。魚は頼めない。ってか、コース料理だったらピンチだ）

考えれば考えるほど、へんな汗が出てきそうだった。

初対面の人と話することには、何の抵抗もないが、マナーという点では、あまりにも女として恥ずかしい25歳だった。

緊張をほぐすために、バッグからタバコを取り出して、またカバンに押し込んだ。

（タバコもまずいな…。扉が開いたら、タバコ吸ってたなんて、あり得ない）

ずっと、音のしない扉が開いた。

扉を開けた益田さんは、さっと横によけ、美村さんと思われるおっ

さんが

「やあやあ」と言いながら入ってきた。

美香は、

「こんばんは、始めまして」と一言挨拶をして頭を下げた。

「美村さん、この子が美香さんですよ」

「おお、あの美香さんか！噂通り美人だねえ」

美人、と言われるのは慣れている。

（「あの」って何だ？）

思いながら、美村さんの肩越しに、茶髪の頭が見えた。

「あ、この子たちね、連れてきちゃったよ。雷神、ライジンだから」

美村さんが言っている言葉を理解しないまま、
茶髪の二人に

「こんばんわ」と言いながら頭を下げた。

頭を上げた美香は、二度見した。

あり得ない。

50 過ぎのおっさんの隣に、ジャニーズの雷神、翔と順がいる。

実は、今まで益田さんのつながりで、何人かの芸能人と呼ばれる人には会ったことがある。

しかし、あまりにも名前が売れていなかったり、グラビア系やAV女優系で女の美香にはピンとこない芸能人ばかりだった。

ただ、やはり芸能人。

普通の人の

「キレイ」よりもほかのオーラがあっただのは確かだった。

ついに、今回ビッグネームだった。

ジャニーズはとくに好きなわけでもないし、歌もあまり聞かないが、

実物を見るとかつこいい。

めちゃくちゃかつこいい。

「美香ちゃん、見とれない（笑）」

益田さんが、私の名前を呼んだ。

「あ、すみません。ちょっとビックリして…。
いつもAV女優さんとかばかりだったから（笑）」

「なんだよ、益田くん、AV女優も知り合いにいろの？紹介してよ
」

美村さんが、すかさず益田さんを責める。

「今度紹介しますよ、今度必ず！」

「すみません、こんな私で…（笑）」

美香は、一気に恐縮してしまった。

そりゃそうだ、資産何十億と持っている美村さんだ、どうせならも

つと美人がいいに決まっている。

「ははは！いいんだよ、美香ちゃん。

美香ちゃんもかなり美人だよ！ほんとビックリしたよ、なあ？」

美村さんは、翔くんと順く人を交互に見て返事を促した。

「美人っすね」

「かなり」

促されるまま、答える二人の声に、美香はタジタジになってしまった。

昔から、

「美人だね」

「芸能人になれるんじゃない？」

「かわいいね」

という言葉はたくさんもらってきた。

自分でも、そこその顔をしているとは思っている。

今まで特に誰に似てると言われたことは無いが、鼻筋が通っているところ、長いまつげは自慢だ。

この顔で得たことはたくさんあるが、損したこともたくさんある。

軽そうな男しか、美香の近くには寄ってこないのだ。

美香が好きなタイプと正反対の男ばかりが寄ってくる。

そういえば、健太郎はそんな男たちを掻き分けて探し当てた、やつとたどり着いた理想の男だったように思う。

ジャニーズには興味がない、とは言え、やっぱり目の前にいる男は
かっこいい。

美村さんが何か喋っているけど、美香にはほとんど聞こえていなかった。

（なんでこんなに顔が整っているんだ？）

（なんでここに？）

（なんで？）

なんで、なんで、なんで、なんで、なんで？

美香の頭の中は、

「なんで」でいっぱいになってしまった。

（だめだ、考えてもわからない…）

ふと、美村さんを見ると、
ビールのグラスが空きそうだった。

「美村さん、何飲まれますか？」

「お、そうだな。冷やでもらおうかな」

「はい。種類があると思いますけど…」

「どれ？」

メニューを渡すと美村さんは、メニューに目を落としたまま、
「飲む人ー」と言った。

「あ、益田くんはダメなんだよね。日本酒」

「そうなんですよー。日本酒飲むとすっかり酔うんで。美香ちゃん
飲める?」

「お、いける口なの?」

美村さんが、メニューから視線を上げて美香を見た。

「たしなむ程度ですけど…私でよければ付き合います」

「いいねえ 二人は?」

翔くんと順くんも、

「じゃあ…」と。

「おし!じゃあ、美香ちゃん選んで」

美村は、メニューを美香に返した。

「あら、どうしましょう。どんなのが好きですか?甘い?辛い?」

「美香ちゃんの好きなのでいいよ。」

女性が飲みやすいやつがあればそれでいいよ」

「あ、ありがとうございます」

やはり、金持ちは女性に優しいというのは間違いないようだ。

美香は、辛口のお酒を頼んだ。
度合いは+4。少しピリツとするくらいの辛さだ。

（居酒屋でバイトしてて良かった…）

下座に座っていたあたしは、冷や酒が運ばれると、まず美村さんへと注ぎに立った。

その次に順くん、翔くん。

そして、翔くんがあたしへ。

不思議と、少し喋ったら緊張がほぐれた。

益田さんとすでにワインを1本空けているから、その酔いも少しある。

かつこいい男二人にも、もう慣れた感じだった。

（【美人は3日で飽きる、ブスは3日で慣れる】ってのは本当なのか…？）

そんなどうでもいいことを思いながら一口飲んだ。

「ん。美味しい」

美村さんも、翔くんも順くんも
「美味しい」と頷いていた。

「ところで、何で美村さんは雷神と一緒に飲んだんですか？」

益田さんが、美香が一番知りたい核心に触れようとしていた。

美香も思わず、うんうんと頷いていた。

「いやさ、さっきまでジャニーズ事務所のキタちゃんと飲んだの。
タマちゃんも。そこにいたのよ、彼ら」

（キタさんと、タマさんと一緒に飲んでた？
何者なんだ、この美村のおっさんは！！）

「一緒に連れてこようかと思ったんだけど、帰るっていつからさ。」

んで、若いのだけ連れてきたの」

「急に、行くぞーって連れてこられたんツスよ（笑）」

「俺なんて、トイレ行ってる間にタクシー来てたし（笑）」

くったくの無い顔で笑う二人は、やっとともに口を開いた。

その笑顔につられて、美香も笑った。

「強引だからなく、美村さんは。

美香ちゃんと一回飲みたいって言うから電話したんだけど、どうです？会った感想は」

益田さんが、余計なことまで聞く。

というより

（飲みたいって言ってたのか？）

「益田くんから美人だとは聞いてたけどねー、いや、ほんとに美人だよね。」

それにさ、25歳でしょ、まだ。

それなのに、起業してるんだもんね。

美人社長ってことだからさー、どんな人だろうって興味があったの

よ。

何、どんな仕事してんの？」

美村さんがタバコに火をつけながら、あたしの顔を見た。

「いろいろです。本当にいろいろ。

益田さんからたくさん仕事いただきますし、あとはビジネスの仲介ですね」

「仲介？」

「アフィリエイト、アドセンス、SEO関係の仲介です」

「へえ……。で、美香ちゃんは仲介料を取るわけだ」

「そうですね。それが利益になります」

「人材派遣ではないんだよね？」

「違いますね。ま、下請けです（笑）」

「なるほど。でもさ、よく一人で起業したよね。

25歳でさ、いないよ、なかなか。

普通はOLとかで会社で働いてお金を稼ぐ道を選ぶでしょう。なんで起業したの？」

「私も会社員だった時代もあるんですよ。

でも会社員だとお給料は少ないし、時間は拘束されるし、女だから昇給は希望通りにいかないし。

ってことで、自分のビジネスしようかなーってぼんやりとやってたら、益田さんと出会って、そこからですかね、どんどん道が広がっていったのは」

「おー。益田くんが恩人ってわけだ」

「そうですね（笑）」

そこからは、ビジネスの話になっていった。

美村さんと益田さんがビジネス用語を並べ立てた会話を繰り広げ、あたしは半分もついていけなかった。

こういうところは、やはり知識がないとついていけない。

本当に、ビジネス用語の横文字は眠たくなる。

美香の視界に、ふと翔の手が入ってきた。

「どっぞ」

さっきの冷や酒を注いでくれようとしていた。

「あ、すみません」

「いいよ、敬語。同じ歳なんだから」

美香は翔に注ぎ返し、順にも注いだところで、思わず聞いてしまった。

「本物ですか？」

二人とも、一瞬キョトンとした後、

「偽者ではないよ（笑）」

「あ…ですよね…（笑）。ごめんなさい、自己紹介してなくて。藤村美香です」

名刺を取り出そうとして、やめた。

美村さんに渡していないのだから、ここで二人に渡すわけにはいいかない。

「藤村、っていうんだ。苗字」

「知ってる？雷神」

「もちろん、もちろん！」

「何の歌知ってる？」

順くんが、突っ込んできた。

美香は、目を泳がせて考えた。

考えた。

考えた。

「…アレですよ、アレ。…うん。知ってますよ」

二人は爆笑していた。

「知らねーんじゃない！」

「ごめんなさい！」

本当に知らなかった。

自分でもビックリしていた。

実は一回も聴いたことがなかったんだ。

「え、本当に、本当？1曲も知らないの？」

翔が美香に聞く。

「1曲くらいは知ってるかも……？でも題名が出てこない……」

「題名って（笑）。曲名？じゃあ、今から順が歌うから」

順は、

「俺？」と言いながらも、ラララーと軽く歌った。

「……」

「マジかよ！順、違うの！」

「……」

「マジで？うつそ！」

「ごめんなさい、本当に……。音楽というものをあんまり聞かなくて」

本当だった。美香は音楽をあまり聴かない。

自宅で仕事をしている最中も、一切音楽はかけない。

テレビが一人で喋っているだけだ。

車の中でも曲を流すことはない。

MDが、あまりにも古いものしかなくて、昔の思い出ばかり思い出してしまうので自然とラジオを聴くようになっていた。

福山雅治が好きで、彼の曲は知っているが、それでもプレーヤーでかけることはない。

それほど、音楽にたいして何の執着もなかった。

「え、でも俺らのことは知ってるんだよね？何で？」

順が不思議そうに聞いた。

「あー、それは、24時間テレビで司会してたから…してましたよね？」

「あ、なるほどー。24時間テレビかぁ。そういうことか（笑）」

「誰の曲聴いてるの？」

翔が聞いた。

「うーん。誰の曲を聴くか…？」

「ごめんなさい、聴かない。聴かないです」

「え？音楽聴かないの？」

「うん。今はほとんど聴かないかも…」

「マジ？すげー！いるんだ、そういう人って」

翔くんは、本当に驚いた顔をしていた。

音楽を仕事にしている人からしてみれば、あたしのようなタイプは珍しいのかもしれない。

でも、昔はよく音楽を聴いていた。

まあ、飲み会でカラオケに行くことが多かったから「歌を覚えるため」に聴いていた部分もあったけど…。

好きな福山雅治も、夏の歌も、冬のバラードも、最近では封印してきた。

テレビから流れていても、ラジオから流れてきても、聞こえないふりをしていた。

音楽が好きだった、健太郎との思い出がよみがえってくるから…。

第3章：つながり

ベットから起きると、美香はググーツと背伸びをした。

（かなり寝たな…）

時計は朝の8時を少し過ぎたところだった。

寝室を出てリビングへ。

昨夜に飲んだブランデーが、テーブルの上に出しっぱなしだ。

仕事がこのところ、行き詰まっている。

本業であるライティングの仕事が思うようにいかない。

仲介業のほかに、ライティングの仕事もしている美香だが、【言葉にする】という難しさに直面していた。

うまくいかないときは、スパッと仕事を辞めてお酒を飲む毎日が続いていた。

一人でボーっとテレビを見ながらブランデーを飲む、そんな毎日だ

った。

（最近、みんなと飲んでないなあ）

シャワーを浴びながらそんなことを考えていた。

「あ、コウちゃん？あたし、美香。ねえ、今日ヒマ？飲もうよ」

リダイヤルには、コウちゃんの番号が入っている。

コウちゃんは、大学時代からの男友達。

地元が東京で、根っからの東京人。

はつきりいって、流行に敏感。遊びも派手で、交友関係も広い。

坊主にヒゲ、というコテコテのいでたちで、3つのクラブを運営する社長さん。

コウちゃんとのつながりで知り合った友達もたくさんいる。

飲みたいときは、コウちゃんに電話。

これが美香の常識になっていた。

コウちゃんからの承諾に気を良くした美香は、滞っていたライティングの仕事に着手した。

（仕事には、勢いが必要だからね！）

思いのほか、すらすらと書ける気がした。

ライティングの仕事は難しい。

「文章を書くことが好きです」というレベルでは、とてもではないがこなせる仕事ではない。

言葉一つで物売る。

何百万円、何千万円というお金が動くのだ。

美香のライティングの師匠は益田だった。

たくさんの表現方法、ライティングテクニックを知り、数多くのセミナーに出席してノウハウを学んでいる。

そのノウハウを、美香に惜しげもなく教えてくれる人。

確かに、益田と出会わなければ、今の美香はなかったに違いない。

今回の仕事も、益田絡みだった。

まずは、益田からOKをもらわなければ次へは進めない。

「ふう…」

ひと段落したところでタバコに火をつけた。

（あれ？雨…）

窓一面に水滴がついていた。

（せっかくの飲み会なのに）

美香の部屋は、10畳のリビングと寝室、そして6畳のキッチンがある。

都内でこれほどの部屋を借りられるのは、今のビジネスのお陰だ。

家賃20万円。

普通のOLが借りられる金額ではない。

美香の年収は1千万円を超えている。

月収100万円以上。

視線を窓の外からずらし、部屋の中を見渡した。

（自分の力でここまできたんだ）

（負けるもんか）

25歳という年齢で、年収1千万円。

美香はこの数字に満足しながらも、もっと上を目指していた。

もちろん、それは益田や谷村に感化されているからだ。

「会社員として働いて、将来プランはどう考えているの？」

「欲しいものは我慢するの？」

「女性は結婚するから、仕事は適当でいいの？」

「旦那さんが普通の会社員だったら、どうせパートに出てまた働かなくちゃいけないんじゃない？」

「ブランド品は欲しくないの？」

美香ちゃん、

ライティングの仕事は

「自分の嫌な部分を見る」ということなんだよ。

こんな質問を嫌というほどされた。

そして、自分の思考回路がどんどん変化したのだ。

（負けない。目標達成までは）

窓の外で、雨はまだパラついていた。

気温は夕方になっても30度近い。

今年はとにかく暑くて困る。

冬生まれ、北国育ちの美香にとっては、この暑さは本当に堪える。

ノースリーブのタンクトップとジーンズ、キャップをかぶり、部屋

を出た。

健太郎と別れてからは、スカートをはかなくなった。

はく理由がなくなったんだ。

もともと、世間一般に

「女の子らしい」と言われるような格好は好きではない。

好きではない、というよりも、面倒臭い。

ストッキングをはいたり、パンプスを履いたり、カバンやピアスの色をそろえるなんて、美香にはうんざりするような作業でしかない。

それでも、健太郎と一緒にいた頃は、喜んでもらえるようにと一生懸命努力をしていたつもりだ。

ワンピースも、パンプスも、ネックレスもマニキュアも…。

（どっちのあたしが本当なんだろう…）

思い出しながら、フツと笑ってしまった。

お金が無いながらも、あの頃は一生懸命だった気がする。

キャップの脇から揺れる、胸まで伸びた無造作な茶色のカールヘアをなびかせて、美香はウキウキしながら待ち合わせの居酒屋へと向かった。

「おー！いたいた、コウちゃん」

美香を見るなり、コウちゃんは満面の笑みを浮かべた。

「元気だったか」

やさしく美香を抱擁すると、席へ促した。

「お前、3週間ぶりだなー」

コウちゃんはやさしい。

1個上のお兄ちゃんみたいだ。

お絞りを受け取りながら、美香は幸せな気持ちになっていた。

健太郎と別れたときも、一番最初に報告したのはコウちゃんだった。

泣けなかった美香と一緒に、朝まで楽しい昔話をした。

以前、コウちゃんに彼女が出来たときは、美香は一抹の寂しさを覚えてたが、それは仕方が無いこと。

コウちゃんに彼女ができて、美香はコウちゃんを頼りになる存在にしていた。

「ビールでいい？」

コウちゃんの言葉に、笑顔で頷く美香。

「さっきさ、ほかに呼んだから。たぶん美香の知らない人だよ。お前、初対面のヤツでも大丈夫だよな？」

「うん。みんなで飲めれば楽しいからね！」

大勢で飲むということは、たくさん話が聞けて楽しい。

美香は、自分のことを話すより、人の面白い話を聞くのが大好きだった。

だから、初対面の人との話はとくにワクワクした。

どんな人だろう？

仕事は？

趣味は？

話し方は？

なんて考えると、本当にウキウキしてくる。

コウちゃんと一緒だと、

こういうウキウキをいつももらうことができた。

「お前、相変わらず忙しいの？」

コウちゃんが、枝豆をプチプチと口に入れながら言う。

「うん、忙しいの！ってか、仕事が忙しいというより、心が忙しい」

「出た！お前の【心が忙しい】発言（笑）！行き詰まってんの？」

「それなりにね…。やっぱり書くって難しいよ」

「でも、お前は一個一個乗り越えてきたじゃん。

書くこととか、俺はよくわかんねーからなんとも言えないけど、今回も、お前的に言えば【乗り越えるべき壁】なんだろう？」

「（笑）。何、あたし語録作ってんの！」

二人でケラケラと笑ってた。

3週間ぶりにお互いの顔を見たからかもしれない。

なんとなく、嬉しい雰囲気漂っていた。

それは、恋人同士でもなく、友達関係でもなく、家族のような、仲間のような、そんな感じだったと思う。

ふいに、コウちゃんがあたしの後ろに向かって手を振った。

「よく分かったな、店」

コウちゃんの言葉に美香は振り返った。

その視線の先には、見覚えのある顔。

「ありゃ！」

美香の言葉に、翔が反応する。

「こないだは、どーも」

「えー、どうして、どうして？なんでコウちゃんが知ってんの？」

美香は、この偶然にただただ驚いていた。

あの会食の後、すぐにみんなタクシーに乗り込んで帰宅したのだ。

電話番号の交換、などというドラマティックなことはない。

「どーも」と別れただけだった。

美村にだけは、電話番号を聞かれ、別れ際に名刺を渡していた。

「いや、たまたまだよ。翔とは何回か飲んでるんだよ」

コウちゃんの言葉に、翔が続ける。

「地元つながりだよ」

「さすが、クラブ経営者だねえ……」

（こんなこともあるのか）

美香は、その偶然を素直に受け入れた。

コウちゃんと久しぶりに会って、行き詰まった仕事のことを忘れて

飲もうと思っていたから、ちょっとだけ浮き足立っていた。

「翔は、何飲むの？」

「あ、じゃあビールで」

新しいビールが運ばれて、あたしたちはまた乾杯した。

「ってか、こないだと感じ違うね」

泡がついた口もとをぬぐいながら、翔が美香に言った。

「こないだ？あー、あの時は、ビジネスモード（笑）。今日は、オフ！」

この間は、白いシャツに黒のパンツ、パンプスといういでたちで、美香のビジネス戦闘モードの服装だった。

髪も、しっかりとアップにしていた。

それに比べ今日はというと、ランニングのタンクトップにジーンズ、胸までの茶髪カールはゆるく二つに結んでいる。

「翔くんは…、うーん」

美香は、翔をマジマジと見た。

黒いポロシャツに、ジーンズ。

いたってシンプルな格好だ。

（それにしても、かっこいい顔だなあ…）

美香は、翔の顔をマジマジと見た。

どこことなく人なつつこいような目。

通った鼻筋の下に、形のいい唇。

コウちゃんと比べるとすぐにわかるほど、小さい顔。

（あ、服の話だったか）

思い直して、ジョッキを手にした。

「相変わらずだね！オツケー（笑）」

ビールのジョッキで、乾杯のポーズを取る美香に、翔は

「意味わかんねーよ、それ（笑）」

と自分のジョッキをあわせた。

「翔くんは、今日は休み？つてか、芸能人の休みの取り方とかがわかんないんだけど」

唐突な美香の質問にも、翔は丁寧に答えていた。

「つつーか、翔でいいよ。同じ歳なんだし。こないだも言っただよね？確か」

「あれ？ほんと？覚えてない（笑）。
じゃー、翔ちゃんだ」

「ちゃん？ちゃんなの？」

「うん、上等（笑）」

「なんだよ、上等って（笑）」

二人笑い合う横で、コウちゃんは携帯をいじっていた。

コウちゃんは、その時、苦しかったんだ。

思うようにいかない恋に、もがいていたんだ。

翔ちゃんも、あたしもジョッキで3杯飲んだとき、コウちゃんの携帯電話が鳴った。

耳にあてながら、コウちゃんは何も言わずに店を出ていった。

「彼女？」

翔ちゃんが言う。

「え？コウちゃん、今は彼女いないと思うんだけど…。でも、どうだろう」

前の彼女と別れてから、まだ数ヶ月しか経っていないような気がする。

浮気、されたんだよね。

ひどいね、ひどいね、ってなぐさめた記憶がよみがえる。

「そういう美香は、彼氏いるの？」

呼び捨てなんて慣れてるはずなのに、ちょっとドキッとした。

「え、あたし？いないよ、一人も」

「何人作る気だよ（笑）」

「（笑）」

あたしは、ジョッキに残っていたビールを飲み干しながら、さっきのコウちゃんの表情を思い出していた。

「最後の一人、来たぞー」

あたしの背後から、コウちゃんともう一人がやってきた。

175cmのコウちゃんの肩ぐらいまでの身長の子。

（あー、かわいい）

サラサラのストレート、フワフワのスカート、女の子らしいカバン。

美香は、思わず横に置いてあった自分のキャップをテーブルの下に追いやった。

あまりにも自分と違う人。

女のあたしでも、見とれてしまうようなかわいい格好をした子。

「初めまして、フジム…」
「翔くうくん」

あたしの自己紹介はさえぎられた。

翔くうくん、に。

その子は、すぐに翔ちゃんの隣をゲットしていた。

あたしと翔ちゃんとの間の、ちょっとしたスペースに入り込んできた。

上半身を曲げて、あたしは少し左によけた。

（なんとも、わかりやすい…）

さすが、雷神はモテモテだ。

そう思いながら見上げたコウちゃんの顔は少し曇っていたように見えた。

（コウちゃん…？）

翔ちゃんは、近づいてきたその子から少し身体を離すと、
「自己紹介すれば？」と促した。

「あ、ごめんなさい！私、横田紗枝です。サエでいいよ」

あたしに向かって、にっこり微笑んだ。

（あらま。近くで見ると結構ビミョーかも）

アイラインとマスカラで真っ黒になった目、ファンデーションでカ
バーしきれしていない鼻のソバカス。

最近の美香は、いつもこうだった。

仕事のイライラが私生活のふとしたところに出てしまう。

初対面の人にたいして、すぐにものさしを出す。

容姿・収入・学歴…

わかりやすいものさしで、自分と比較する癖がついている。

ダメだと思っけていても、ものさしはいつも勝手に出てくるのだ。

（やばい、またやっちゃった…）

別に翔ちゃんとの間に入られたことが気に入らないわけじゃない。

（マナーというものがあるだろう）

自己紹介もしないで、急に割り込んできた、そのちょっとした行動に美香はイラッときたのかもしれない。

いや、自分と正反対の女の子らしい格好をしているからかもしれない。

イライラの原因ははつきりしなかったけれど、いずれにせよ、第一印象は、良くはない。

「美香さんって、彼氏いるの？」

サエが美香に聞いた。

「いないよオ」

美香は、カバンからタバコを取り出しながら言った。

ライターでカチツと火を付ける。

（ふう）

不思議とイライラがおさまっていく。

「サエちゃんは？」

（ちょっと意地悪だったかな…）

聞かれたから、聞き返しちゃったけど…。

「サエもね、いないんだあ。募集中」

言いながら、翔ちゃんを見ていた。

翔ちゃんは、サエちゃんのほうを見ないでビールのジョッキに手をかけようとしていた。

あたしの隣にいたコウちゃんは、タバコの煙を見ていた。

第4章：気になる気持ち

「どうした？ボーっとして」

順が声をかける。

「ん？ああ…」

帰りのタクシーの中で、考えていた。

藤村美香。

確かに、美人だった。

キラッとした服装に、芸能界でも通用しそうなあの笑顔。

それに、美村さんにもお酌したりして、気配りばっかりしてたな。

「あの子、雷神の曲知らなかったな（笑）。俺たちもまだまだってことかな…」

順がボソツと言う。

「（笑）。確かに、1曲も知らねーってのは、マズイよな」

途中で順は

「じゃあ、また明日ロケで」
と残してタクシーを降りた。

次の日から、ロケやら収録やらで、とにかく忙しい日が続いた。

それでも、俺は少しでも時間があれば友達と飯を食いに行ったり、ドライブに出かけた。

サエは、とにかくいつも俺の隣にいた。

サラサラの髪はめっちゃくちゃ魅力的だったけど、どこか好きになれない。

サエが俺のことを好きなのは、誰もが知っていた。

俺に対するサエの行動一つ一つが、

「またかよ」的な部分があった。

きつと、俺が望めば都合のいいような身体の関係も作れる。

サエがかわいくないワケではない。

むしろ、ここまではつきり感情を表現するサエはすごいと思う。

サラサラの髪も、いいと思う。

でも、わざわざ自分から踏み込むような関係にはしたくない。

男のエゴだと言われれば、それまでかもしれない。

でも、好きだと言われていないのに、答えを出すというのも変な話だ。

仕事もプライベートも充実している。

ただ、望んでいる恋愛はまだしていない。

今まで付き合ってきた、簡単な関係じゃなく、もっと違う恋をしてみたい。

（これも、男のエゴなのか…？）

「翔、最近忙しい？」

コウは会つと、いつも同じ質問をする。

「そこそこね」

俺も、同じ答えを返す。

これがお決まりのパターンで気持ちがいい。

いつもの居酒屋、いつものメンバー、いつもの会話。

女の子も何人かいる。

でも、それも同じメンバーだから、いつものことだ。

彼女たちの顔を見ながら、また藤村美香のことを思い出していた。

（キレイだったな…）

キリツとまとめ上げられた髪、白いシャツと黒パンツは、彼女のスタイルの良さを強調していた。

（オッパイも大きかったような…）

うつすらと、頭の中がピンクになる。

俺は頭を横に振り、ピンクをかき消した。

同い年で起業家、どれだけ稼いでいるかわからないけど、少なくとも、ここにいるOLたちとは考え方がまったく違うのかもしれない。

（できれば、もう一度会いたいなあ）

「なあ、コウ…」

俺はコウに聞いてみた。

顔の広さじゃ、こちら辺じゃコウが一番だ。

俺自身が調べられるのが好きじゃないから、人のことを調べるのはどうかと思ったけど、

「藤村美香って、知ってる？」

ダメもとで、思い切って聞いてみた。

「なんか、翔くんかなりテンション高いんじゃない？」

「まったくだよ、ついてけねーよ（笑）」

「いいことあった？」

メンバーの言葉に、俺は

「ちよっとね」と。

たぶん、ニヤニヤしていたと思う。

思い切ってコウに聞いて良かった。

やっぱり人間は、行動に出るべきだ。

もしあのときコウに聞いていなかったら、一生会えなかったかもしれない。

「美香？何、お前、美香のこと知ってんの？」

「や、一回しか会ったことないんだけど。
コウは知ってるかと思って」

「知ってるも何も、友達だよ。
起業家の、藤村美香だよな？」

「そうそう、美人起業家」

「（笑）美人？まあ、
確かに美人つつつちゃー美人かもしれないけど、アイツは凄いぜ。」

めちゃくちゃなヤツだよ、マジで」

「めちゃくちゃ?」

「基本、男なんだよ、考え方が。」

まあ、自分でビジネスしててかなり稼いでるからそうなったんだろうけど、OLん時に比べたら、全く違う人間になったみたいだよ」

「へえ…」

「会いたいの?」

「会いたい、会いたい」

「（笑）アイツに惚れんなよ、振り回されるぞ（笑）」

「マジ（笑）」

コウの話だと、俺が思っているような女ではないかもしれない。

【清楚な感じで、でも芯は強い美人起業家】

起業家だから、芯は強いんだろうけど、おそらく清楚ではないかもしれない。

そのギャップも含めて、俺は何だか確かめたくなっていた。

コウからは2週間の連絡がなくて、ちょっと不安に思っていた頃、やっと着信があった。

収録中で出られなかった携帯に留守電が入っていた。

「今日の夜、美香と会っけど、来れる？」

居酒屋の中は、少し蒸し蒸ししていた。

坊主のコウは、どこに居ても見つけやすい。

コウの向かいには、あぐらをかいた女。

藤村美香は、まだ来てないのか？

「ありゃ！」

振り返った顔に、俺は度肝を抜かれた。

（うわ！）

俺が予想していた藤村美香じゃなかった。

ゆるく結ばれた髪は、ノースリーブから出た肩にかかっている。

ジーパンには、穴…？

起業家とは思えないようなラフな格好だった。

しかし、そのラフさが、逆に藤村美香の顔立ちを引き立たせているように思えた。

（この間より、美人になってるような…？）

「つつーか、翔でいいよ。同じ歳なんだし。こないだも言っただよね？確か」

「あれ？ほんと？覚えてない（笑）。じゃー、翔ちゃんだ」

「ちゃん？ちゃんなの？」

「うん、上等（笑）」

「なんだよ、上等って（笑）」

この間とはまったく違う喋り方。

俺はそのギャップに戸惑いを隠せなかったけど、美香の喋り一つ一つが面白くて笑っていた。

そして、その俺よりも、大きな口を開けて笑う美香から目が離せないでいた。

第5章：苦痛

「美香ちゃん、この見出しじゃ弱いな。せつかくスリッピーンしてるんだから、もっと強烈な見出しにしないと。弱すぎてダメ」

「途中までは読めるけど、後半が読みにくいな。改行をもう少し調整してみて」

「あと、全体的に胡散臭い印象があるなあ。言葉の使い方もしれない。エピソードをもっとふくらまさないと。胡散臭くならないように」

1週間かけて作成した文章は、見事にダメ出しされた。

もともと、今回のようなライティングは初めての作業だった。

しかし、このライティング一つで、500万以上入ってくる仕事だ。投げ出すわけにもいかない。

具体的にどのように修正すれば良いのか、それが分からないから苦勞する。

もつとも、そこがあたしの仕事なんだろうけど、一度作ってしまった文章を修正するという作業は、本当に辛い。

言葉を変え、改行を変え、見出しを変える。

修正する箇所は少ないけれど、

「言葉を変える」という作業は、かなり難しい作業。

自分の気持ちを、心を、搾り出す作業に近いかもしれない。

益田さんの指示はいつも、漠然としている。

「例えばさ、お姉ちゃんとやっとホテルに行っても、急にパンツ脱がれると冷めるわけ。

ジワジワと脱いでくれないと。

そういう感じで構成してほしいんだよね」

こんな具体的な例を出されても、美香にはあまりピンとこない。

しかも、益田さんの

「例えばさ」は、いつも下ネタだ。

スカイプのヘッドセットをはずすと、美香はタバコに火をつけた。

（疲れた…）

そういえば、ここ1週間、まともに外出していない。

ずっと部屋でライティングをしていた。

心を搾り出す作業。

苦しくて苦しうてしょうがない。

言葉というのは、変幻自在だ。

書いた人の心がそのまま現われる。

適当に書けば、適当な表現しかできない。

苦勞して苦勞して書けば、それが現われる。

楽しくのびのびと書けば、読み手にもそれは伝わる。

きっと、今の自分の状態では、息苦しい文章になっているんだろう。

ふと、携帯電話がチカチカと音を立てずに光った。

この間変えたばかりの携帯電話は、新しいニュースが配信されると無言で光るようだ。

その光る電話の下敷きになっていた白い紙に目がいった。

（あ……。）

そういえば、あの飲み会の後にコウちゃんから渡されていたのだった。

「これ、翔のだから」

帰り際、トイレに立った美香を追いかけて、コウちゃんが手渡してきた。

「なんで、コウちゃんが？」

「や、サエがいるからさ」

ちよつと気まずそうにしているコウちゃんを、もう少しじめたくなつてしまった。

「なんで、サエちゃんがいると電話番号が交換できないの？
サエちゃんって、翔ちゃんの彼女？」

「いや、そういうワケじゃないんだけど、あの通りいつも隣にいるし。翔もなんとなく交換しづらいみたいだからさ」

「ふーん。…ヘンなの。とりあえず、ソレ、いらない」

そう言つて、美香は女性用トイレの扉を開けた。

翔ちゃんに興味がないわけではない。

友達として、もっと話したり飲んだりしたいとは思つ。

でも、やり方が男らしくない。

彼女ではないサエちゃんに気を使っている。

ということは、翔ちゃんもサエちゃんに気があるということじゃないの？

それなのに、あたしに番号を渡すって、どういうこと？

逆に、翔ちゃんがサエちゃんのことを好きじゃないなら、自分であたしに番号を渡せばいいじゃない。

人に頼むなんて、許せない。

コウちゃんから受け取らなかった番号は、美香のカバンに入っていた。

トイレに行っている間に、コウちゃんが入れたのだろう。

見つけた美香は、とりあえず携帯電話と一緒に置いておいたのだ。

たぶん、連絡して欲しいということなんだろう。
メールアドレスも書いてあった。

友達として、飲む時に誘っても大丈夫という証拠だと思うけど。

しかし今の美香には、そんなことより優先しなければいけない仕事
が山ほどあった。

（あれから、1週間か…）

白い紙を、また携帯電話の下に置いた。

（仕事しよう）

気が重い修正作業を、ただ延々と続けた。

パソコンの前にだけ座っていると、そこだけが自分の世界に見える。
くる。

たった1畳分の世界。

灰皿も、飲み物も、テレビやクーラーのリモコンも、必要なものは
全部パソコンの前にある。

立ち上がらなくても、数時間は仕事ができる。

19インチのモニター。

この世界だけで生きているような感覚に陥る。

修正作業に入って4時間。

トイレにも立たずに、ずっと座りっぱなしだ。

しかし、思うように修正できない。

言葉が思いつかない。生み出せない。

自分が、文章の世界に入っていくことができず、まるで「文章」という模様を見ているような気持ちになっていた。

（ダメだ……。全然進まない）

クルリと椅子を回し、立ち上がった。

立ったままタバコに火をつける。

ここ一週間で1カートンは吸っただろう。

時々、痰がからむ咳が出る。

こういう時に、自分の寿命が縮んでいる気がする。

仕事をしていれば辛いこともある。

苦しい仕事もある。

特に、ライティングの仕事は、ゼロから生み出す仕事。

そして、このビジネスは、誰からも強制されて行っているものではない。

ない。

美香が辞めたいと思えば、いつでも辞められるビジネスだ。

その代わり、次の日からの収入は途絶えることになる。

会社員のように、時間は拘束されない。

美香が仕事をしなくても、ある程度の収入が入ってくるような仕組みは、もうすでに作っている。

ただ、その収入にだけ頼っているのは、利益は少なくなる一方だろう。

どういうビジネスでも、常に上を目指していかなければ現状維持すら難しい。

現状維持をしようと思ったら、上を目指さなければいけないのだ。

逆に言えば、上を目指しても現状維持しかできないということだ。

ビジネスの世界は厳しい。

美香は嫌というほどそれを実感している。

文句を言いながらも、会社に居れば給料が手に入る、会社員という道を捨て、美香は自らビジネスの世界に乗り込んだ。

それは間違っていないと思っている。

今がどんなに苦しくても、

「じゃあ、会社員に戻りなさい」と言われたら、絶対にノーだ。

年収1千万。これは、紙面上の利益だ。

収入で言えば、3倍はあるだろう。

いろいろなものを合法的に経費で落とせば、税金の支払いも少なくなる。

自動的に税金が引かれ、税金対策など一つもできない会社員とは違い、経営者というのは、一番儲かる立場なのだ。

（負けない）

薄暗くなる窓の外を見ながら、美香は誓った。

第6章：二人

さっぱりとするために、シャワーを浴びた後、おもむろに携帯電話を開いた。

（誰からも連絡がない…）

1週間も誰からも連絡がないのは、今回に限ったことじゃない。

健太郎と別れてからは、こういうことがしょっちゅうある。

仕事の連絡は、スカイプというネットツールを使って通話している。料金はかからない。

健太郎がいない今、電話は、やはり友達や家族が専門だ。

また、さっきの白い紙を見る。

- - - - -

こんばんは。こないだはどうもね。

コウちゃんから番号もらいました。

忙しくてなかなか連絡できなかったんだけど、翔ちゃんも今仕事かな？

あたしの番号は、090 - x x x x - x x x x
では、またね！。

ミカ

- - - - -

美香のメールには、顔文字はない。

友達には顔文字も入れて送ることがあるが、男友達には顔文字を入れたことがない。

（健太郎には、よく使ってたな…）

離れていれば、やはり表現というのは大事だ。

使い慣れない絵文字を一生懸命使っていた記憶がよみがえる。

送信完了の表示を確認した後、軽く化粧をして、車の鍵を掴んで部屋を後にした。

ドライブは楽しい。

美香の車はベンツのGLだ。

新車で、諸経費込みで1千万程度だった。

社長「ベント

単純な考えから、ディーラーを覗いた。

絶対に現金で買ってやると思い、キャッシュを銀行に用意していた。

ディーラーでは、

「あなた誰？」的な雰囲気で、最初は500万程度の車ばかりを紹介された。

そして、

「これ、ください」

とGLを指差したときの、担当者の顔といったら。

美香は思わず吹き出した。

お金持ってきます、とだけ言い残して10分後に1千万円を抱えた美香を見て、

担当者はさらに驚いていた。

「失礼ですけど、ご職業は」と聞かれ
「社長です」と答えたときの快感といっただけだった。

別にベンツじゃなくても良かった。

車のことなんて何もわからない。

なんとなく覗いたディーラーで、ちょっと驚かせてあげようと思っただけだった。

コウちゃんにこの話をしたら、ゲラゲラ笑ってたっけな。

その時、携帯がブブブと振動した。

美香は、ゆっくりとベンツを道路脇に寄せて、携帯を開いた。

- - - - -

メールありがとう。

俺はさっきまで仕事。

明日は休みだよ。

今何してんの？

翔

- - - - -

今、ドライブ中。

あたしももう仕事疲れたから辞めた！

1 週間缶詰だつたんだよ…

1 週間も？すげーな。

メシ食った？あ、ドライブ中だっけか。
じゃあ一人じゃないんだ

一人だよ。一人ドライブ（笑）

ご飯はこれからだよー

送信完了してすぐに、電話がなった。

「はいはい？お疲れさまー」

「お疲れー。今どこ走ってんの？」

「うーんと、ここは…。わかんないけど、うちの近くだよ。もう少しで新宿」

「ホント？じゃあ、メシ食いに行かない？」

「うん、いいけど…。車で行っていい？」

「いいよ。ってか、俺のこと拾って」

「ん、了解」

いくら7月とはいえ、やはり夜7時にもなると空は暗い。

人が結構歩いていて、車の中から翔ちゃん一人を探すのは難しい。

（コウちゃんだと、分かりやすいんだけど）

思い出してまた吹き出した。

さすがにあの頭は、目立つ。

黒や茶色の中に、肌色がポツンとあるのがウケるんだ。

そんなことを思いながら、路肩に寄せた車から降りて翔ちゃんに電話をかけた。

一生懸命に場所を説明していると、翔ちゃんが向こうから手を振りながらやってきた。

（大丈夫なのか？アイドルなのに…）

「ごめん、ありがとう」

あまりにも爽やかで、美香は一瞬息をのんだ。

「ううん、いいよ…。ってか、爽やかすぎるから（笑）」

「アイドルだからな（笑）」

「確かに、そういえばそうだったね（笑）
あ、乗って乗って」

美香はそう言って、助手席のドアを軽く開けて、運転席に回った。

「これ、ベンツ？イカチーのに乗ってんね」

「（笑）イカチー？自分で稼いだお金で買ったんだよ」

「ぶっちゃけ、いくら？」

「1千万」

「うーわっ」

「（笑）おい、雷神。もっと稼いでいるくせに」

「ははッ」

「翔サン、どこ行きますか？」

「どこがいい？車だから飲めないよね？」

「いいよ、代行頼むから」

「ダイコウ？何それ」

「知らないの？タクシーの車版。
あたしの代わりに運転して帰ってくれんの」

「マジ？そんなのあんだ」

「うん。だからお酒大丈夫だよ」

お店は翔ちゃんが携帯から電話して予約していた。

「行きつけ？」

「何回かね」

「予約しないと入れないんだ」

「や、テーブルは空いてるかもしれないんだけど、個室は予約しとかないと」

「へえ。あたしテーブルでも…」

あ、そうだね、アイドルはタイヘンだね（笑）」

「はい、タイヘンです（笑）」

「あれ、でもこないだは普通に周りから見えてたじゃん」

「こないだは大丈夫なの。みんないたから。
女の子と二人は、ちょっと面倒なんだよね」

「ふうん。じゃあ、翔ちゃんの彼女はタイヘンだねえ」

「ホントだよ（笑）」

30分くらい走っただろうか。

「この辺りだよ」と、翔ちゃんが言った場所は、すっかり美香の近

所だった。

「え、ここ？ホント？ちょっと待って、じゃあ、あたし車置いてきていい？」

「近いの？家」

「近い近い。歩いて…10分くらいかな」

ガレージに車を止めて、二人でお店まで歩いた。

「お前、いいトコ住んでるね。家賃いくら？」

「20万。もつといいトコに住みたいんだよね、本当は。どんどんステップアップしたいんだけど、なかなかうまくいかないかな」

「女の子でベンツ乗り回して、20万のトコ住むって、すごいよ」

「うーん。走ってきたからなあ。

とにかく、もうめっちゃくちゃ走ってきた（笑）。
んで、今はちよつと停滞気味かな」

「…そうなんだ」

「社長つてさ、思ったよりタイヘンだった（笑）。
ヒマなのかと思ってたけど、結構やることあって、社長概念がくつ

がえったよ（笑）」

笑う美香の頭を、翔ちゃんは

「頑張ってんねー」と、ポンポンと叩いた。

その瞬間、美香は立ち止まった。

「どした？」

振り向く翔ちゃんに、美香はまた歩き出して言った。

「翔ちゃんってさ、紛らわしいよね」

「は？」

「翔ちゃんって、サエちゃんのこと好きなんでしょう？
それなのに、あたしと一緒にご飯食べるの？」

美香は思い出したように言った。

カバンに入っていた、白い紙を思い出したのだ。

「え？サエ？いや、好きじゃないよ」

「じゃあなんで、コウちゃんに頼んだの？」

「……」

「30秒以内に答えて」

翔ちゃんは、一瞬ビククリしたような顔をしたけど、すぐに立ち止まって考え込んだ。

美香も、足を止める。

20秒くらい、たっただろうか。

翔ちゃんが口を開いた。

「ごめん」

「うん」

「サエの前で渡すと、いちいちうるさいから。それでコウに頼んだ…のかも…」

「サエちゃんは、翔ちゃんのこと好きなんだ？」

「や、それはよくわかんないけど…」

「そっか…。あたしにはそう見えただけ…」

「うん、みんなにも、そう見えてるみたい」

翔ちゃんの言葉に、思わず美香は吹き出した。

「ちょっと！そんなじゃん（笑）男ならはつきりすれば？」

「（笑）。だよな～。はつきりしないとな」

「付き合うの？」

「いや、それはない。だから困ってるんだよ。

だって俺、告白されたワケでもないのに、何て言えばいいんだよ」

「あー、そうなんだ。それは困るね。

『キミのこと、好きじゃないんだ』

『私もあなたのこと好きじゃないわよ』

なんて言われたら、かなり恥ずかしいよね（笑）」

「だろ（笑）？」

「あはは、悩めるアイドルだ（笑）」

個室は、4人用だった。

掘りごたつで、足がラクちゃん。

もう夜の8時を過ぎていた。

「やばい俺、相当腹減ってる」

「おー、食べ食べ」

翔ちゃんとの会話は、予想以上に面白かった。

あたしが全然知らない芸能界の話は、とくに興味があった。

華やかな世界で活躍している人たちの生活、実はみんな普通の人だったり、忙しいようでもきちんと休みをとっていること。

翔ちゃんも、デビュー当時はめちゃくちゃ忙しかったみたいけど、今はきちんと休みが取れてること。

メンバーは本当に仲がいいこと。

ロケは面倒だけど、楽しいこと。

コンサートは最高に快感だったこと。

何よりも、雷神という仲間と一緒に仕事ができる喜び。

話している翔ちゃんは、キラキラしていた。

「いいなあ、芸能界！そういう道もあるんだよね、全然頭になかったよ、あたし。別世界の人たちだと思ってたから」

「お前だって、この歳で社長だぜ、年収1千万の。そっちのほうが凄いと思うけど？」

「でも、あたしには仲間がないもん。スタッフはみんな、やっぱりスタッフだもん」

「そうか…」

「だから羨ましい、雷神。あたしも入れて！」

「（笑）いいよ、入れ入れ！」

「（笑）」

料理はどんどん運ばれてきた。

翔ちゃんが適当にガンガン頼んで、

「これ全部食べるのか？」と思うほどの量だった。

「さっきさ、行き詰まってるって言ってたけど、何で？」

翔ちゃんが手羽先にかぶりつきながら言った。

「行き詰まってるよー。全然仕事にならないの。
ビックリするくらい書けない」

「書けない？」

「うん。あ、こないだは仲介業の仕事って言ってたけど、ほかにも
仕事してんのね。書く仕事なんだけど、それがうまくいってないの。
仕事自体はたくさんあるんだけど、思うように出来ないの。書けな
い」

「書くことが…」

翔ちゃんは手羽先を置いて、おしぼりで軽く手を拭いた。

「うん。書くっていつでも色々なんだけど。」

キーワードに添った記事を書いたり、物売るための記事を書いた
り、情報売るための文章を書いたり。

やっぱり『売る』ための文章は難しいよね。

本当に心理戦なんだよね。

書き手と読み手の心理戦。

テクニクがたくさんあってさ、それを駆使して書いてるんだけど、そういうことをしていると、自分が何を伝えたいのか、どんどんわからなくなっていくんだよね。

そこで、ドつぼにはまるとなかなか抜け出せなくて、言葉が全然出てこなくなるの。

今は…その状態かな」

喋りながら、美香は益田の言葉を思い出していた。

伝わらない。

弱い。

手抜き感がある。

軸がぶれている。

冒頭の言葉が読みたいと思わない。

練りに練った文章を酷評されるのは、かなり堪える。

それでも、いつも益田は言う。

「才能があるから言うんです。ここを乗り越えれば、もっといい文章が書けるようになりますよ」

その言葉も、だんだんと効力を無くしてきているのかもしれない。

ある程度の年収を手にとると、その先の目標を見つけることが難しくなる。

しかし、目標がなければ現状維持はできない。

もっともっと高みを目指さなければ、今の生活だって維持することはできないのだ。

二人とも、ビールやらワインやらを飲んですっかりほろ酔いになってしまった。

「酔い醒ましに歩いてこうか。送るよ」

店を出ると、翔ちゃんはポケットに手を入れて歩き始めた。

「ちょっと、お金払わせてよー！ほらってばー！」

美香は1万円札を翔ちゃんの前に突き出した。

「いって。俺が誘ったんだから」

「だって、あたし飲んだもん、結構」

「（笑）確かに、お前は飲んだな、飲みすぎだって！でも、知らない」

突き出した1万円札をすり抜けて歩き始める。

「じゃあ、今度おごらせて？」

諦めた美香は、頼んだ。

「お、サンキュー」

「ご馳走様でした」

頭を下げて、美香も横に並んで歩く。

少し酔っているから、少し遅れる。

気がついた翔ちゃんは、少し待って、美香のペースにあわせてまた歩く。

（男、なんだなあ）

こういうちょっとしたことで、男を感じるのは、女にとっては当たり前だ。

（健太郎も、そうしてくれてたっけ…）

また、思い出してしまった。

風が気持ちいいとか、かなり飲んだとか、そんな話をしていたら、マンションが見えてきた。

入り口まで着いた時、翔ちゃんがカバンからMDプレイヤーを取り出した。

そして、プレイヤーから取り出したMDを差し出した。

「はい。あげる」

「？ 誰の？」

「（笑）俺のだよ。あ、ってか、雷神の曲。
新しいアルバム入ってるから」

「あ…そっか。あたしそっいえば、まだ1曲も知らなかったよね（
笑）」

「聞いてみて。気分転換になるかも」

行き詰まっているあたしを気遣ってくれたのだろうか。

お礼を言って別れた。

第7章：ギャップ

あの飲み会から、もう1週間になる。

翔は、仕事中にでも美香のことを考えるようになっていた。

コウに番号を渡してもらおうよう、頼んではみたものの、やはり自分で渡したほうが良かったか。

いや、でもサエの前では面倒なことになるかもしれない。

あれから1週間もたつのに、一向に美香からの連絡はない。

翔は、よほどのことがない限り、メールアドレスや電話番号を他人に教えない。

1度や2度会っただけの人に教えるということは、まずありえない。

ましてや、女性には。

いろいろなところで言いふらされるとまずいというのもあるが、自分から番号を教えてもいいと思うほどの女性と出会っていないと言ったほうが正しいかもしれない。

しかし、美香は別だった。

一度目は、キャリアウーマンのような雰囲気。

二度目は、素の美香を見せ付けられた。

翔は、そのギャップにすっかり参っていた。

（かわいかったな…）

一度目の印象は、

「美人」二度目の印象は、

「チャームिंग」とでも言ったほうがいいだろうか。

どちらの美香が本当なのか。

いや、どちらも本当の美香なのか。

考えれば考えるほど、また会いたいという願望が強くなっていった。

しかし、美香から連絡をもらわない限り、こちらからの連絡は不可能だ。

翔は、美香の連絡先を知らない。

（また、コウに頼むのもな…）

何度もお願ひしては、迷惑をかけるかもしれない。

翔は、とにかく待つてみた。

毎日、仕事の合間に携帯を開いては閉じ、開いては閉じ。

（あの時、トイレで書いた番号が間違っていたなんてことはないよな…？）

こんな不安まで押し寄せてきた。

雷神の夏のコンサートは、毎年行われる。

今年も、来週末から始まる。

あと数日しか、東京にはいられない。

一発目は大阪城ホール。

その次は北海道に飛ばなければいけない。

できれば大阪に行く前に、もう一度美香と会いたい。

メールが届いたのは、コンサートのリハが終わり、シャワーを浴びている最中だった。

- - - - -

こんばんは。こないだはどうもね。

コウちゃんから番号もらいました。

忙しくてなかなか連絡できなかったんだけど、翔ちゃんも今仕事かな？

あたしの番号は、090 - x x x x - x x x x

では、またね！。

ミカ

- - - - -

この時の幸せな気持ちといったら、何だろう。

たった一つのメールに、これだけの気持ちになるなんて、久しぶりかもしれない。

- - -
メールありがとう。

俺はさつきまで仕事。

今何してんの？

翔

- - -
今、ドライブ中。

あたしももう仕事疲れたから辞めた！

1週間缶詰だったんだよ…

- - -
1週間も？すげーな。

メシ食った？あ、ドライブ中だったか。

じゃあ一人じゃないんだ

- - -
一人だよ。一人ドライブ（笑）

ご飯はこれからだよー

- - -
ドライブ中というのに、一瞬戸惑ったが、一人と聞いてホッとした。

なんだか、こういうちょっと緊張しながらのやりとりは気恥ずかしい。

（あ、いた！）

俺は、思わず手を振ってしまっていた。

新宿で、まさかこんな行動を取るとは。

一瞬、周りが気になったが、割と気がつかれていないようで安心した。

「乗って乗って」

視線の先には、ベンツのGLがあつた。

（デ、デカイ）

紛れもない左ハンドル。

（こんなの乗り回してんのかよ！？）

美香という女性が、どんどんわからなくなってきた。

車を止めた場所は、マンションの地下駐車場だった。

かなり立派なマンション。

翔は自宅住まいだから、

マンションのことを詳しく知らないけれど、おそらく相当の家賃なのだろう。

1千万のベンツ、高級マンション。

やはり、美香は社長なのだ。

「女の子でベンツ乗り回して、20万のトコ住むって、すげーよ」

「うーん。仕事しまくってきたからなあ。

走ってきたんだよね。とにかく、もうめちゃくちゃ走ってきた（笑）。

んで、今はちよつと停滞気味かな」

「…そうなんだ」

「社長ってさ、思ったよりタイヘンだった（笑）。

ヒマなのかと思ってたけど、結構やることあって、社長概念がくつがえったよ（笑）」

『めちやくちゃ走ってきた』と、笑いながら言う美香が、なぜかとても愛おしく思えた。

並んで歩けば、俺よりも背が低い。

歩幅も狭い。

細い腕、細い身体からは想像もできないような苦勞をしているのかもしれないと思ったら、つい美香に触れてしまった。

「翔ちゃんってさ、紛らわしいよね」

「翔ちゃんって、サエちゃんのこと好きなんでしょう？
それなのに、あたしと一緒にご飯食べるの？」

「え？サエ？いや、好きじゃないよ」

「じゃあなんで、コウちゃんに頼んだの？」

「……」

「30秒以内に答えて」

突然の質問。

それも、自分でも迷っている部分に美香が触れてきた。

コウに頼んだこと、それは間違いなくサエのことがあったからだっ
た。

サエがもし、あの場にいないければ、俺は自分で番号を教えていたに
違いない。

「ごめん」

「うん」

「サエの前で渡すと、いちいちうるさいから。
それでコウに頼んだ…のかも…」

「サエちゃんは、翔ちゃんのこと好きなんだ？」

「や、それはよくわかんないけど…」

「そっか…。あたしにはそう見えたけど…」

「うん、みんなにも、そう見えてるみたい」

翔ちゃんの言葉に、思わず美香は吹き出した。

「ちょっと！そんなんじゃない（笑）男ならはつきりすれば？」

「（笑）。だよなー。はつきりしないとな」

「付き合うの？」

「いや、それはない。

だから困ってるんだよ。

だって俺、告白されたワケでもないのに、何て言えばいいんだよ」

「あー、そうなんだ。それは困るね。

『キミのこと、好きじゃないんだ』

『私もあなたのこと好きじゃないわよ』

なんて言われたら、かなり恥ずかしいよね（笑）」

「だろ（笑）？」

「あはは、悩めるアイドルだ（笑）」

笑う美香を横に、俺は決心した。

（サエとのこと、はつきりされなければ…）

個室は、この間メンバーと来た時とは違う部屋だった。

（そりゃそうだ。人数が違うもんな）

向かい側に座った美香を見て、思った。

（正面から見るのって、初めてかもしれない）

初対面るときも、二度目るときも、さっきの車も、歩いてきた今も、俺はいつも美香の横にいた。

正面を向いてまともに見たのは、今がはじめてかもしれない。

メニューを見る美香のまつげは、長かった。

どうしてこんなに肌が白いんだろうか。

化粧もそれほどしていないようだ。

多くの女優を見てきているけれど、みんなそれなりに化粧をしている。

ナチュラルメイクに見えるような、厚化粧。

美香のは、本当に化粧をしているのかわからないくらい、ノーメイクに近い。

アイラインも引いていないようだし、マスカラも塗っている感じはない。

スツと通った鼻の下には、形の良い唇。

（口紅は、少し塗ってるのか）

そう思った瞬間に、またドキッとした。

今日だって、ノースリーブのタンクトップとひざ上の黒いパンツだ。

特別おしゃれをしている様子もなく、どちらかというとラフな格好。

ベントのGLに乗って、着飾る様子もないのに、口紅だけは少し塗っているのかと思ったら、急に美香が女性らしく思えてきた。

そんなことを考えながら、俺は仕事の話をしていた。

表情をクルクル変えながら、俺の話を聞く美香をもっと見ていたい

と思いながら。

美香の仕事の話は、俺にはあまり理解ができなかった。

もちろん、仲介業というビジネス自体も理解できていないし、そのほかのライティングの仕事もどいう内容なのかわからなかったから、抱えている悩みの半分も理解することができていないと思う。

まだまだ、知らない美香がいる。

こう思った瞬間に、もっと知りたいと思った。

来週末からのコンサートのことが頭をよぎり、しばらくは会えないかもしれないと思ったら、急にテンションが下がったけど、それは仕方が無い。

美香も仕事をしている。

俺も、仕事をしている。

「ちょっと、お金払わせてよ！ほらってば！」

「いって。俺が誘ったんだから」

「だって、あたし飲んだもん、結構」

「（笑）確かに、お前は飲んだな、飲みすぎだって！でも、いらない」

「じゃあ、今度おごらせて？」

覗き込む美香にドキッとしながらも、予想通りの展開に喜んでいた。

（美香のことだから、払いたがるだろうな）

別に、次をおごってもらいたいわけじゃない。
次だって、俺が払うつもりだった。

でも、美香のことだ。

必ずそういう展開にもってくると思っていた。

ちよつぴり勝者の気分を味わいながら、美香のマンションの前まで行った。

雷神のMDを受け取る美香との別れは、なんだかとても寂しかった。

もっと話したいけど、明日も仕事だ。

「メールするよ」

微笑んで頷く美香に、俺はもう恋をしていたのかもしれない。

第8章：誘い

美香はCDショップに来ていた。

雷神のCDを探していた。

ネットならアンダーグラウンドでどんな音源でも、無料でダウンロードできる。

ただし、これは違法なことだ。

さすがに、今回は手を出せない。

友人の曲となれば、お金を出して買うのが一番だ。

あの夜、部屋に入ってすぐにMDを聴いた。

CDではなく、MDだから歌詞カードがない。

たまに、ラップの部分で何を言っているのかわからないところがあったのが気に入らないが、1時間ちよつとの間に美香の仕事は不思議とはかどった。

残念だったは、どの声が翔ちゃんなのかが全然わからないことだ。

翔ちゃんの声を一生懸命思い出しても、どうしても歌の中では聞き取ることができない。

一人一人のソロの部分でも、わからないのだ。

（確かめなくては）

CDを買うのは、本当に久しぶりだ。

もう何年も買ってない。

聞いたこともないような歌手のCDがたくさんある。

その中で、雷神のCDを探すと、結構たくさんあった。

「あるじゃん」

そこで、ハッとした。

（あのMDは、何ていうアルバムなんだ？）

（そもそも、アルバムなのか？）

そういえば、一つ一つの曲の題名もわからない。

MDというのは、結構面倒臭いのかもしれない。

美香は携帯を開き、翔ちゃんに電話した。

コールが3回のところで、翔ちゃんが出た。

「あ、もしもし？美香なんだけど…」

「うん、ちょっと待ってね」

ガタガタッと音がしたと思ったら、翔ちゃんが続けた。

「ゴメン、どうした？」

「あ、あのね、ゴメンね仕事中？」

「うん、ダイジヨブ」

「昨日のMDなんだけど、何ていうアルバムなの？」

「あー、あれ？新しいやつだよ、「時空」ってやつ。どうだった？」

「うん、良かったよ。仕事はかどったよ。音楽聴きながら仕事したの初めてだったんだけど、進み具合が全然違うからびっくりした」

「マジ？あーよかった」

「でもね、翔ちゃんがどこを歌ってるかわかんなくて（笑）」

「なにい！」

「わかんなかったのよ、ホント、ゴメン。それで今CD屋さんなんだけど、アルバム買えばわかるかと思って。したら、アルバムの名前わかんないし、困ってさ」

「そつか…。でも、アルバムの歌詞カードにも歌の担当者は書いてないぞ？」

「えー！どういうこと？」

「（爆笑）」

「じゃあ何買えばいいのー？」

「ってか、お前、アルバムの歌詞カードに歌のパート書いてあると思っただの？」

「そうじゃないの？」

「ねーだろ（笑）！」

「なんで？ そうなの？」

「そうだよ（爆）あー、マジつける。腹いてー」

「ちょっと、爆笑してないで教えてよ！ CD 買うのなんて久しぶりだから、全然わかんないんだってば！」

「はいはい、ゴメンゴメン。とりあえず……」

翔ちゃんは、一つ前のコンサートのDVDを教えてくれた。

どうやら、DVDで見ないとわからないらしい。

しかも、MDには入ってない曲のDVD。

あたしは、ちょっと腑に落ちない感じでそのDVDを買って帰った。

その日の夜中、11時頃に翔ちゃんからメールが届いた。

- - - - -
DVD、どうだった？

- - - - -
良かったよ。やっとわかったよ、正体が（笑） 翔ちゃん、ラップ
やってんだねえ。すごいねえ
- - - - -

正直、驚いていた。

昨日会っていた翔と、DVDの中にいる翔は、同じ人物とは思えなかった、というのが正直なところだろうか。

聞き取りにくいラップ、低いかすれぎみの声。

（喋ってる時の声と、歌ってる時の声、全然違うじゃん）

昨日、向かい側で手羽先を食べていた男は、本当に翔なのか。

DVDの中にいる翔は、昨日マンションまで送ってくれた男なのか。

美香は少し混乱していた。

- - - - -
今週末から、コンサート始まるんだよ

- - - - -
そうなの？じゃあ、今忙しいんじゃない？

コンサートかぁ・・・あたしは中学校以来行ってないな（笑）

- - - - -
随分昔だな（笑）9月まではスケジュールびっしりでさ。

ま、しょうがないけど

- - - - -
そうなんだ！タイヘンだぁ。DVDでも汗いっぱいかいてるもんね、
体力勝負みたいね。

頑張って！

- - - - -
『9月まではスケジュールびっしりでさ』

これは、『会えない』という言葉だろう。

美香は、ちよっぴり寂しく思いながらも、素直にコンサートの成功
を祈っていた。

「頑張れえ！あたしも、頑張る！」

美香の仕事も、ラストスパートに入っていた。

益田との打ち合わせも毎日のように続いて、修正、修正、加筆をし続けて、やっとあと一息のところまできた。

このペースでいけば、あと2週間程度で終わるだろう。

5万字にものぼるライティング。

このライティングは間違いなく500万程度の利益を生み出すだろう。

そのほかの仲介業のビジネスも、幅を広げていた。

クライアントの都合で、一つ仕事が減った代わりに、お詫びとしてそのクライアントから6つの仕事を紹介された。

信頼関係というのは、不思議なものだ。

顔も見たこともない、声も聞いたこともないクライアントが、自分を信用してほかのクライアントを紹介してくれるという流れ。

信頼というのは、簡単に手に入るものではないが、一度手にするとビジネスの幅が広がる。

もちろん、これは美香の仕事ぶりが反映されてのことだった。

ミスをしたときには、くどいくらい丁寧な対応と、寝ずにでも迅速な対応を心がけた。

スタッフのミスは、美香のミスだ。

甘えは、必ずミスにつながる。

ミスは、ビジネスを衰退させるが、信頼を勝ち取る手っ取り早いチャンスでもあることを美香は知っていた。

とにかく、このクライアントのおかげで年収が1千万円増える予定になった。

無論、美香の仕事の量も増えることになる。

スタッフの確保。研修制度の導入。指導から管理まですべてをこなしていた。

スタッフの数は、20人から50人にまで膨れ上がっていた。

ライティングの作業と平行して行わなければいけない。

随時、頭を切り替えての作業となった。

街は夏。

東京の気温は35度。

暑い夏がやってきたみたいだ。

翔ちゃんからのメールは、ほぼ毎日だった。

コンサートのこと、メンバーのこと、暑いこと、パンツがびしょびしょになったこと。

結構どうでもいいことでメールがきていた。

それはいつも夜中で、2、3回返信をして終わるという流れ。

でも、今日はいつもとは違っていた。

横浜アリーナの5連チャンが終わったら、一息つけるんだ。

そうなんだ。・・・ってか、5連チャンって、5日連続ってこと？

そう。5日連続で8公演（笑）

え????一日二回とかやんの？

そつだよ、朝から晩まで歌って踊ってる

すごい！若い！25歳、若い！

若いよ（笑）お前もだろ

お客さんって、満員御礼なの？

うん、一応チケットは全部SOLD OUTしたよ

- - -
すごいねえ、人気あんだねえ！ごめんね、ホント、知らなくて（笑）
- - -

そういえば、DVDにもたくさんのお客さんが映っていた。

みんな、うちわを持って、歓声を上げていた。

もちろん、

「翔」と書いてあるうちわもたくさんあった。

翔ちゃんは、そういう存在なんだと、改めて思ったわけ。

- - -
来てみる？コンサート
- - -

- - -
チケット、完売したんでしょ？
- - -

- - -
や、たぶんあるよ、芸能人用特別席が（笑）
- - -

- - -
いいよオ、申し訳ない！だいたい、あたし芸能人じゃないし。みんな

なチケット買って行ってるんだし。

- - - - -

あったらまた連絡するよ。じゃ、おやすみ

- - - - -

翔ちゃんは、正気だということが、3日後のメールで証明された。

- - - - -

チケット、入り口の人に頼んであるから。とりあえず8/1の夜の公演大丈夫そう？夕方6時半開演ね、横浜アリーナ。わかんなくなったら電話して。出れるかどうかかわかんないけど（笑）

- - - - -

夜でも蒸し暑かった。

天気予報では、夜も熱帯夜らしい。

梅雨明けがまだなのに、本当に地球に異変が起きているのかもしれない。

（あたしの今の状況にも、異変が起きているのかもしれない…）

キャミソールにカプリパンツ、ヒールの低いサンダルを履いて横浜アリーナにやってきた。

うちわも何も持っていない美香は、ちょっと浮いていた。

横浜自体、学生の頃以来だ。

横浜アリーナなんて、もちろん初めて。

うちわを持った女性たちがどんどん入り口に吸い込まれていく。

浮き足立つ気持ちを止められないのだろう、入り口付近にくと、みんな小走りになっていた。

一人の女性、二人組の女性、複数のグループ、カップル。

美香は、そんな女性たちのうちわを一つ一つ確認していった。

みんなそれぞれ、顔写真を貼ったオリジナルのうちわだ。

（すごい…。すごいで、翔ちゃん。本当に人気あんだね…）

美香は、なんとなく入り口に吸い込まれていく客足を見ていた。

中学生、高校生、20代、30代、40代とも思われる女性もいた。

みんなそれぞれ、チケットを買って、この日を楽しみにしてきたんだろう。

（S O L D O U T したって言うてたっけ…）

よくテレビでは、販売開始から数分で売り切れてしまうチケットもあると聞いたことがある。

雷神のチケットも、そうなのだろうか。

10分くらい立ち止まったままだったかもしれない。

美香は、意を決して入り口へ向かって歩き出した。

「チケット、お願いします。カバンの中見ますね」

（カバン？）

「あ、すみません、チケットないんですけど…。えっと…」

「チケットがなければ入場することはできません」

スタッフと大きく書いてあるポロシャツを着たお姉さんに、ビシツとした言い方で跳ね除けられてしまった。

（やばい、後ろがつかえてる）

どんどん美香の後ろに行列が出来る。

「あ、あの、藤村美香って言います。…えっと、チケットがなくても大丈夫みたいなことを言われて来たんですけど…」

お姉さんは、不思議そうな顔をした後、

「ちょっとこちらへ」と、美香を反対側の広いスペースへ誘導した。

お姉さんは、そのまま消えてしまった。

美香が立っている位置は、スタッフしか入れないようなスペースだった。

入場してくるお客さんは、美香を不思議そうな顔で見ていた。

客といういでたちなのに、スタッフの中に入っている。

さらに、浮いてしまっている。

（勘弁してよオ）

おそらく1分程度しかたっていなかったと思う。

お姉さんが壁の向こうから姿を現した。

「すみません、藤村さんですよ。どうぞ、お席までご案内いたします」

その笑顔にホッとして、美香はお姉さんの背中についていった。

（うわ、いっぱいだ…）

何万人いるのかわからない会場は、熱気でムンムンしていた。

人間が集まると放つ、独特な匂い。

薄暗い会場で、腕時計の針は見えない。

いつ雷神が登場するかもわからない会場は、演出のためにBGMが流れていた。

（これは、雷神の曲じゃないのか…？）

美香はお姉さんにお礼を言うと、案内された席にそつと腰掛けた。

目の前には、ステージ。

美香の前に何列あるのだろう。

（1、2、3、4、5…）

20くらい数えたところでわからなくなってしまった。

後ろを見上げると、2階、3階がある。

メンバーの名前が書いてあるうちわがヒラヒラしている。

その光景は、圧巻だった。

ふと視線を落とすと、そこには、50代半ばのオジサン。

（おっさんも来てるのか！？雷神のファンなのか！？）

華やかな女性たちに混じったそのオジサンは、異様な空気をもし出していた。

スーツ姿で腕組みをして、じっと前だけを見ている。

うちわなど持っているはずがない。

（なんなんだ…？）

思いながら反対側を見ると、一つ席を空けて、またスーツ姿のオジサンが。

（え？）

後ろを向けば、またスーツのオジサンが若い女性と談笑していた。

美香が座っている席の半径1mくらいは、スーツ姿のオジサンがほとんどだった。

女性はほとんどいない。

目の前に広がるきらびやかな光景と、後ろの頭上にある、華やかな景色。

美香がいる場所は、そのどちらとも違う、異様なスペースだった。

（なんか、特別な場所なのかな…？）

そういえば、芸能人が芸能人のコンサートに行ったなんて話を耳にすることがある。

そういう場合は、特別な席が用意されたりするのかもしれない。

ということは、自分がいる場所は、そういう特別な場所なのか？

（ってことは、このオジサンは、芸能人なの？）

それにしても、見覚えのない顔だ。

普通のオジサンに限りなく近い芸能人、という感じがする。

不思議な感覚に襲われていると、BGMの音量が上がった。

と同時に、会場全体がグワッと揺れた気がした。

黄色い歓声が、会場を埋め尽くしていたのだった。

第9章：サエ

翔くんにラブラブ光線を送って、もう1年になる。

サエは、タバコに火をつけて、煙を

「ふう」と上にはき捨てた。

好きで好きでたまらない。

笑った顔も、しぐさも、髪も、目も鼻も、手も、全部が大好きだ。

彼がいなければ、生きていけない。

朝から晩まで彼のことを考え、服も髪型も全部彼のためだった。

友達はみんな見守ってくれている。

だから、サエはいつも翔くんの隣にすることができる。

「告白してみたら？」

コウにこんなことを言われたことがあるが、それがだんだん現実味をおびてきていた。

本当に、チャンスがあれば告白しようと思っていた。

それなのに、あの藤村美香という女が現れたのだ。

急に、だ。

彼女に会った途端、サエは恐怖を抱いた。

あまりにもキレイな顔。

細い腕、服の上からでも分かる形のいい胸。

容姿に関しては負けを認めざるをえない。

でも、中身はサエは負けていないと思った。

女としてのしぐさや言葉使い、サエはそういうことを気にして生きてきた。

「女らしい」という言葉が大好きだった。

甘い声の出し方も、セクシーに見えるしぐさも、とにかく研究に研究を重ねながら生きてきたのだ。

だからこそ、顔だけでチャホヤされている女が気に入らない。

生まれ持った顔というだけで、翔くんの心を掴むなんて、絶対にあってはいけないことなのだ。

根元まで吸い終わらないうちに、灰皿にタバコを押し付けた。

（そろそろ行かなきゃ…）

サラサラの髪をなびかせ、横浜アリーナへと急いだ。

グッツ売り場はごったがえしていた。

とても、グッツの品定めをしている余裕はない。

（見えたものを買っしかない）

数十種類あるグッズの中から、やっと手に取ったものは、タオルだった。

（これでいいや）

タオルなんて、本当はいらない。

でも、翔くんのために少しでも役に立てることがあればという健気なサエの気持ちだった。

だから、こうしてコンサートだって自分でチケットを取ってきた。

もちろん、翔くんにも相談はしたけど、

「取れないかもしれないよ」という言葉を最後に連絡は来ていない。

メールをしても返事がない。

やっと返事があったと思ったら、

「ゴメン、疲れてるから寝かせて」という短文。

コンサートの疲労がたまってるのかもしれない。

サエは翔からのチケットを諦め、自力で入手したのだ。

オークションで2万円もした。

OLの給料は手取りで18万円。

2万円という出費は痛いが、仕方が無い。

タオルを買ったお釣りをなんとか受け取り、視線を人ごみの外に向けると、見覚えのある顔が目に入った。

（藤村美香！）

キレイな顔たちは、どこにいても目立つ。

スタッフ側のスペースに立っている彼女を係員が誘導していった。

（来てたの？）

サエは思わず息を飲んだ。

やっとの思いで混乱の中から身をよじり、スペースのあるところに
出たサエは、もう一度藤村美香を探したが、もう見当たらなかった。

第10章：雷神

雷神のコンサートは、勢いよく始まった。

黄色い歓声は、会場を揺らし、空気が一気に温度を上げた。

会場のお客さんは総立ちになり、みな一様に手にもっているものを振っている。

（た、立つのか！？）

自分も立ったほうがいいのかと思い、腰を軽く持ち上げたが、美香の周りでは誰も立ち上がる様子がない。

それを見た美香は、また腰を下ろす。

（うそ、立たないの？いいの？）

音響は美香の身体にズンズンと響いた。

雷神を見るよりも、周りのオジサンたちが気になって仕方が無い。

自分の身をどう置けばいいのか、美香は判断に困っていた。

（ど、どうしよう…）

とりあえず前を見ると、立ち上がる女性たちの頭上から、雷神が見える。

（あ、翔ちゃんだ）

黒いステージ衣装で踊る翔ちゃん。

（ここって、ちょっと高くなってるのかな…？）

立ち上がった女性たちの頭上からも見えるということとは、そういうことなのかもしれない。

（だったら、座ってても大丈夫か）

美香は、初めて背もたれに背中をつけた。

（あ、M Dの曲だ）

（これはD V Dかな？）

（あ、またM Dの曲だ。…そうか、新しいアルバムのコンサートだからM Dの曲が多いんだ）

こんなことを考えながら、美香は翔ちゃんを見ていた。

しかし、たまに見失ってしまう。

翔ちゃんだと思って見ていたら、違うメンバーだったりもした。

ラップを歌っている時は、中央に出てくるからすぐにわかる。

身をかめて、会場を挑発するように、手をあげ、かすれた低い声で歌う。

見ているうちに、美香はどんどんステージに釘付けになっていった。

曲に身体を揺らす、手をたたく、そんなことぐらいしかできなかったが、心地いい振動に身を委ねていた。

何度か、翔ちゃんはこちらを向いて手を振ったような気がした。

（まさかね、見えるわけないし）

よく

「目が合った」とか

「手を振ってくれた」とか、コンサートに行った友達が言うけれど、そんなはずがないと美香は思っていた。

きっと、ステージから見える風景は、お客さんは米粒みたいなものだ。

それなのに、手を振ったり、目があったりするわけがない。

数曲歌ったところで、MCに入った。

「どうぞ座ってくださいーい」

という合図とともに、会場がまた揺れる。

お客さんがみな一斉に座り始めた。

「今日は、アレなんですよ？ちょっと珍しいお客さんが来てるんですよ？」

「そうそう、珍しい、というよりも、『雷神もまだまだだな』って思うような」

「（笑）何それ、何？」

「いやさ、雷神の曲を1曲も聴いたことがないお客さんが来てるんだよ。本当に俺たちのこと知らないんだよ。24時間テレビで見ることないんだって！」

「マジー！！」

「そりゃあ、雷神はまだまだだね（笑）」

「え、ホントに来てんの？今いる？」

「いるいる、見つけた」

そう言った翔ちゃんは、美香に目線をやった。

その瞬間、会場全体が、美香が座っているほうを向く。

（わわわわわ）

しかし、お客さんは美香のことに気がついていないみたいだった。

美香のすぐ前に座っていた女性も、振り向いていたが、美香のことは見ていない。

（怖いから！）

「あ、ほんと？いるんだー、良かったね。これで雷神の曲も知ってもらえるってことだ」

「そうそう。っていうか、ちゃんと俺らからお客さんの顔って見えるんだぜ」

「うんうん、見える見える」

その瞬間、会場がまた黄色い歓声に包まれた。

（見えるのか）

美香はなぜか急に恥ずかしくなってきた。

MCのあとはバラードだった。

メンバーのソロもはさみ、アップテンポの曲もあり、とにかく緩急のついた曲順だと思った。

翔ちゃんを見ているうちに、昨日メールした翔ちゃんも、ここで歌っている翔ちゃんも、美香の頭をポンポンとした翔ちゃんも、全部が同じ翔ちゃんなんだと確信していた。

（頑張ってるね、翔ちゃん）

曲の歌詞の一つ一つが、美香の胸にしみる。

美香はいつのまにか、歌詞を自分のことに置き換えていた。

会社員としてがむしゃらに働いてきた2年間、起業して手探りでもがいてきた1年。

どれもとても充実した毎日で、楽しくもあり辛くもあり、悩み、苦しみ、立ち止まりもした。

そして、きっとこれからもそうしていくのだろう。

一人で起業し、一人でビジネスを立ち上げる。

益田という心強い味方はいるけれど、彼はいつも手厳しい意見を美香にふりかける。

会社員時代から比べると、考え方がだいぶ変わってしまった。

「お金よりも大切なものがある」

こう考えていたのに、

「お金がなければ大切なものを守れない」

こういう考えに変わった。

ビジネスを成功させる上で、お金への執着心は絶対に必要なことだった。

ビジネスはボランティアではない。

ボランティアのように見えても、裏では計算されつくしたビジネスなのだ。

たまに苦しくなる時もある。

「もっと楽に生きてもいいのかもしれない」

仕事を投げ出し、パソコンのない場所へ逃亡したくなることもある。

しかし、出来ない。

それは、ビジネスの破綻を意味するからだ。

ステージでは、バラード調の曲が始まっていた。

美香の目には、大粒の涙が溜まっていた。

それは、溜まりきったところで自然と流れ落ちた。

流れ始めた涙は止まらない。

どうして涙が出るのか、理由はわかっている。

ここ2年泣いていなかっただ。

たったの一度も、泣いていない。

泣きたい時も、

「泣くもんか」と歯を食いしばってこらえてきた。

深く考えないようにしてきた。

健太郎とのことも、ビジネスのことも、行き詰まったときも、寂しいときも、眠れない夜も、絶対に泣かなかった。

孤独に慣れようとしていた。

ある程度の冷酷さをもたなければビジネスは継続していけない。

自分の中にある

「甘え」は、ビジネスにとっては邪魔なだけだ。

しかし今は、ボロボロとこぼれる涙を止めるすべはない。

（泣いてしまおうか…）

思った美香は、顔を両手で押さえ、歓声も気にせずに、泣いた。

流れる涙は止まらない。

鼻水もどんどん出てくる。

急に息苦しくなり、呼吸を落ち着かせるために、胸に手をあてて何度も深呼吸をした。

そして、また涙が出る。

この繰り返しを何度続けた時だっただろう。

トントンと、肩を叩かれた。

スーツ姿のオジサンが、

「ダイジョウブ？」と言っていた、と思う。

音響のポリウムで、何を言っているのかは、口の動きで判断する
しかなかった。

美香は、ウンウンと二度頷いた。

オジサンは、ポンポンと美香の背中を軽く叩いて、また自分の席に
ついて腕組みをした。

（そうだった…。人がいたんだ…）

流れる涙をそのままにし、呼吸も乱れるほど泣いていた自分が、急
に恥ずかしくなった。

涙はまだポタポタと溢れてくる。

2年分の涙は、そう簡単に枯れないようだ。

美香は、ステージをじっと見据えたまま、流れる涙をそのままにし
ていた。

コンサートが終盤に近づいた頃も、美香の涙はツタツタと流れていた。

鼻水だけはハンカチで拭い、まだ涙はそのまま放置していた。

（化粧、めちゃくちゃになってるだろうな…）

ボーっと見つめる視線の先には、翔ちゃんが一生懸命歌っている姿があった。

（ずっと踊ってた、すごいな…）

2時間もの間、歌って踊るパワーは本当にすごい。

また、歌詞が胸に響く。

（あんまり泣かせるなー！）

美香は、また両手で顔を覆った。

枯れそうだった涙が、また溢れてきた。

長い長い人生の中で、走り続けた2年間は短いのだろうか、長いのだろうか…。

そして、本当にこれからもずっと、こんな生活を続けていくことができるのだろうか。

（だから嫌だったんだ。音楽を聴くなんて…）

ずっとずっと我慢してきたこと。

見ないようにしていた心。

音楽は、全部洗いざらい美香の前に突き出してくる。

（もう、帰りたい…）

アップテンポの曲が続いた。

この場から去りたいと思っていた美香も、なんとかステージを見れるようになっていた。

（そろそろ終わるのかな？なんか、泣かされっぱなしだったな…）

涙はやっと枯れたのかもしれない。

拭いすぎてヒリヒリと痛む頬をさすりながら、美香は身体を曲のリズムに委ねていた。

ステージから流れる曲は、美香を笑顔にした。

聴きながら、ふと思い出した。

【成せば成る、成さねばならぬ、何事も】

アンコールの後、ステージには誰もいなくなった。

そして、会場がふんわりと明るくなった。

（終わった…）

誰もいないステージを見つめていると、また肩を叩かれた。

「大丈夫でしたか？」

同じオジサンだった。

「あ、す、すみません。お恥ずかしいです」

「雷神のコンサートはそんなに感動しましたか？」

「あ、はい…。初めて来たんですけど…。とってもいいコンサートでした」

「そうですか…。しかし、そんなに泣いたら、美人が台無しになりますよ」

「あは…」

化粧のくずれを思い出して、美香は思わずつつむいた。

「では、お氣をつけて」

そう言うオジサンに、美香は微笑んで深く頭を下げた。

オジサンの背中を見ると、会場出口に並ぶ行列が視界に入ってきた。

（ありゃりゃ…）

もう少しここで待っていていよう。

思いながら、またステージに目をやった。

誰もいない。

さっきまで雷神がいたことがウソのようなステージ。

幻想から現実へ、一気に引き戻された感覚になる。

（でも、泣いたら結構すっきりしたかも）

おもむろにカバンから鏡を取り出して自分の顔を映す。

はつきりとは分らないが、化粧は完全に落ちている。

おそらく涙がつたった頬は、少し赤くなっているだろう。

（こりゃひどいな…）

軽く手で押さえてみたものの、無駄なことに気がついて諦めた。

ノロノロと歩く、出口までの列。

ゆっくりとしか続かない、大行列。

（こりゃ、帰りの電車はすごいことになってるな…）

ため息をつきながら、カバンからおもむろに携帯を取り出す。

チカチカと光る携帯を開くと着信が3件。

（現実って、本当に怖い…）

どうせ仕事絡みの電話だろう。

こんな時まで仕事から逃れられない自分に、少しゲンナリした。

諦めて履歴を見る。

翔ちゃん

翔ちゃん

翔ちゃん

3件全部、翔ちゃんからだった。

やっとの思いで外の空気を吸うことができた。

美香は歩きながら電話をかけた。

すぐに翔ちゃんは出た。

「あ、ゴメン、美香だけど…」

「うん、来てくれたんだ」

「うん…。お疲れ様。かつこよかったよ、翔ちゃん」

「ああ、ありがと…。美香は、今どこ？」

「今？帰るところだよ、駅まで歩いてる」

「マジ？ちょっと待って」

しばらく何の声もなかった。

（…？）

美香はテクテクと歩いて、交差点で立ち止まった。

「ごめん！今どこだったけ？」

「だから、帰るのに歩いてるんだってば」

「あ、そっか。この後予定あるの？」

「無いよー。帰るだけ」

「よし、メシ行こう、メシ」

「……」

「どした？」

「ゴメン…、今日は帰る」

駅まで歩いている途中、タクシーが目に入った。

（あ、タクシーで帰ろう）

わざわざ混雑する電車に乗る必要もない。

こんな時くらい横浜からタクシーで帰るのも悪くない。

OLだったら、一人で都内までタクシーで帰るなんて方法は選ばないだろう。

お金があるから出来ることだ。

こういう時、美香はいつもOLとお金を引き合いに出す。

自分を褒めるために、一番わかりやすく、手っ取り早い方法だった。

（コウちゃんのお店に行こうかな）

行き先は新宿。

そういえば、コウちゃんが一番最初にオープンしたバーだったっけ。

朝の5時まで営業しているバー。

新宿駅からの始発電車の時間に合わせているとコウちゃんと言っていた。

店内はほどよい音量でBGMが流れている。

カウンターとテーブル、そして一番奥にはカーテンで仕切られただけだけど、ソファ席。

美香は店に入るなり、いつもの席に座った。

カウンターの一番はじっこ。

ここが落ち着く場所。

店内を全部見渡せる場所。

いろんなお客さんのドラマを、ここで美香はたくさん見てきた。

バーテンのヒロは

「ビールでいいの？」と声をかけてきた。

につこりと頷いて、タバコを取り出してカウンターに置く。

ビールを一口飲んでタバコに火をつけると、

「コウ、いないよ」とヒロが言った。

「そうなんだ」

ちょっと残念だったけど、忙しいのかもしれない。

「美香、元気ないね」

ヒロがワイングラスをキュッキュと拭きながら言う。

「そう？」

「泣いてきた？」

ニヤツと笑うヒロにつられそうになってしまった。

「バレた？ タクシーの中で化粧直してきたんだけどな。やっぱり隠せないか」

「オメメ、真っ赤」

ヒロの

「オメメ」に、フフッと笑ってしまった。

この店は好きだ。

コウちゃんがいなくても、ヒロがいる。

何度となく、ここに来て一人で飲んでいた。

それがコウちゃんと知り合ったきっかけでもあった。

来たい時にいつでも来れる、あったかい場所。

ビールの次は、何も言わなくても必ずブランデーをだしてくれる。

美香の様子をみながら、チエイサーをそつと置くヒロの心遣いも、いつも嬉しい。

（なんか、やっと落ち着いた気がする）

ビールを飲み干してから、またタバコに火をつけた。

第11章：戸惑い

美香をコンサートに誘ってはみたものの、ちょっと強引すぎたかもしれないと反省していた。

（いくらなんでも、日にちも時間も勝手に決めるってのは、無理矢理だったかな…）

しかし、空いている日は横浜アリーナ最終日しかなかった。

当日チケットに賭けるには、あまりにも無謀すぎる。

（最悪、仕事の都合で来れなくても仕方が無い）

半分諦め、半分期待していた。

開演と同時に、翔は美香を探していた。

ボックス席だ。

ステージからは比較的に見えやすい場所。

照明の影響で、客席がまったく見えなくなる時もあるが、たいていは1階席なら表情まではわからなくても姿は見ることができる。

座っている美香を見つけた時は、かなりテンションが上がった。

手を振ってみたり、目を合わせようとしたけど、美香の反応は一切ない。

（反応なしだよ！）

心の中で突っ込みながら、自分をアピールしようと必死だった。

しかし、ふいに見た美香は、顔を両手で覆っていた。

（…泣いてる？）

そう思った瞬間、頭の中が真っ白になってしまった。

身体が覚えている振り付けは、身体が勝手に踊ってくれたが、肝心なラップで3回もミスをしてしまった。

一番テンションが上がる部分でのミス。

メンバーはニヤニヤ笑ってくるし、美香は気になるしで、横浜アリーナ最終日は散々だった。

（なんで泣いてんだよ…）

思いながら、俺は美香に歌ってたんだ。

顔を上げて欲しくて。

涙を止めて欲しくて。

アンコールを歌い終わってステージを降りたあと、猛ダッシュで楽屋に戻った。

携帯を開き、美香に電話をしたが、何度かけても出なかった。

（気がついていないのかも）

おそらく、折り返しがくるだろう。

（先にシャワーを浴びとくか）

さつと汗を流したあと、また携帯を開くと同時に着信が鳴った。

「あ、ゴメン、美香だけど…」

「うん、来てくれたんだ」

「うん…。お疲れ様。かつこよかったよ、翔ちゃん」

「ああ、ありがと…。美香は、今どこ？」

「今？帰るところだよ、駅まで歩いてる」

「マジ？ちょっと待って」

お疲れと肩を叩くスタッフに、笑顔で返していた。さすがに楽屋での電話はまずい。

廊下に出れば、関係者がずらっと並んでいる。

俺は、ひたすら長い廊下を人気がなくなるまで走った。

「ごめん！今どこだった？」

「だから、帰るのに歩いてるんだってば」

「あ、そっか。この後予定あるの？」

「無いよー。帰るだけ」

「よし、メシ行こう、メシ」

「……」

「どした？」

「ゴメン…、今日は帰る」

「どうしたのー？翔くん、今日ちょっとおかしいよ？ミスしてるし
ー（笑）」

「あー、あれはごまかしきれないな（笑）バレバレだよ、DVDじ
ゃカットだ（笑）」

「なんで？なんかあったの？」

メンバーの声に、俺は
「うん」としか答えられなかった。

（断られた…）

とにかく、美香が泣いているわけを知りたくて、誘ってはみたものの、断られてしまった。

どうして泣いていたのか、理由が検討もつかない。

無理矢理追いかけるわけにもいかない。

（帰るか…）

（いや…）

「新宿まで」とタクシーに乗り込んだ。

コウの店に行こう。

飲まずに家に帰るのはいくらなんでも寂しい。

美香が泣いていた理由を考えたい。

店の入り口を開けて、店内を見渡すと、タバコを吸いながらヒロと談笑する美香がいた。

（あ…）

翔は、静かに、美香の席まで歩いた。

途中、ヒロが

「あら、いらっしやい」と声をかけた。

その瞬間、美香も振り向く。

「翔ちゃん…」

明らかな戸惑いの表情。

俺も思わず表情がこわばってしまった。

「よ…」

美香は何も言わずに、またヒロのほうを向いた。

「うう、いい？」

美香の背中から声をかける。

軽く左側に視線をやった美香は、少しだけ頷いた。

「ビールでいい？」

翔はヒロの問いかけに頷くと、すぐに美香を見た。

ずっとブランデーのグラスを見つめたままの美香の顔はよく見えな
い。

ヒロからビールを受け取り、一口飲んだ後で俺は聞いた。

「なんかあった？」

美香は、大きく息を吸ったあと、にっこりと微笑んで

「なんで？何も無いよ」

と、またタバコに火をつけた。

その美香の目に俺は驚いた。

（こんなになるまで泣いてたのか…？）

「なんで泣いてたの？」

それしか聞けなかった。

いや、それを一番聞きたかった。

「なんでも無いよ」

煙を吐き出しながら言う。

「なんでもないのに、泣いたの？」

俺の質問に、美香がまたうつむいてしまった。

（なんなんだよ、全然わかんねーよ）

美香は、吸いかけのタバコを灰皿に押し付け、
財布から千円札を2枚出してテーブルの上に置いた。

そして、それを見ていた俺に

「翔ちゃん、今日はありがとう。残りも頑張ってね」

そう言うと、席を立った。

呆然と美香の背中を目で追う俺に、ヒロが言った。

「追いかけないの？」

「ごめん、後で払う」

俺はそう言って美香を追った。

タクシーを止めるために、歩道で立ち止まっている美香に声をかける。

振り向く美香の目を見る。

美香は、すぐにうつむいた。

「ねえ、美香。…どうした？」

美香は、静かに首を横に振る。

俺には、そのしぐさの意味は何もわからない。

「店で話そうよ」

俺は、美香の手首を軽く掴んで、来た道に戻った。

俺の後ろをテクテクとついてくる美香は、子供のようにだった。

入り口で手を離す。

ドアを開けると、ヒロがカウンターから、ソファ席へと目配せをした。

俺はそれに従って店の一番奥まで歩いた。

美香もゆっくりとついてきた。

第12章：理由

ヒロが声をかけたのは、翔ちゃんだった。

今、一番会いたくない人だった。

（だめだ。帰ろう…）

店を出て、猛スピードで走るタクシーを止められないでいると、名前を呼ばれた。

（もう…）

美香に声をかける翔ちゃんの顔がきちんと見れない。

静かに手をとられたまま、美香は観念して翔ちゃんの後についていった。

（何から話せばいいのかわからない…）

泣いた理由を、翔ちゃんにわかりやすく説明することが難しい。

自分の頭の中ですら、こんがらがっているのだ。

ソファへ座ると、ヒロがさっきの飲み物を無言でテーブルに置いた。

美香はすかさず、さっき飲み残したブランデーを一気に飲み干し、

「同じの、2フィンガーでロックにして」

と、ヒロを見ないで言った。

「今日、ちゃんと見えてた？」

翔ちゃんが、タバコに火をつけて言う。

「うん。見えてたよ」

「俺、何回も間違ったの、知ってた？」

その言葉に、美香は顔を上げる。

「間違ったの？」

「美香が泣いてるのが見えたから。めちゃくちゃ同様して、間違えた」

フフと、美香は微笑んでブランデーに目を落とす。

そして美香は、大きく息を吐き出してから喋り始めた。

「あのね…」

歌の歌詞を聴きながら、自分と置き換えてしまったこと。

辛かったOL時代。

起業してからの1年。

健太郎と別れても涙も出ない自分になってしまったこと。

そして、これから進むべき道への迷い。

逃げ出したい気持ち。

ビジネスのうんちくを分かっているつもりでも、まだまだ頭と行動が一致していないこと。

弱い部分を見ないようにしてきたこと。

泣かないようにこらえてきたこと。

そして、今の仕事が辛いこと…。

話しているうちに、どんどん涙は溢れてくる。

さっきあれだけ泣いたのに、それが嘘のようだった。

翔ちゃんは、ただじっと美香を見つめている。

話しているうちに、胸に詰まっている思いの理由がわかった。

（誰かに話したかったんだ…）

（わかってもらいたかったんだ…）

第13章：愛しさ

ボロボロと泣きながら話す美香を、翔はただじっと見ていた。

指でぬぐいきれないほど溢れる涙を、それでも抑えようと頬を覆う美香。

呼吸を整えながら、少しずつ話す美香をすぐに抱きしめたいと思った。

しかし、ここは店だ。

翔は、行き場のない両手を理性で押さえつけながら、美香を見つめていた。

タクシーの中は、二人とも無言だった。

翔の横で、窓の外を見ている美香の目からは、まだ時折涙がこぼれる。

反射する窓越しに、そんな美香を見た翔は、思わず自分の横にある美香の左手を取って引き寄せた。

びっくりして身体を離そうとする美香。

翔は美香の左手を掴んでいた手を離し、肩を抱いた。

一瞬、戸惑いの目。

そのあと、翔の胸に顔をうずめて、震えるほど泣いた。

「つきましたよ」

運転手の声に、翔は返した。

「もう少しドライブしてもらったことって出来ますか？」

察した運転手は、何も言わずにギアを入れ直した。

翔の右手に触れる細い肩は、乱れる呼吸のたびに、上下した。

頭をなで、自分の頬を美香の髪につける。

愛おしさのあまり、髪に口づけをする。

（何もしてやれることはないのか…？）

翔は震える美香のために、自分ができることを考えていた。

気がつくと、美香の肩の上下が規則正しくなっていた。

（寝てる…？）

「運転手さん、すみません、さっきの場所までお願いします」

20分ほどたってからだろうか。

翔は美香の頭を優しく撫でた。

目を覚ました美香は、急に顔を上げた。

翔の顔と美香の顔の距離は、20cmもないだろう。

我に返った美香は、

「ごめん」と翔から身体を離れた。

「大丈夫？」

覗き込む翔に、美香は照れくさそうに笑った。

料金を払おうと財布を出した美香の手の上に、翔はそっと手を乗せて「おやすみ」と言った。

数秒後、微笑んだ美香は

「ありがとう。おやすみ」

とタクシーを降りた。

右側にいた、さっきまでの暖かさを思い出しながら翔は腕時計を見た。

午前1時を少し過ぎていた。

第14章：前進

翔ちゃんの前で泣いた数日後、美香は戦闘服に着替えていた。

髪はアップ。新調したばかりのスーツに袖を通し、キレイに磨かれたパンプスを履いて部屋を後にした。

（ビジネスの悩みは、ビジネスでしか解決できない）

何も言わずにずっと話を聞いてくれた翔ちゃんに美香は本当に感謝していた。

話せただけで胸がスツと撫で下ろされた気持ちになった。

翔ちゃんに伝わってなくてもいい。

つかえていたものは、半分ほど涙と一緒に洗い流されたようだった。

（あとの半分は…ビジネスの問題だ）

高層ビルの35階がセミナー会場だった。

エレベーターを降りると、小さな会議室の前に張り紙がしてあった。

美香よりも稼いでいる起業家が主催するセミナー！。

成功者の話を聞くには、セミナーに参加するのが手っ取り早い方法だ。

美香は大きく深呼吸をして、ドアを開けた。

時には、一日に3つものセミナーをはしごした。

セミナーが無い日には、スタッフの研修をしたりし、美香は精力的に動いていた。

もちろん、美香自身が作業をしなくてはいけないライティングの仕事

事もある。

そのライティングも、すでに終盤戦。

マラソンで言う一番苦しいとされている35km地点はぐつと過ぎている。

（ラストスパートだ）

大好きな酒も飲まず、昼はセミナーやスタッフ研修、夜はライティングという毎日を送っていた。

翔ちゃんからのメールはこない。

おそらくツアーで忙しいのだろう。

（次に会うときは、笑っている自分でいたい）

それだけを考え、また、それが自分のためにもなると信じて、仕事に没頭していた。

セミナーは思っていたよりも面白かった。

やはり、それなりの稼ぎをあげている人たちの考えは、目から鱗がおちるようなものばかりだった。

【発想の転換をしようよ】

資産数億円の主催者はそう言っていた。

美香は、ランチのサンドイッチをつまみながら、セミナー資料を読み返していた。

（発想の転換か…）

益田もよく言っていた言葉だった。

「普通の人と同じ目線からじゃ、普通の人のようにしか稼げないんですよ。」

自分にはそんなことは無理だと思っていた時期もあったが、それも

昔の話だ。

今の美香は、着実に起業家への道を歩いている。

（まだまだ、上はある…）

付け合せのレタスまで食べ、運ばれてきたコーヒーの香りを楽しみながらタバコに火をつけた。

ゆっくりと煙を吐き出し、ふと自分の手首を見る。

（この時計とも、長いな…）

学生の頃に奮発して買った3万円の腕時計は、ずっと同じ時を歩んできている戦友だ。

シルバーの、男性用のようにゴツゴツした時計。

華奢な時計は好きではない。

ずっしりと重みがあつて、

「着けている」と思えるような時計が好きだ。

静かに文字盤のガラスを撫でて気がついた。

（あれ？…止まってる）

研修を終わらせた夕方、美香は伊勢丹の時計屋に来ていた。

止まった時計の電池交換をしようと思ったのだが、電池を交換してもらっても動かない。

「油をさしてみますか？ただ、2週間程度お預かりになります…」

店員の言葉に、迷ってしまった。

止まったままなのは、困る。

しかし、無いのも寂しい。

（でも、止まったままの時計をしててもしょうがないし……）

伝票に記入してお願いすることにした。

（直ってくれるといいんだけど……）

一抹の不安を覚えながらも、タクシーを止めてマンションへと帰ることにした。

スーツを脱ぎ、ジーパンに履き替える。

タバコに火をつけながら、パソコンでメールのチェック。

急用のメールだけは、チェックしておかないとマズイ。

100通ほどのメールの中に、益田からのものがあつた。

- - - - -

藤村様

いつもお世話になっております、益田です。

セールスレターのライティングですが、僕のほうでも修正が終わり、あとはテスト販売ということろまで来ました。

お疲れ様でした。

次の作業は、広告配信になりますね。

こちらもキャッチコピーを決める作業等ありますが、セールスレターが完成してしまえば7割は終わったも同然です。

残り、ラストパートを頑張っていきましょう！

益田

- - - - -

美香はホッとして、胸を撫で下ろした。

（終わった〜！）

正確には、まだ終わっていないが、一番苦しい作業が終わったことに喜びを感じていた。

（よし、久々に飲むか！）

冷蔵庫からビールを取り出す。

何日ぶりに飲むのだろう。

プシュっという音ににやけながら、一口を楽しんだ。

ふと、翔ちゃんの顔が浮かんだ。

（メールしてみよう）

美香は、携帯電話のカメラでビールを持った手の写真を一枚撮った。

（送っちゃえ）

- - -
うす。ミカです。

翔ちゃんはまだツアー中ですか？

あたしは・・・飲んでます（笑）。たぶん、10日ぶりくらいのビール。仕事がひと段落して、喜びのビールです（笑）

- - -
ここまで打って、手が止まってしまった。

（この間のこと、お礼を言ったほうがいいよね、やっぱり…）

急に思い出して、恥ずかしくなってしまった。

（何て言えばいいんだ？）

全部消して、また打ち直した。

- - -
うす。ミカです。

この間は。。。ごめんね、ありがとう。

ちょっと、いや、かなり恥ずかしいところをお見せして、本当にごめんなさい。

でも、あれだけ泣いて、かなりスッキリしました。

翔ちゃんがいてくれて、本当に助かった！！

ツアー、頑張れ！

ちなみに、あたしは10日ぶりくらいのビールで一人乾杯（笑）

仕事かひと段落ついたんだよね。って言っても、ゴールまではもう少しあるんだけど。

いったん、休憩です。

では、またね！。

- - - - -

送信完了の画面を確認してから、美香は二本目のビールに手をつけた。

翔ちゃんからの返信は、電話だった。

一瞬、戸惑った。

どう話していいのかわからない。

しかし、コールは鳴る。

「もしもし？」

「あ、俺だけど」

「うん」

「もう大丈夫になったんだ？」

「えへへ、ゴメンね、ホント。ありがとう。タクシー代、高かったでしょう」

「そうだな。こんどおごってもらうからいいよ（笑）」

「了解！…今、ツアー中？」

「いや、昨日終わってたんだ。これから収録」

「そっか。仕事だね。お疲れ様」

「美香は、飲んでるってことは、今日はもう仕事しないの？」

「うーん、どうだろ。とりあえず飲んでただけだから、気が向いたら仕事するかもしれないし…。しないかもしれない。なんか、今日さ、時計壊れちゃって、ちよつとショックでさー。それもあるから、やっぱり仕事しないかも」

「時計？腕時計？」

「そう。もう6年になるかな…。寿命なのかなあ」

「修理は？」

「うん、今日出てきたんだけど、なんかダメっぽい雰囲気だった。店員さんが」

「そっか。新しいの買うの？」

「うーん。出来ればあの時計がいいんだけど、ダメだったら買うしかないよね。ま、しょうがない」

こんなたわいもない会話を10分くらいして、切った。

翔ちゃんは、いつもと同じ声だった。

少し低くて、優しい声。

第15章：記念日

伊勢丹のお姉さんから電話があつたのは、午後3時過ぎだった。

「今、メーカーから時計が戻ってきたのですが、申し訳ございませんが、修理は無理みたいでした…。原因は…」

中の精密機械のナントカがナントカで、ドコソコのナニソレが駄目だったらしい。

「修理は無理」というお姉さんの言葉に肩を落とした美香は、詳しい原因など理解できなかった。

「わかりました。引き取りに行きますね」

お姉さんの難しい説明が終わるのを待つて、返答した。

なんとなく、戦友の遺体を引き取りに行くような感覚だった。

本当に大切に使っていた。

外出する時はいつも身に付けていた。

「ショックだあ……」

伊勢丹までの道を歩く。

気温は36度。

暑いなんていうモンじゃない。

気分まで悪くなってくる暑さだ。

事務的に時計を受け取ると、少し涼むために喫茶店に入った。

アイスコーヒーにミルクを入れて軽く混ぜる。

手の中にある時計は、もうその時を刻まない。

11時23分を指して、止まったままなのだ。

心の中で

「お疲れ様」とつぶやいて、カバンの中へ、丁寧にしまった。

美香は時計を買うために、新宿から電車に乗って六本木に来ていた。

特にどんな時計を買うかは決めてはいない。

(ぱっと見、インスピレーションで決めよう)

ブラブラと銀座を歩く。

何度来ても、どこになんのお店があるのか忘れてしまうのが銀座だ

った。

（新宿の2丁目のほうがわかりやすいよ）

人の流れを見ながら、道路わきの海外ブランドのお店の入り口だけを眺めながら、どこで止まればいいのかわからないまま歩き続けた。

（ダメだ。わかんない。…もう帰ろう…）

翔ちゃんから電話がきたのは、来た道に戻っている時だった。

「あ、俺。今なにしてた？」

「いまア？銀座ー」

「なに、テンション低いじゃん」

美香の低い声に翔が驚いていた。

「低いよ、めちゃくちゃ低いよ。もう今帰ろうとしてたの。電車に乗るのも面倒臭い。タクシーで帰ろうかな」

翔は、美香のテンションの低さに笑いながら言った。

「なんで？どうしたの？」

「あのねー、時計がさ、ダメだったのよ。それで、新しいのを買いにきたんだけど、どこのお店に入ればいいのか全然わかんないの。いっぱいあってさ。結局全然見てなくて。歩くだけ歩いて疲れちゃったよ」

「銀座だよな？待ってて、俺行くよ」

「えー。何分待てばいいのー？」

「うーん。１０分」

10分という時間は、微妙だ。

どうせなら30分がよかった。

喫茶店にでも入って冷たい物でも飲む気になる。

10分じゃ、喫茶店を探している間に過ぎてしまう。

美香は、プラントン銀座の前の交差点で、立ち止まっていた。

（ここの中の喫茶店にしようか…）

（いや、中に入って、喫茶店まで行って、座って、飲み物を頼んでいたら10分になってしまいそうだ…）

仕方がなく、プラントン銀座の入り口で待っていた。

炎天下で立っていたら、暑くて頭がおかしくなるに違いない。

本当に10分後、翔ちゃんから電話があった。

場所を伝えて、交差点の向こうを見ていた美香の視界に、突然翔ちゃんが見えた。

「うわッ」

「お待たせ」

黒いスキッパーに白いパンツ。

帽子を目深にかぶり、サングラスをしている。

「変装っスか？」

美香の言葉に口元がニコリと笑っていた。

ブラントン銀座を後にして、さっきまで美香が歩いていた道を二人で歩いた。

「変装しても、わかる人にはわかんと思うんだけど、大丈夫なの？」

「や、案外バレないよ」

「そうなんだア…。ってか、休み？」

「や。さっきまで仕事。あとはオフ」

「ふーん。じゃあ、時計買うの付き合ってくれるんの？」

「ははッ。そのつもりで来たけど？」

サングラス越しに見えた目は、少し垂れて笑っていた。

「女の子のブランドって、わかんないんだよな」とお店を通り過ぎて行く。

「なんかさア、いちいちお店に入らないといけないのが面倒臭いんだけど」

美香が疲れた様子で言った。

「あー。確かにね…。欲しい時計決まってるの？」

「決まってたらもう買ってるよ」

「…そりゃそうだな」

納得する翔ちゃんに、美香は吹き出した。

「あ、そういえば、翔ちゃんはどこの時計？」

「オレ？俺のは…」

左手を美香の前に出した。

その左手首にある時計には、ROLEX と書いてあった。

「ロレックス？」

「うん」

シルバーに文字盤は黒。

「えー、いいね。いくら？」

「うーん、これは…いくらだっけ。50万くらいじゃなかったかな…？」

「50万！？そんなにすんの？」

「ロレックスじゃ安いほうだよ。っていうか、ベンツ乗ってるヤツが50万を高いって言うなよ（笑）」

「だって車と時計じゃ違うでしょー。あたしの壊れた時計、3万だよ。学生の頃に買ったやつだけど…。うわー、いいなア、あたしもロレックスにしようかなア」

「じゃ、行ってみる？」

「うん。お金おろしてくるよ」

初めて入ったロレックスのお店で、美香は緊張していた。

ショーケースに並ぶ時計は、とにかく一桁も二桁も違う。

車が二台も三台も買えそうな値段。

「翔ちゃん、そっちはダメだよ。そっちは買えないってば」

高いほうのショーケースばかり覗く翔。

美香は小さな声で言いながら、美香は翔の服を引っ張った。

そんな美香に、ニヤニヤ笑いながらついてくる翔。

カバンの中には50万円ある。

A T Mに備え付けてあった封筒は、かなりパンパンだ。

50万もの大金がカバンの中に無造作に入っているかと思うと、緊張する。

そういえば、ベントを買ったときもカバンを両手で抱えて店に入った記憶がある。

並ぶきらびやかな時計たちの中で、華奢なものは美香の目に留まらない。

「これは？」

翔が指さした時計は、文字盤がピンクの、女性らしいデザインだった。

「うーん。パス。文字盤はね、黒がいいの。前のもそうだったから。あとね、ゴツゴツしたやつがいい。ちょっと翔ちゃんのもう一回見せて？」

美香は翔の左手を掴み、時計をマジマジと見た。

「つけてみる？」

翔は時計をはずして、美香に渡した。

受け取った美香は、自分の左手首にはめてみる。

「あー。文字盤がちょっと大きいなア。でも、このくらいゴツゴツしたヤツがいいなア」

時計を翔に返して、またショーケースを覗き込んだ。

「ユニセックスの、あるんじゃない？」

翔の言葉に、美香は思わずしかめっ面で振り返った。

「何言ってるの？」

美香のこわばる顔に、翔は驚いた表情で美香を見つめた。

「こんなところで何言ってるの？」

最後の美香の言葉に、翔はブブーっと吹き出した。

「お前が何想像してんだよ！」

美香の手を掴んで、別のショーケースに移る。

「ここ。ユニセックスのがあるって。男女兼用」

翔の言葉に、一瞬考え込んだ美香は、その後すぐに思いっきり吹き出した。

ショーケースの前で肩を震わせながらお腹を抱え、両手で「ちょっと待って」のしぐさをしながら、一目散に外に出た。

ついてくる翔と一緒に路上で大笑いをした。

「ごめん、ホントごめん！あたしが悪い、ホントごめん！」

大きな口をあけて笑う美香は、お腹を抱えながらよろめく。

翔の腕につかまりながら、まだ笑っていた。

「お前、バカ？」

翔も、美香の笑顔につられて笑っていた。

時計は、ユニセックスのものを選んだ。

美香の細い手首に、大きくずっしりと重みのあるデザイン。

35万円だった。

店員さんによると、翔ちゃんのとモデル違いだそう。

そういえば、少し似ている気がした。

「よし。残り15万円ある。ちょっとティファニーに行ってもいい

？」

美香は、前々から欲しいと思っていたバンゲルがあった。

華奢なアクセサリは好きではない。

どうしても、いつもゴツゴツしたものばかりを選んでしまう。

バンゲルを探していたときも、女性向けの華奢なものばかりしかなくて、やっと見つけたのがティファニーのバンブーだった。

ティファニーの滞在時間はなんと5分。

即決だった。

「こういう買い物は楽でいいよね。ピンポイントで欲しいものが決まってるさ」

「指輪とか、ネックレスとかはいらないんだ？」

聞く翔に、美香は覗き込んだ。

「欲しいよ？買って？」

その言葉に、翔は思わず立ち止まった。

「。。。お前、金持ってるだろ」

その言葉に、美香は笑いながら言った。

「持つてるよー。でも、指輪は絶対に自分で買わないことにしてるんだ」

今日は翔ちゃんにご飯をご馳走することにした。

また、翔ちゃんが予約をする。

「よくそんなにお店知ってるよねえ」

「うーん。仕事の打ち上げとかでも来るし、食事会もあるから、そういうので」

「…やっぱり、芸能人って楽しそう」

言う美香に、翔は笑った。

個室は、ちょっと変わった雰囲気だった。

普通は向かい合わせに座るのが、ソファはコの字になっていた。

「へえ、二人用ってこうなんだ」

翔ちゃんが言う。

「こつこつ、初めてかも」

言いながら静かに座った。

「なんか、斜めで向かい合って、変な感じだね」

美香の言葉に、翔ちゃんもやっとサングラスをとって優しく笑った。

「だね」

いつものようにビールを注文してから、翔ちゃんはどんどん料理を頼んだ。

「ほんと、こないだもだけど、すごい量を頼むよね。そして、完食するよね」

「オレ、食うんだよ。すっげー食うの」

「身体動かしてるから、太らないの？」

「いや、太るよ、太る。でも、太ったらまた痩せればいい」

笑いながら言う翔ちゃんに、美香も笑いながら頷いた。

「確かに」

どんどん運ばれてくる料理。

白ワインを注文する翔ちゃん。

甘い顔と、白ワインがよく似合う。

美香は、翔ちゃんのサングラスをふざけてかけてみる。

「うわ、イケイケだな」

「イケイケって（笑）」

「でも、いるな。こういう人。いるいる」

「似合つてるとか言えばいいじゃん」

「いや、コワイコワイ（笑）」

翔ちゃんの言葉に、美香は笑った。

こんなくだらない話をしていると、翔ちゃんがふいに言った。

「つけてみれば？時計」

「あ、そうだね。すっかり忘れてたよ」

「忘れんなよ！ROLEXを」

「でも、アレだね。お金なくなってスツキリしたよ。持っているとドキドキするもん。怖くて歩いてられないよ」

そんなことを言いながら、買ったばかりの時計を出して、左手首につけてみる。

「どお？」

美香は左手を翔ちゃんのほうに突き出した。

「うん、結構いいね。こついからどうかと思ったけど。女の子でもゴツイの似合うんだな」

翔ちゃんの言葉を聞きながら、ティファニーの箱もあけて、バンゲルを右手にはめた。

「うん、これでよし。…でも、アレかなア。左手は35万円、右手は5万円って、なんかチグハグだけど…」

言う美香に、翔ちゃんは言った。

「じゃあ右手にもっとジャラジャラつければ？残り30万円分（笑）」

笑う翔ちゃんの右肩を、美香は軽く叩いた。

「さっき、指輪は自分で買わないって言ってたけど、何で？」

翔ちゃんがおもむろに言う。

ちょうど美香がタバコに火をつけた時だったから、煙を吐き出してから答えた。

「うーん。自分ではね、なんとなく買わないだけだけど…。ほら、今日みたいに30万とかのを自分で買えちゃうわけじゃない。だから、全部自分で買ってたら、彼氏の出る幕ないんじゃないかと思って。だから、出来るだけアクセサリー系は自分で買わないことにしてるんだよね。特に指輪は絶対に」

「今までは？」

「あ、学生の頃とかも、自分で買ったことないの」

「モテたんだ」

「あはは。そういうわけじゃないけど。でも、自分で買った記憶ないア…。だから、今は指輪、1個も持っていないんだよね」

「ふーん。よく、女の子と違ってアクセサリーとか沢山持ってるイメージあるけど」

「あ、それが普通、きっと。あたしが特別ヘンなんだと思うよ。指輪はないし、ネックレスもピアスも1個しか持っていないもん。時計とバングルは今日買ったけど」

「ピアスも1個なの？」

「うん。今つけてるやつだけ」

美香は軽く耳を触った。

それを見た翔は

「ダイヤ？」

「うん。ネックレスもダイヤ。仕事でもつけるから、奮発したんだよね。まあ、だから1個しかないってのもあるんだけど（笑）」

「美香の彼氏は、金持っていないと無理だな」

「かなア？でも、あたしは自分の欲しいものくらいは自分で買えるからなア。…あ、でもお金の価値観とか、普通のサラリーマンとじや合わないかもしれないな…」

「でも、無駄遣いはしないんだろ？」

「うん、無駄には遣っていないと思うけど…。なんかさ、OLん時から比べたらお金に対する考え方が全く変わっちゃったから、そういう部分では、会社員の人たちとはなかなか話しが合わないことがあると思うよ」

「どう変わったの？」

「どう？うーん。言葉にすると、昔は【お金よりも大切なものがあるから、それを知っていればお金がなくても大丈夫】って思ってたんだけど、今は【お金がないと大切なものを守れない】っていう考えかな」

「難しいな」

「あはは、そうだよな」

「やっぱり今の仕事をするようになってから？」

「もちろん。ま、お金がないから起業したからさア、お金に対する考え方を変えないと自分でビジネスを発展させるって難しいよね。

ボランティアじゃないし、月給制でもないから、仕事しなきゃ無一文になるし、すればするだけお金はジャラジャラ入ってくる。

ただ、責任は全部自分で背負わなきゃいけないってのがもちろんあるから辛い部分もあるんだけど。

まあ、そこは普通のOLの何倍も稼いでるんだから当たり前のことなんだけどね。

ただ、あたしの中で、まだまだOL時代の考えが残ってて、ビジネスに対して甘えが出ちゃうんだよね。だから辛くなった時に、抜け出せなくなるの。

こないだみたいだね」

「うん…。難しいぞ、難しい…」

翔ちゃんは、少しうつむいて考えていた。

そして、言った。

「でも、辛くても美香は今の仕事を辞めたいとは思わないんだろ？」

「いや。辞めたいよ。辞めれるもんなら（笑）。ただ、もうこの生活レベルから下げられないんだよね。辞めちゃったら、またOL時代みたいにお金のない生活になるなんて、いくら今より楽だったとしても、選びたくないな。だから、辛くても踏ん張る。」

「こないだはね、もう踏ん張りがきかなくなつて、溜まつてたのがドツと出たの。」

だって、雷神の曲、いい曲ばかりなんだもん！ホント、まいったよ。

そんでさ、翔ちゃんがただ黙って聞いててくれて、嬉しかった。

溜まつてたのを、吐き出してスツキリしたかったんだと思う。

まだちょっと苦しい部分もあるんだけど、でも逃げるという選択肢は出来るだけ選びたくないから、やるしかないんだよね。

そこで、いろんな起業家セミナーを受講してさ、気がついたの。

【ゴールを見ないとダメ】ってことに。」

「ゴール？」

「そう。自分が目指したい、一番近いゴールを見ないと。

苦しさの中にいる時ってただ苦しいだけでしょ？でも、ゴールを見
ることで、その苦しさも半分になったり、乗り越えられるって思う
んだよね。

だから、一番近い将来にゴールを決めるの。

ゴールしたら、また次のゴールを決めればいいんだもん」

「美香の一番近いゴールって？」

「不動産」

「不動産？」

「そう。不動産が欲しいんだよね」

「おいおい、すげえな…」

驚く翔ちゃんの顔に、美香は

「えへへ」と笑ってワインを飲み干した。

「頑張るよオ、あたし」

美香は、今日のことをずっと忘れないと思った。

新しい時計は、今日から美香の戦友になった。

きつともつと苦しいこともあるだろう。

そんな未来の時と一緒に刻んでいく時計と出会った日なのだから…。

第16章：偶然

美香の毎日は、相変わらずだった。

セミナー、スタッフ研修、ライティング。

もうすぐ8月も終わろうとしているのに、夏らしいことは何一つしていない。

そうめんすら食べていないのだ。

夏から連想する、海、花火、浴衣など、その代表的なものは何一つしていない。

（夏が終わっていく…）

タバコをもみ消しながら、大きなため息をついた。

別に、絶対に海に行きたいわけでもない。

花火を見るのが大好きなわけでもない。

浴衣を着たいわけでもない。

しかし、どこことなく寂しい感じがする。

季節に取り残されているような、そういう感じだ。

「あ、ヤバイ。遅れちゃう」

壁にかかっている時計は、お昼を回ろうとしていた。

美香は急いで部屋を後にした。

エレベーターの中で足ぶみをしていた。

（遅刻する、遅刻する！）

美香の意に反して、エレベーターはゆっくりと昇る。

ノロノロと開くドアをこじ開け、セミナー会場のドアを開けた。

すでに、主催者の挨拶が始まっている。

（ごめんなさい…）

美香は、一番後ろのパイプ椅子に腰を下ろした。

係りの人が、パンフレットを届けてくれた。

「すみません」

今日のセミナーは特別楽しみにしていたものだ。

ビジネスの成長期の話。

やはりスーツ姿の男性が多い。

いつもと同じように、美香が一番若いだろう。

前に座っている男性たちの後頭部を眺めたあと、視線をもっと奥にやった。

壇上でマイクを持って話をする男性に、美香は思わず声を出しそうになってしまった。

（あー！雷神のコンサートに来てた人だ）

泣き止まない美香に声をかけてくれたオジサンだったのだ。

（やっぱり、エライ人だったんだア）

聞き応えのある2時間。

考えさせられる2時間だった。

今回のセミナーで、美香は確信していた。

（あたしのビジネスの方向性は間違っていない）

そう思うほど、今の美香の不安や迷いを払拭してくれる内容のセミナーだった。

パンフレットをカバンに押し込み、席を立とうとした瞬間、美香の前に誰かが立った。

「こんにちは」

見上げると、そこにはさっきまで話していたオジサンがいた。

安齋先生。

「あ、こんにちは。今日はありがとうございました」

美香はカバンを床に置いて立ち上がり、頭を深々と下げた。

「この間とは、随分違った雰囲気ですね」

「あ、覚えてらっしゃったんですか？

…お恥ずかしいです…」

「ま、誰でも泣きなくなる時くらいありますよね」

言いながら、安齋先生は名刺を出そうとしていた。

美香も、スーツのポケットから名刺入れを取り出す。

お決まりの名刺交換。

安齋先生の肩書きは、【プランナー】と書いてあった。

「お、藤村さんはIT関係ですか。ところで、女性にこんなことを

聞くのは失礼ですが、おいくつなんですか？」

「25です」

「25？」

「見えませんか？（笑）」

「いえいえ、25歳で起業しているんだと思って、ビックリしたんですよ」

「まだまだ駆け出しです」

「何年になります？」

「丸1年です」

「業績のほうは…？」

「おかげ様で。スタッフに頑張ってもらっているんで」

「何名ほどいるんですか？」

「50人です」

「ほう…。そりゃすごいですね。みんな正社員ですか？」

「いえいえ、アルバイトですよ。だから、大変です（笑）」

美香は、セミナー会場を背にして、遅めのランチを取るために飲食店を探していた。

（ご飯、麺、パスタ、パン…）

どれにしようか、いつも迷う。

ブラブラと歩いていると、

「冷やし中華」という文字が目に入った。

（決めた！）

中華料理店風の店内は、時間的なこともありさすがに客はまばらだった。

冷やし中華をオーダーすると、さっきのセミナーのパンフレットを取り出し、眺めていた。

（ビジネスの幅を広げるならば、まずは最初に基盤を整えなければ）

美香はスタッフのことを考えていた。

50名ものスタッフは全員がアルバイトだ。

主婦が半分。

半分は、本職を持っている人たちだった。

一日3時間から5時間程度しか働けないスタッフに、大きな仕事をまかせるわけにはいかない。

精神的負担になるような仕事も、任せられて嬉しい人などあまりいないだろう。

月に数万円、中には10万円以上稼ぐ人も何人かいる。

スタッフの補充をすればするほど、人数だけが多くなり、美香の仕事が増えるだけだ。

（管理の方法を変えないといけない）

半年以上一緒に仕事をしているスタッフの生活環境は、だいたい把握できている。

その生活環境に合わせて、負担にならない程度の仕事を振り分けなければいけない。

優秀なスタッフを長い間使い続けるには、それなりの対応が必要だ。

（管理かア…）

考えていると、店員さんの足音がした。

美香は、パンフレットをテーブルの隅に追いやった。

（おおー 冷やし中華、やっと食べられるー）

今年の夏、初めての夏らしいものだった。

勢いよく食べ、あっという間に完食してしまった。

（ふう。食べた食べた）

ナプキンで口を軽く押さえ、灰皿があることを確認するとカバンからタバコを取り出した。

（あれ？）

光るものは、携帯電話だった。

（あ、マナーモードにしてたんだっけ…）

着信を確認すると、見覚えのない番号。

スタッフからかもしれない。

美香は、かけ直した。

「もしもし、藤村ですが…」

「ああ、藤村さん。安齋です。良かった、今どこですか？」

「あ、安齋さん。先ほどはありがとうございました。…えっと、まだセミナー会場の近くです。ご飯食べてました」

「あ、ホントですか？もう食べ終わりました？」

「あ、はい」

「すみません、ちょっとお願いしたいことがあるんですが、セミナー会場まで来てもらうことって出来ますか？」

「あ、はい。いいですよ。じゃ、今から戻りますね」

電話を切った後、取り出しそこねたタバコの箱を見つめた。

（１本吸わせてもらおう）

エレベーターを降りると、エントランスに安齋さんはいた。

開いたエレベーターから降りる美香を発見すると、

「すみません、藤村さん。お呼びだてしてしまっ

と、なぜか嬉しそうな顔で言った。

「いえいえ」

美香は、安齋さんに頭を下げると、その隣にいたオジサンにも頭を下げた。

「あ、この方ね、ネットで流すCMを作ってる方で森本さん」

「あ、初めまして、藤村です」

またポケットから名刺入れを取り出した。

「ちょっと、掛けましょうか」

名刺交換が済んだところを見計らって、安齋がエントランスのソファを右手で指示した。

「さて、お忙しいところ呼び戻してしまったので、早速本題に入りますね。」

藤村さんは、IT関連ですよね？」

安齋の言葉に、美香は頷いた。

「でね、お仕事を是非お願いしたいと思ひまして」

「あ、はい。ありがとうございます」

言葉とは裏腹に、美香は焦っていた。

フィールドを広げる前に、スタッフ基盤をきちんと整えるべきだと考えた矢先だった。

今、大きな仕事をもらっても、果たして質のいい仕事ができるかなだっただけだ。

「まあ、藤村さんのお仕事とはあまり関係ないかもしれないんですけど、単刀直入に言いますとね、CMに出ていただきたいんですよ」

「はア……。え？私が？」

「はい。ま、CMって言っても、ネットのCMですけど」

ネットで配信されるCMのことは、もちろん知っている。

美香も益田と一緒に何度か作ったことがある。

ただ、自分が被写体になった経験はない。

迷っている美香に、安齋は続ける。

「だいたいね、3分くらい。サイトのCMなんですけどね。作成は1日で終わります。

2時間あればいいんじゃないかな。ねえ、森本さん？」

隣の森本が

「そうだね」という感じで頷く。

「で、流す期間は半年の予定。ギャラは、森本さん、いくらです？」

「20万円をお願いします」

「え！20万？」

美香は、思いつきり反応した。

2時間の撮影で20万もらえるとなると、時給10万円だ。

「どうです？」

「あ…。えっと、いくつか質問させていただきたいんですが…」

「どうぞどうぞ」

「脱ぎますか？」

美香の質問に、安齋は笑った。

「脱ぎません。一切脱ぎません」

「指導はしていただけるんですよね？その通りにすればいいんですよね？」

「もちろんです」

「怪しいわけではないですよね？」

「勘ぐりますねえ（笑）。ま、そりゃそうか。怪しくありませんよ。もし不安でしたら、撮ったあとに見ていただいで、配信されなくなったら言ってください。配信しませんから。」

その言葉を聞いて安心した。

「わかりました。お引き受けいたします」

「よし。じゃあ、撮影の日取りを決めましょうか」

一週間後、撮影は行われた。

ホテルで打ち合わせをした後に、収録現場の公園に向かった。

CMは、携帯小説サイトのものであった。

そのサイトを宣伝するために作るそうだった。

「藤村さん、携帯小説って読んだことある？」

森本が言う。

「いえ、すみません。一度も読んだことないですね…。あるのは知ってましたけど…」

「そうだよねえ、忙しいもんねえ。今ね、女子中高生の間で大ブームでさ、巨大マーケットになりつつあるんだ」

「そうですか…。ちなみに、このCM効果っていうのは、どう現れるんですか？」

「まあ、最終的にはサイトのアクセス数が伸びて、登録者数が増える。そして、利益につながるんだけど…」

「利益って、どこからの収益ですか？」

「はは、さすがE.T社長だねえ。読者が多ければ、執筆者も多くなる。

相乗効果で、いい小説が出来るんだよね。そうすると、出版社から声がかかるわけだ。

そのマージンを受け取ることが出来るし、映画化になれば、利益は計り知れないよね。

ま、アドセンス効果も少しはあるかもしれないけど、やっぱり大きいのはソコだね」

「なるほど…」

出版社と絡んでいるんだ。

ビジネスを長い目で見ると、こういう考え方が出来るということだ。

（また一つ勉強になったな…）

美香は、一人で納得していた。

森本と話している美香のところに、安齋がやってきた。

「藤村さん、ちょっとカメラの前に立ってくれる？」

美香は言われるまま、カメラの前に立った。

「はい。OKです」

カメラを持った男性の声に、

「え？もう終わりですか？」

と美香は声を出した。

「いえいえ、写りのテストが終了です」

そついうことか、と美香はさっきの場所に戻った。

「あと、これからちょっと準備に入るから、楽にしていよいよ」

安齋は、冷えたお茶のペットボトルを美香に手渡した。

「あ、ありがとうございます」

今日も暑い。

座っているベンチは、ちょうど日陰になっていた。

早速ペットボトルのふたを開けて、お茶を飲んだ。

（冷たい！おいしい！）

ゴクゴクと喉を鳴らして飲んでいた。

美香の少し前方には、カメラをいじったり、ブランコをキレイに拭いているスタッフがいた。

（あのブランコに乗るのかな…？）

ブランコに乗るなんて、相当久しぶりだ。

（恥ずかしいゾ…）

5分たっても、まだ撮影が始まる気配はない。

（長いなア…）

一人で待つ、というのは結構疲れる。

美香は、カバンから携帯を取り出した。

（翔ちゃんにメールしよう。撮影してるなんて言ったら驚くかな？）

うす、美香です。

今ねえ、都内の公園にいるんだけど、なんかネットのCM撮影やつてんの。

あたし、被写体だよ（笑）

翔ちゃんからの返事はすぐに来た。

なに、それ？グラビア？（笑）

違うよ！なんか普通の。って言っても、これから撮影なんだけど。今待ってんの。

すごいんだよ、ギャラが（笑）

CM出るだけですんごいもらえるんだねえ。

翔ちゃんもいっぱいもらってんでしょ？

ミカは、いっつも金だな（笑）。確かに、CMはギャラいいけどね。でも、俺らは5人で出るから割り勘だよ

なるほど。いくら貰うの？

- - -
や、CM自体の本当の金額はわかんないよ。全部が全部入ってくるわけじゃないから

- - -
なんだ。そうなんだ。

- - -
事務所に入って、んで、俺らに入るから

- - -
そっか、ピンはねされてんだ

- - -
間違はなく、そうでしょう（笑）

- - -
美香は、翔ちゃんからのメールにいちいち笑っていた。

数分、メールが止まったと思ったら、また携帯が光った。

- - -
サエのことなんだけど…。こないだ言われたよ。

- - -
告白されたってこと？

- - -
ううん。チケットのこと

- - -
チケット？

- - -
ミカに渡して、自分には無かったって。俺、すっかり忘れてたんだよね。

- - -
あー、それは翔ちゃんが悪いね（笑）

- - - - -

ヒヤヒヤしていた。

翔ちゃんのサエちゃんに対する気持ちは聞いている。

だから二人が付き合うことはないかもしれない。

（「言われた」とか紛らわしいこと言わないでよ！）

安堵の気持ちで胸を撫で下ろした。

（あたし…）

何故、二人のことが気になるのか。

美香は、自分の気持ち確かめていた。

（もしかして、あたし…）

翔ちゃんが好きなのかな…？

- - - - -

またメシ食おう。

いつ空いてる？

- - - - -

だいたい大丈夫だよ。連絡ちょうだいね

- - - - -

了解

- - - - -

静かに携帯電話を閉じた。

そして、複雑な心境になっていた。

翔ちゃんが好きなかもしれない。

(コウちゃん、どうしよう、コメント…)

近づいてくる足音に、美香は顔を上げた。

「お疲れ様」

「…はい」

「もう、終わりだから」

「え？」

安齋の言葉に驚いて、美香は目を見開いた。

「さっき立って撮ったやつですか？」

「いやいや、あれは違うよ。テスト。」

今、ここで携帯をいじってたでしょ？

「ゴメンね、それを撮らせてもらってた」

「い、今ですか？」

「そう」

「え？それでいいんですか？」

「iiiiiii！最高だったよ」

「……ブ、ブランコは？」

「あー。本当は使うはずだったけど、もういいや」

「そう…ですか…」

「出来たら見てもらうから、楽しみにしてて。あと、報酬はさっきの打ち合わせの通り、振り込みます」

「あ、はい。ありがとうございます」

「じゃ、お疲れ様でした。タクシー呼ぶよ」

安齋が呼んだタクシーに乗り込み、美香はマンションへと帰った。

第17章：片想い

サエは、久しぶりの飲み会にウキウキしていた。

サラサラの髪には、ちよつとだけ香水をふりかける。

スカートはひざ上15cmで、座ったら結構きわどいかもしれない。

（翔くん、悩殺かも）

何度も鏡の前で念入りにチェックする。

おしりをパンパンと叩き、スカートのシワまで丁寧に直した。

コンサート以来、彼の顔を見ていない。

サエは、今にも踊りだしそうな気持ちを抑えながら、いつもの居酒屋に向かった。

席に翔くんの姿は無い。

サエはちよつとだけガツカリして、5人の仲間に挨拶をすると、ち

よこんと席に座った。

サエの隣には、誰も座らない。

サエが望んでいる人がこれからやってくる。

みんながそれを知っているからだ。

30分後、遅れてきた翔にサエは大きく手を振った。

翔は軽く手を上げて、こちらにやってくる。

そして、だいたいサエの隣に座るのだ。

しかし…。

今日に限ってコウの隣に座った。

それも、コウに席を一つつめさせてまで、だ。

その瞬間、空気が一瞬凍りついた。

（え・・・？）

そこにいた誰もがそう思ったことだろう。

そして、サエ自身が一番そう思っていた。

「オレ、ビールね」

いつものように言う翔の姿に、サエは何も言えない。

その空気を打破するかのように、女友達の京子が言った。

「ちょっとちょっとオ、翔くんはサエの隣にいればいいんじゃないのオ？」

翔は、サエ見ずに、

「あー……」

とだけ言って宙を見た。

すぐに翔の分のビールが運ばれてきた。

乾杯で、凍りついていた空気は和む。

ほかのみんなも、空気は戻したくない。

いつものメンバー、いつもの会話が始まっていた。

サエは、スカートから
惜しげもなく露出された自分の足をずっと見つめていた。

翔はコウとばかり話していた。

サエは、その会話が気になってしょうがない。

でも、はっきりとは聞こえない。

一度化粧室に立ち、そして座っていた席を一つコウのほうに寄せた。

「どんなって、オレも詳しくは知らないけど、アレだろ、仲介業」

この席で、やっと聞き取れる。

コウの言葉に、翔が言う。

「仲介業はオレも知ってるんだけど、何の仲介してんの？」

（チュウカイギョウ？何の話だろう…）

サエは、全神経を左耳に集中していた。

「そんなの、本人に聞けばいいだろう」

「（笑）。確かにそうだ」

「いろんな仲介だよ。でも、基本的にはIT関係だろ。アイツ、パソコンのことはすげーからな。ま、パソコンに詳しいだけじゃ商売なんてやってられないけど。心理学も勉強してるみたいだぞ。ほら、あいつ物書きだからさ」

「へえ。心理学か…」

「美香のライティングはすげーよ。何回か意見聞かせてくれって言われて、読んだことあるんだけど、めちゃくちゃ上手いんだよ。なんつーか、キレイな文章じゃなくて、読ませる文章なんだよな。グイグイつとくるような。興味のないことでも読んじゃうんだよ」

美香、という言葉にサエは反応した。

藤村美香のことを話してるんだ。

そつえば、サエは美香のことをよく知らない。

美人だ、という情報しかないのだ。

仕事も、住んでいる場所も、翔くんとの関係も…。

「へえ」

「エグい言葉もガンガン使うし、下ネタもありなんだよ。」

まあ、下ネタは男に読ませるための文章を書く時に使うらしいけど、それにさ、オレが読んでる間、ずっとオレのこと見てんだよ。それで、目の動きを見てんの。どこで目が反れたかとか、泳いだか、とか。

信じられねーよ」

「すげえ」

「ま、それだけマジに仕事してる証拠だと思うけどな。アイツは基本男だから。仕事に対する考え方は」

「あー、わかる気がする」

「だから、OLの友達いねーんだよ。全部年上とか、男ばかり」

「マジ？」

「話が合わないんだろうな。OL時代の友達も全然会ってないらしいし。学生ん時の友達はあるみたいだけど。俺は会ったことないからわかんないな」

「徹底してんなア」

「付き合ってるのが起業家とか資産家だからな。だいぶ考え方が変わってるよ、アイツは。」

「ま、社長やってくんならしょうがないと思うけど、オレも気持ちわかるし。」

でも、仕事の話してると、たまに怖くなる時があるよ。

『コイツ、こんな深くまで考えてんだ』って。

前に言ってたんだけど、『自分より低い年収の人とばかり付き合くと、自分の年収も下がる』とか言ってた。こえーよな（笑）」

「でもすげえ。同い年だぜ」

「だよなー。しかもまだ起業して1年。前の男と別れてから、さらに没頭したんだよ、仕事に」

「前の男？」

「あア。名古屋の。確か付き合ってた時は美香はまだOLで。金なくてさ、全然会えなかったらしい。別れてからだっけかな、起業したのは」

「そうなんだ…」

「ま、でもあの顔だし。男はすぐに出来るだろうな」

「やっぱり、モテんの？」

「そりゃあ、顔だけならモテるだろうなア、やっぱり。でも、性格に問題アリだろ。ガサツだし、男だし（笑）。

ま、そこがいいところって言えばそうんだけどな。だからオレも付き合ってるわけだし。

へたに金持ってるから、普通のサラリーマンじゃ付き合えねえだろうなア」

「はは。確かにそうかもなア。こないだ、ロレックスの時計買った」

「（笑）。な、普通の〇しじゃできねーことだよな。ベンツ乗ってるし」

「あのベンツはすげえ。マジですげえ、見た時ビビッたよ」

「キャッシュで買ったんだぜ」

「マジで？」

「マジで。『安いのはっかりすすめられて、頭にきたからキャッシユで1千万払ってやった』って言ってた」

「うはははは！すげえ、カッケー！」

「な、めちゃくちやだろ（笑）。オレだったらできねえよ」

「オレもできないかもな。1千万キャッシユは（笑）」

翔くんが、大きな声で笑った。

（美香って、社長なの？お金持ちってこと？）

サエは、美香の素性に驚いていた。

そして、美香の話をコウと二人で楽しそうにしているのを見て、苛立っていた。

（なんなのよ、美香って…）

「ま、そんな美香も風邪引いて寝込んでるけど」

「風邪？」

コウの言葉に翔は表情を曇らせる。

「昨日から熱出してるらしい。アイツ、季節の変わり目に必ず風邪ひくの。」

美香が風邪ひいたら季節が変わる時だぜ（笑）」

「え、大丈夫なの？」

「大丈夫なんじゃね？見舞い行こうかって言ったら、『くんない』って言われたから（笑）。くんない、はねエよなあ（笑）」

言いながら、コウが席を立った。

その瞬間、サエの視界に翔が飛び込んできた。

席は一つ遠い。

サエは、こちらを見ずに無言で携帯をいじる翔を、じっと見つめていた。

「翔くん、何してんの？」

思い切って話かけた。

コウがいた席に座る。

「ん？いや、別に」

翔は携帯の画面を見られないように、自分の顔の前まで持ち上げた。

「メール？」

「…うん」

まだ、サエのほうを見ない。

スカートから伸びる足は、翔のほうを向いている。

しかし、そんなことなどおかまいなしに携帯を見つめる翔。

「誰に？」

サエは、おちゃらけた様子で携帯を覗き込んだ。

その瞬間、翔は携帯を閉じ、こわばった顔で言った。

「ちょっと待って」

そして、また携帯を開いてメールを打ち始めた。

サエは、その姿勢のまま固まっていた。

「サエ、何固まってるの？」

戻ってきたコウが言う。

「あ、ううん。なんでもない」

言いながら翔を見た。

翔は携帯を閉じ、ポケットにしまつと立ち上がった。

「オレ、帰るわ」

翔の後姿を見ているサエの目には、涙が溜まっていた。

第18章：弱気

「あんたさあ、こういう時に看病してくれる男くらい、つくっておきなさいよ」

谷村は、水枕に氷を入れながら、甲高い声で言った。

「そんなの、タニさんじゃないんだから、いないもん」

ベットで横になっている美香の低い声は、谷村には届かない。

「風邪引くたびに呼ばれてるほうの身にもなってよ。ま、どうせ暇だからいいけど。」

それより、うつさないでよね」

水枕を美香の頭の下に静かに置く。

「タニさん、今まで一度もうつったことないじゃん」

美香の言葉に、谷村は笑って答えた。

「そうだったけ（笑）」

CM撮影から2週間後、美香は見事な風邪をひいた。

スタッフの数人が辞めると言い出し、数人は連絡もつかなくなった。

スタッフ補充に駆けずり回り、手がけていたライティングのほうもテスト販売の時点で売りが上がらない。

アクセス数も伸びない、広告代だけがジャラジャラと音をたてて流れていってしまう。

益田からのプレッシャーも毎日あった。

外に出る時間も惜しみ、食事は一日に一食、ピザをとって食べていたら、見事に体調を崩した。

身体がダルイと感じて横になったのもつかの間。

寒気がしたと思ったら、たった数時間で38度まで上がってしまった。

ボーっとする身体のまま、近くの病院まで車を運転していったら、

縁石にバンパーをこすった。

その瞬間に、

「ダメだ、一人じゃダメだ」と谷村に連絡をしたのだった。

「あと、ニンニク買ってきたから。

丸ごと揚げるから食べなさいよ」

言って、またキッチンへと戻っていった。

谷村は40歳の不動産投資家だ。

女性だが、仕事ぶりは男性以上だろう。

証拠に、何億も稼いでいる。

益田の紹介で知り合い、いつも美香の相談に乗ってくれている。

まだ独身ということもあり、行動範囲が広く、考え方も美香が手本にしたいと思っている人だった。

以前、翔に語った目標も、谷村からの影響だった。

谷村はOLを辞めて、不動産投資を始めてもう15年になる。

（借金まみれだった、って言ってたな…）

億に手が届きそうな借金を、3年で完済したのだ。

そのサクセスストーリーは、聞いているだけでうっとりしてしまい
そんなものだった。

そして美香は、不動産投資の仕事に魅了されていた。

（あー、もうやだなあ。不動産投資しようかなあ…）

思っているところに、谷村が入ってきた。

「起きれる？ニンニク、スタミナつくから」

ブンブン臭うニンニクに、美香は顔をしかめた。

「これ、全部食べるの？」

「全部じゃなくてもいいけど、少しでも食べなきゃ。体力ないと治
らないよ。」

どうせまた、ピザ食べてたんでしょ」

「…なんでわかんのか…」

フォークでニンニクを食べる。

ホクホクしたお芋みたいでおいしい。

「あたしも、タニさんみたいに不動産やろうかなあ…」

ポツリと言う美香に、谷村は厳しく言った。

「あのねエ、勉強もしないうちから簡単に考えるんじゃないの。」

絶対に安心な商売なんて無いんだからね。

ましてや、今の状況も打破できないような美香が手を出したって、
うまくいく世界じゃないよ」

「う…」

美香の仕事の状況は、谷村が一番理解していた。

「あのさあ。美香はまだ起業して1年でしょ？まだ何もしてないのと同じなんだよ。」

実績だつて残してない。たった1年の実績なんて、簡単に崩れるモノなの。

それに、今の状況を解決できないようじゃ、この先も同じような状況になった時に、ほかのビジネスに手を出すことになる。

それじゃ、起業家としても投資家としても、長続きしないでしょ？」

「うん…」

「…確かに、辛いのは分かる。ビジネスには引き際もある。

被害を最小限にするために、一番いい時に撤退するのも一つの方法だけど、あんたまだ何の損害も出てないじゃない。

辛いのは、美香の感情。

ビジネスは、まだ走ってるんだよ。

そこを間違えないようにしないと」

「…そうか…。あたしの感情、か…」

「そう。辛いからって辞めてたらキリがない。

ビジネスの引き際は、感情に流されちゃダメなんだよ。

まずは、踏ん張りなさい。

この先ずっと、起業家として続けていくつもりなら、今以上に辛いことなんていくらでもあるんだからね。

この先に出会う苦しさ乗り越えるために、自分を鍛えてると思って、踏ん張りなさいよ。」

考えこむ美香に、谷村は追加した。

「そのために、男をつくんなさい（笑）」

その言葉に笑ってしまった。

「なんで男なのオ？」

「看病してくれる男って必要よオ。

はいはい、あとはいいから寝なさい。

治ったら、ローズに連れてってあげるから」

「ほんと？」

ローズ、とは、ホストクラブのお店だ。

谷村と行くホストクラブは楽しい。

行かなくなって、もう半年近くになるかもしれない。

「あたしも、久しぶりにチャホヤされたいのよね。

じゃ、ご飯は冷蔵庫に入れておくから、食べれる時に温めてね」

言って、谷村は帰った。

目が覚めたのは、その日の夜中だった。

谷村が帰ってから、しばらく考え事をしていたら、いつの間にか眠ってしまっていた。

起き上がってみると、思いのほか身体が軽い。

熱を測ると平熱に戻っていた。

（ありがとう、タニさん…）

自然と感謝の気持ちが生まれる。

汗を書いたＴシャツを着替えていると、枕元で光る携帯が目に入っ
た。

（うわー、全然気がつかなかった）

メールは２通。

翔ちゃんと、もう一通は誰からかわからない。

わからないほうのメッセージから読んだ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

お久しぶりです。サエです。コウにアド聞きました。風邪引いてるみたいですけど、大丈夫ですか？

また会いたいのので、治ったら連絡くださいね。お大事に。

サエ

- - - - -

意外な人からのメールに、ビックリしていた。

（えエ？なんで？）

思いながら、翔ちゃんのメールも見る。

- - - - -

風邪引いたって？

大丈夫？

なんか、欲しいモンあったら言って。

- - - - -

（二人とも、コウちゃんに聞いたのか…）

美香はサエのアドレスを登録してから返信した。

- - - - -

メールありがとう。ごめんね、寝ててきがつかなかった。
治ったら、連絡します

ミカ

- - - - -

これぐらいしか、返す言葉はないだろう。

(本当は、いい子なのかも…)

一度会っただけで、サエのことを誤解していた自分を少し責めた。

- - - - -

うす。今起きたー。爆睡してて、メール全然気がつかなかったよ(笑)。起きたら熱は下がってたから、もう大丈夫そう。心配してくれてありがとう。

しかし、アレだね。風邪なんてひくもんじゃないね。
弱くなる、心が。

ニンニク食わないと。

- - - - -

すぐに翔ちゃんから電話が来た。

「はいはい。何、起きてたの？」

「起きてた、起きてた。もう大丈夫？」

本当に起きてたんだろう。翔ちゃんの声は元気だった。

「たぶんね…。ニンニク食べたし」

「え、ニンニク食うと治んの？」

「わかんないけど。知り合いが油で揚げてくれて、ソレ食べたの。そしたら熱下がったよ（笑）」

「知り合い？」

「あ、うん。谷村さんっていう人なんだけど、看病してくれて」

「コウは断ったのに？」

「コウちゃんは男じゃん！タニさんは女だよ」

「あ、そっか…」

「やだよ、付き合ってもない男の人を家に入れるの」

「（笑）危険だな」

「そ。あたしが襲っちゃうよ」

「（笑）なんだよ、下ネタ嫌なんじゃないの？熱でおかしくなった

「？」

「イヤじゃないよ（笑）。って、イヤじゃないってのもヘンだけど。…そうだね、おかしくなったのかも。あはは」

たわいもない話をしたあと、

「あんま無理すんなよ」と、翔ちゃんは念を押した。

翔ちゃんの元気な声を聞いたら、なんとなく風邪が治っていくような気がする。

（コウちゃん、あたし、なんかやっぱりダメみたいだよ…）

コウちゃんの気持ちは、なんとなく分かっている。

サエちゃんが好きなんじゃないかな…？

サエちゃんは、翔ちゃんのことを好きなんだよね…。

美香は、自分の気持ちをどう処理していいのか、迷っていた。

第19章：始まり

風邪が治った美香に、谷村からの連絡があった。

「ローズ、行こ？」

谷村からの誘いは、いつも突然だ。

美香が仕事をしていても、無理矢理引つ張り出される。

お金を払うのは、いつも谷村。

だから断れないというのもあるが、今日は本当に都合が悪かった。

「タニさん、あたし今日予定あるんですよ」

「えー！なんで？どこに？誰と？」

「（笑）。言わなきゃいけないんですかあ？」

「うん、ダメダメ。言って」

「えー。勘弁してくださいよオ」

「男？男？」

「…まあ」

「彼氏？」

「彼氏じゃないですよ」

「彼氏候補？」

「…それは、わかんないですけど…」

「いい男？」

「いい男ですよ」

「誰？」

「タニさん、知らないですよオ」

「誰に似てんの？」

「誰って…。ってか、もう行かなきゃいけないから、切りますよ。ほんと、すみません。次回必ず！」

美香は慌しく準備をし始めた。

クローゼットの中をあさる。

健太郎のために買った、昔のスカートが目についた。

（スカートにしようか…）

（や。やっぱりやめとこ）

いつものように、膝上のカプリパンツを履いて、タンクトップを探すが見当たらない。

（あれ？）

走って洗濯機の中を覗く。

（うわー。いっぱいだ…）

3日も洗濯をしていない。

風邪をひいて着替えた服も、そのまま洗濯機に放り込んであった。

（まいったな…）

すぐにクローゼットに戻り、一枚くらい残ってるかもしれないと探して、出てきたものは
この間買ったばかりのノースリーブだった。

（これ…結構キワどいな…）

胸元が少し開いている。

胸が見えるわけではないが、見えそうだ。

でも、見えない。

何度も鏡の前でチェックする。

美香は、あまり露出の多い服が好きではない。

胸元が大きく開いて、かがんだら胸が見えてしまうような服は絶対に着ない。

買う時も、そこを必ずチェックする。

しかし、これは本当にギリギリだった。

（…いいか。見えないし）

腕時計の針は、夕方6時を指そうとしていた。

待ち合わせの時間は6時。マンションに着いたら連絡をくれると言っていた。

タバコに火をつけ、鏡を見ながら髪の毛をチェックする。

（こんなに長い時間、自分を見るのって久しぶりかも）

その時、翔からの着信が鳴った。

「すぐ行くね」と、美香は部屋を後にしてエレベーターに乗った。

誘ったのは、翔からだった。

ちょうど夕方からオフだと言う。

美香は、翔にたいする気持ちが恋なのか、そうでないのか正直なところ理解できないままだった。

コウにも告げていない。

サエには、風邪が治ったとメールを入れてから、3日たつが返事が来ていない。

自分がどう行動すれば良いのか、わからなかった。

丸1日悩んでから、翔にメールを返したのだった。

（楽しいことは、やっとこう！）

つまり、最後には、考えることが面倒臭くなったのだ。

「おまたせ！」

車にもたれて立っている翔に、美香は駆け寄った。

「おっ

「帽子かぶってないんだね」

いつもと違う雰囲気の翔の顔を、マジマジと見た。

何かが違う。

髪型なのか、表情なのか、見ている角度なのか、それはわからなかったけど、この間までの翔とは何かが違って見えた。

（この間までの翔ちゃんって、どんなだったけ…？）

服装も、髪型も、何も思い出せないでいた。

「ああ…。車ん中にはあるけどね。じゃ、乗って」

戸惑っている美香は、翔の声で我に返る。

助手席のドアを開けてもらう。

こういう風にされるのは、久しぶりだった。

いつも、自分が運転していた。

込みあがる感情を押さえながら、美香はシートに腰掛けた。

「ねエ、なんか感じ変わった？」

美香は、抱いている疑問をぶつけた。

「ん？オレが？」

「うん。なんか、なんか違う」

「え？何も変わってないけど？」

シートベルトを締める翔をじっと見つめた。

「な、なんだよ」

美香の視線に気づいた翔は、こちらを見た。

「髪型？顔？服？…なんだろ…帽子かぶってないからかなあ。なんか、DVDの中の翔ちゃんみたい」

「DVD？」

「うん、歌ってるやつ」

「まあ、アレもオレだからな…一応」

「うん…」

ぼりぼりと頭をかく翔ちゃんに、美香は気がついた。

（ああ、あたしの見方が変わったんだ…）

この間までの翔ちゃんの、髪型も服装も、あまり覚えていない。

だから、新鮮な感じがするのかもしれない。

美香が、初めて翔を『男』として意識した瞬間だった。

「あ、そういえばどこ行くの？」

美香もシートベルトを締める。

翔ちゃんの車は、日本車じゃない。

ちよつとゴツゴツした、外車だった。

「今日さ、流星群見れるって知ってた？」

「流星群？流れ星ってこと？」

「そう」

「えー、見たことない！」

「マジ？じゃあ、行こう」

「うわーッ！すごい！」

運転する翔ちゃんの横で、美香はオーディオを一生懸命いじっていた。

雷神のMDもある、もちろんほかの歌手のMDも。

美香は雷神のMDを滑りこませた。

照れ笑いする翔ちゃんは、ちょっとかわいい。

「あ、この曲好きだよ。この間コンサートで歌ってたよね」

「歌ったねエ。盛り上がるんだよね。誰かさんは泣いてたけど」

言う翔ちゃんを、目で責めた。

「はい、すみません」

素直に謝る姿に、美香は笑顔になる。

今日の仕事の話、夏が終わる話、冷やし中華を食べたこと、ベントをこすったこと、

CM撮影の話、タニさんの話。

翔ちゃんの話と美香の話が、うまい具合に交差する。

ちょっと渋滞にはまると、翔ちゃんはすぐにハンドルに腕を乗せて前のめりになる。

美香よりも筋肉質な腕、背中の大きさ。

美香はドキドキしていた。

（やばい、やばいよ…）

もう、この気持ちが恋ではないとウソをつけなくなってきた。

車は、奥多摩についた。

流星群を見に来ている人は、ほかにたくさんいる。

「みんな見に来てたんだあ」

車から降りた美香は、身震いをした。

山の中だけあって、かなり寒い。

ノースリーブ一枚、というのは無謀かもしれない

「寒くね？」

運転席から降りた翔ちゃんが言う。

「寒い…」

美香は右肩をさすりながら言った。

「ちょっと待って」

トランクを開けて、何やら探しているところを美香も覗き込む。

「ある？羽織るのある？」

「毛布…の一回り小さいやつだけど、持ってきた」

「えー。用意いいね」

「うん。この予定で来たから」

「あ、そうなんだ」

「いちおう、二枚あるけど、使う？」

「うん、あたし一枚でいいよ」

「だよね…」

美香は受け取ると、そのまま持って、翔と並んで歩いた。

「帽子もサングラスもいらないの？」

「大丈夫だと思うけど…暗いし。ってか、サングラスしたら見えねーし」

「あは、そうだね」

「その前に、腹減ったよ…」

さっきコンビニで買ってきたのは、パスタやら牛丼やら。一番大きなビニール袋がパンパンだ。

ほかの人たちの後に続いて、ある程度広いところまでくると、隅っこのほうに腰を下ろした。

「まず、食べよう」

美香も腹ペコだった。

温めてもらったお弁当は、まだほんのりあったかい。

「うーん、おいしい。あったかい」

「うまい！」

翔もガツガツと食べる。

「フライドポテトもあるよ。…あ、なんかベタベタになってるけど」
言いながら、二人であつという間にたிரけてしまった。

ほとんどは、翔ちゃんが食べたんだけど…。

「あー、お腹いっぱい」

「オレ、まだいけるな」

真顔で言う翔ちゃんの左肩を軽く叩いた。

「どんだけ食べるの」

微笑む翔ちゃんに、美香は見とれてしまった。

「なに？」

翔が美香を覗き込む。

その瞬間、向こうのほうで空を見上げている人たちから歓声があがった。

「あ、見えるのかも。場所移動しよう」

翔ちゃんは立ち上がって、座っている美香に手を出した。

その手をとって、美香も立ち上がる。

そして、また離れた。

美香よりも大きい手。

握った手は、あったかかった。

あつたかい手のぬくもりが、美香の手に残ったままだ。

ゴミと毛布は、翔ちゃんが持ってくれた。

人だかりから、ちょっとだけ離れた草むらに座ると、
翔ちゃんは

「はい」と言つて毛布をかけてくれた。

「ありがと……。あ、あつたかい」

毛布の感触を肩と腕で、直に感じる。

翔ちゃんは、両手を後ろについて、空を見てた。

「入る？」

そんな翔ちゃんを見ていて、自然と出た言葉だった。

「え？」

翔ちゃんは、ちょっと驚いて、ちょっと躊躇していた。

「あ、ごめん。寒くないなら、いいんだけど」

あたしは、自分が言った言葉に恥ずかしくなって、そっけなく返して、くるまっている毛布に顔をうずめた。

（なに言ってたんだ、あたし…）

顔から火が出そうだった。

その時、翔ちゃんが毛布のはじっこをひっぱって、ちょっと身をかがめて毛布を自分の肩にかけて、あたしの隣に座りなおした。

翔ちゃんは、何も言わなかった。

その無言の空気に耐え切れず、
「あったかい？」とあたしが聞くと、翔ちゃんは飛び切り優しく笑ったんだ。

「見えないねえ」

「見えねーなあ」

美香の肩と、翔の腕が触れる。

ちよつと距離をおくと、二人とも毛布からはみ出てしまう。

二人で空を見上げる。

「首がいたい…」

「いてえ…」

たまに、一緒に首をまわす。

そして、また見上げる。

こんなことの繰り返し。

急に、白い光の筋が目の前を横切った。

「あ！」

二人同時。

「見えた！」

「見た見た！」

流れ星をみたのは初めてだった。

「すごい！ありがとう……」

美香が言うつと、翔はすかさず

「誰に？」と。

「あは。わかんないけど、ありがとうって思った。ちょっとお願い
ことができるスピードじゃないけどねえ」

「思ったより、早いな」

「うん。一瞬だね、ホント」

喋っていると、また筋が横切る。

少し視線をそらすと、向こうのほうでも筋が走る。
そして、また違うほうでも星が流れる…。

「わー、いっぱいだ!」

美香は思わず、後ろで自分の身体を支えていた両手を口の前まで持ってきた。

その瞬間、後ろによろめく。

「おい」

翔は、右手で美香の背中を受け止めた。

「あ、ごめん」

体勢を立て直そうとする美香を、翔は見つめていた。

その視線に気がついた美香は、
「ん?」と目を合わせる。

「あ、あのさ…」

「うん？」

毛布を自分の肩にかけなおして、また翔を見る。

「…お、オレと…付き合ってもらえない…かな…」

今日一番の小さな声で、翔が言う。

「え？なに？」

美香は、もう一度聞きなおした。

「え…。だから…その…、お、おれと…っ、付き合って…」

言っている翔の顔は美香のほうを向いているけれど、目は美香を見ようとしていない。

「え？え？なにになに？聞こえないよ？」

「だからッ…」

翔が顔を上げて、美香を見た。

一瞬、固まったあと、

「あ！…ひつでえ…」

ニヤニヤした美香の意地悪に気がついた翔は、そのまま後ろに倒れこんだ。

美香には最初から聞こえていたのだった。

「あーもう。すんげえ緊張したのに…」

仰向けになったまま、顔を両手で隠しながら言う。

「エヘヘ、と笑う美香に、翔は寝転んだまま聞いた。

「で？いいの？ダメなの？」

「あ、何、その投げやりな言い方」

「いや、違う。そういうワケじゃない」

美香がプイツと前を向くと、翔はすぐに起き上がって美香の横顔を見た。

美香は笑っている。

「なんだよもー」

翔は、大きくうなだれた。

「うそそうそ、ゴメン」

美香は、翔の頭をなでる。

そして、一呼吸おいてから、聞いた。

「なんで？」

その言葉に、翔は一瞬考え込んで、うなだれたまま言った。

「す…好きだから…」

「どこが？」

「え…。い、いろいろ…」

「例えば？」

「……笑ったトコ…」

「あとは？」

「……泣いたトコ…」

「あとは？」

「……頑張ってる、トコ…」

「あとは？」

「え？まだ言うの？」

顔を上げた翔の目の前には、涙目の美香がいた。

「え、チヨツ、あ、ゴメン…」

焦って謝る翔に、美香は首を振った。

そして、笑顔のまま、右手の親指と人差し指で丸を作って見せた。

その瞬間、翔は美香を毛布ごと抱きしめた。

「泣くなよー。泣かれるとどうしていいかわかんないんだよ…」

翔の胸で、美香はまた首を振った。

そして、静かに顔を上げると、
「ありがとう」と微笑んだ。

また二人で毛布にくるまって空を見る。

「明日、絶対に首イタイと思うよ」

「だな…」

美香の肩と翔の腕は、さっきよりもくっついていた。

次々と流れる星たちにも、そろそろ飽きてきた頃だった。

まわりの人たちも、立ち上がり帰り始める。

腕時計の文字盤は、暗くてよく見えない。

「何時になったかな」

「行く？」

翔の言葉に美香は頷いて、立ち上がった。

毛布を軽くたたんで車までの道を歩く。

車に乗った美香は、バックから携帯を取り出して着信を確認した。

（あ、タニさんから電話きてた）

1時間前の着信に、美香は翔に聞いた。

「ごめん、ちょっと電話してもいい？」

頷く翔を確認してから、美香は携帯を開いた。

「もしもし？」

「あ、美香？あたし。ごめんねえ、お取り込み中。

あのね、こないだのやつって、もう予約しちゃった？」

「ああ、昨日予約しましたよ？」

「あ、ホント？それなんだけど、ゴメン、行けなくなっちゃった」

「えーッ！何で？」

「仕事入ったの。物件の交渉になりそうなのよ」

「仕事…。仕事なら仕方ないですよね…」

「ゴメン、キャンセルしといてくれる？…それが、今日の彼と行くとか」

言って、タニさんは

「ウフフ」と笑った。

「ウフフじゃないですよオ。あたし楽しみにしてたんですよ…」

「ごめんって。ま、そういうことだから、よろしくね」

美香は、

「もう…」と言いながら携帯を閉じた。

そんな美香を見た翔は、

「どしたの？」と軽く聞いた。

「タニさんと来週温泉に行くことにしてたの。だからあたし昨日予約したんだけど、行けなくなっちゃったんだって。旅館もさ、タニさんが指定したところで、なんか超すごそうな感じだったんだよね。エステも予約してさ、ダラダラ過ごすはずだったの。かなり楽しみにしてたんだよ…」

「…いつ？」

「来週の木曜日」

「オレ…スケジュール見ていい？」

「…どういうこと？」

言う美香の言葉には返さず、後部座席のカバンから手帳を取り出していた。

「13日？」

「かな…。木曜日から金曜日にかけて」

「…おー。スゴイ…。夜から空いてる。次の日は午後から仕事だけど」

「え？」

「オレと行こ？」

翔はハンドルに両腕を乗せたまま、こちらを見て言った。

「ええッ？」

「ダメ？」

「ダメ…って…。だって、泊まりだよ？」

「うん」

「二人で？」

「うん」

「え？」

「ダメ？」

「だから、泊まりなんだってば。部屋一個なの」

「うん」

「え？」

「ダメ？」

美香は、開いた口をふさげないまま、少し考えた。

「し、仕事って何時まで？」

「予定では3時」

「あたし、エステの予約1時だもん」

「先に行ってれば？」

「合流するってこと？」

「うん」

「…」

「ダメ？」

「…」

「ダメだったら、しょうがないけど…」

ここまでねばられて、引き下がられると、なんとなく寂しい。

「…にも、しない…?」

「ん?」

「な…なにも、しない…?」

美香の言葉に、翔が思わず吹き出す。

「なに、それが心配だったの?」

「そりゃそうでしょ」

「あ…、そうですか…。うーん、頑張るよ」

「頑張って」

申し訳なさそうに言う美香に、翔はまた笑った。

第20章：鼓動

この間こすったベンツが、昨日ディーラーから戻ってきた。

1週間で直してほしいと言ったら、二週間かかると言われた。

「じゃあ他に頼みます」と席を立とうとしたら、担当者が
「なんとかやってみます」と言った。

（出来るんなら、最初からそう言いなさいよね）

わざと腑に落ちない表情で書類に記載した事を思い出していた。

キレイに修理された愛車に乗り込んで、伊豆へ出発。

伊豆に行くのは2年ぶりだ。

OL時代に会社の女の子たちと一緒に来たのだった。
電車で、おしゃべりをしながら、あの時は楽しかった。

昔の同僚の顔を思い出しながら、カーナビにしたがって進む。

ちょっと曇り空なのが気になるが、美香の気持ちは軽かった。

（しかし、すごいタイミングだったな…）

あの時、あのタイミングで谷村からのキャンセルがあったから、翔と行くことになったのだ。

おそらく、翔と別れた後や次の日だったら、こうはなっていなかっただろう。

（恐るべし、タニさん…）

金持ちというのは、本当にすごいタイミングで物事を決断したり、偶然とも呼べるような奇跡を掴み取る。

「一般的に言われている【運】ってのはね、自分で掴み取るものなのよ」という谷村の言葉が甦る。

谷村いわく、関心を持っていることに対して、人間は常にアンテナを張っているという言う。

だから、関心のあることや絶対に成し遂げたいと思っていることに
関する情報や行動、恵まれた機会というのは、

「偶然に」起こるものではなく

「起こるべくして」起こるものなのだという。

チャンスは常に、自分の前を行き来している。それを掴めるかどうかは、

「自分がどれほどアンテナを張っているか」に左右されるのだという。

どんなことであれ、

「どうでもいい」

「関係ないし」と思っている人には、自分の目の前を通り過ぎるチャンスが見えないから、掴むことができないらしい。

そして、『本当に成功したいと思っていると、アンテナを張っているだけで、勝手に情報が飛び込んでくるし、あれよあれよという間に成功するものよ』と。

本気で成功したいと思っていれば、常に自分の脳が

「どうすれば成功するのか」と考え続ける。

「どうせ成功なんてしない」と思っていれば、脳は考えることを辞める。

この差が、成功者と敗北者の違いなのだと言う。

考え続ける脳は、答えを探し続ける脳だ。

考えることを辞めた脳は、リタイヤした脳だ。だから答えは死ぬまで導くことができない。

つまり、死ぬまで敗北者ということだ。

成功するための答えを考え続ければ、必ずヒントが生まれ、情報が手に入り、行動することが出来、成功への道のりを自然に歩むことが出来ると言う。

それに、成功するために考えた結果の答えは、見つけるものではなく、

「やってくるもの」だとも言っていた。

脳が考え続けることによって、アンテナが張り巡らされ、結果として情報を掴み取れたり、人脈を形成することが出来る。

それが、最終結果として『成功』というわかりやすい答えとなって現れるらしい。

つまり、『成功は、成るべくして成っている』ということだ。

考えもせず、努力もせず、ただ漠然と

「成功したい」

「できれば金持ちになりたい」と思っている人には絶対にチャンスもつかめないし、たとえ掴んだとしても生かすことはできないのだそう。

美香は、このことを谷村が真剣になって話す姿を思い出していた。

本当に、真面目に語っていた。

それは彼女が歩んできた道のりから出た言葉であり、とても説得力

のある言葉だった。

だからこそ、美香は谷村を手本としていたし、谷村の考えるように美香も考えていた。

しかし、良いのか悪いのか、未だに判断はつかないでいる、今日という日に関しては感謝できないでいた。

翔と一緒にいられる時間があることは、確かに嬉しい。

しかし、告白されて、まだ1週間しか経っていない。

キスもまだなのに、急に泊まりだ。

(どうなることやら...)

思いながら、裏腹な自分の行動を心で笑っていた。

この日のために、新しい洋服も買った。

しかも、健太郎と別れて以来着ることのなかったワンピースだ。

白いシャツワンピだが、とてもシックな感じのディテール。

「ベルトをすると、もっとキマりますよ」

と店員さんに言われ、そのまま選んでもらった。

自分のセンスよりも、ずっと確かなものだ。

さらに、精算している間に髪型まで教えてもらった。

「できれば…なんですが…パーマをかけなおして、ゆるくアップにしたほうがいいですよ」

と、謙虚に言われたので、すぐに美容院に向かった。

さすがに下着までは買う勇気がなかったが、昨日は新しいシャンプーで髪を洗った。

（隣に乗ってなくて良かった…）

そう思わせるのは、ワンピースの丈だった。

座ると、膝上20cmくらいになってしまふ。

これでは、自分でも恥ずかしくなる。

歩いている分には気にならない丈も、座ると気になるから面倒だ。

開いた胸元も、かなり気になったが

「大丈夫です、ギリで見えません！って言うか、すごいキレイですよ、美人ですし。女優さんみたいです」

という店員さんにのせられてしまった。

美香は、自分の極端さに呆れていた。

恋をしていないときは、スカートは絶対にはかず、シャンプーなんて何でもよかった。

しかし、恋をした途端に自分が女に目覚めていく。そして、それが何より楽しいのだ。

この単純さが、良いのか悪いのかわからないが、今のところは楽しんでおこうと思っている。

仕事は仕事。恋は恋。

そう思うことにしていた。

二時間後、着いた場所はネットで見た写真と同じ建物の前だった。

「す…スゴイ…」

美香は、思わず声に出した。

谷村から予約を頼まれた時には、電話番号しか教えてもらっていなかったから、単純に電話で予約をしただけだった。

ネットで調べることもなく、美香が予想していたのは和室でなんとなくリッチな雰囲気の旅館だった。

しかし、目の前にある建物は、まぎれもない『お城』だ。

伊豆からは連想できないような、西洋風の建物。

（タニさんて、こんなにメルヘンだったわけ…？）

思いながら、とりあえずフロントへ向かう。

丁寧に案内された部屋は、なんと…

（お、お姫様…）

目を疑うような光景だった。

西洋風の概観と同じく、部屋もすっかり西洋風。

ベツトは天蓋付、大きなソファはなんとなくゴージャスで、テーブルは丸いふちどりの外に細かな細工が施されている。

照明の一つ一つに凝っていて、さらには部屋の中の露天風呂があった。

もちろん、夜景を見ながら部屋で食事ができるようになっていた。

荷物を置くのも忘れ、美香はそのまま部屋の中を走って見て回った。

「なに…コレ…」

ここに、翔と二人で泊まるというのだろうか。

てっきり想像していた、和室に布団をふたつ並べるという状態とはかけ離れた現実だった。

係りの人が

「浴衣がありますので、好きなものを着てくださいね。それと、エステは突き当たりの…」と説明する声に、美香はポカンとしていた。

去っていく係りの人の背中を見ながら、美香はベッドに身体を預けた。

（すんげー）

手渡された、オプションプランのパンフレットを眺める。

食事メニューがほとんどの中に、バラを露天風呂に散りばめるサービスがあった。

（出た！ベタベタプラン！）

（岩の露天風呂にバラって…）

よく見てみると、なんとなくおかしい。

西洋風の部屋の中に、岩の露天風呂があるのだ。

西洋風のテーブルの上で、伊勢海老の船盛りを食べるのだ。

すごいことは確かだが、よく考えてみると、まったく統一感がない。

冷静になった美香は、クスツと笑ってクローゼットを開けた。

5種類の浴衣が並ぶ。

（ここまで統一感がないと、もはや笑えない…）

西洋風か和風か、どちらかにしてもらいたい。

もう一度、部屋を一通り回ってみる。

（やっぱり、おかしい…）

笑いをこらえながら、エステのために部屋を後にした。

大学の頃にバイトして貯めたお金で永久脱毛をした。

脇の下、腕、足。この三箇所でトータル100万円近くかかったように思う。

永久脱毛だけで、1年近くかかった。

そのほかにオプションのプランもつけて、最終的な金額に美香はバイトを増やさざるをえなかったのだ。

あの時は本当に辛かった。

何のために働いているのかわからなくなっていたが、今思うとあの時の頑張りは無駄ではなかった。

現に、こうしてツルツルの肌が今でもある。

夏でもムダ毛を気にしなくてもいい。

徹底的に処理をし、キレイにもらった脇の下は、美香がいつもノースリーブを着る理由だった。

よく電車の中で見かける、

「黒ゴマ」状態の脇の下とは違う。

何もない、本当に白くキレイな脇の下だと思っている。

「肌、きれいですね」

エステティシヤンの言葉を香水のように振り掛けられながら、美香

は気持ちよくリラックスしていた。

オイルの後は、なんだか温かい石。

足のつま先から、頭のとっぺんまでのマッサージ。

もう、気持ちが良くて寝てしまいそうだった。

「はい、これで終わりです。お疲れ様でした」

この言葉は、本当に悲しい言葉だ。

最高の気持ちよさから、現実に取り戻される瞬間。

「また自分の足で歩きなさい」と強制される瞬間だ。

すっかりまかせていた身体を、どうにか起こす。

そして、ベットから降りて、床に足をつく。

（また、歩いていかなきゃ…）

この先を、人生を。

夢のようなひと時を満喫した美香は、ゆっくりと部屋へ戻った。

部屋の時計は午後3時を指している。

しっかり2時間は夢心地でいたということだ。

しばらく放心状態でいたが、タバコに火をつけてパソコンの電源を入れた。

（結局、仕事かよ…）

翔が来るまでもう少し時間がある。

それを見越して、なんとなく持ってきたノートパソコン。

パソコンの無い生活がしてみたいと望みながら、パソコンがないと不安になる自分。

（出来ないよ、仕事を忘れるなんて）

煙を深く吸い、メールのチェックをし始めた。

受信中は、イヤなメールが来ないことだけを祈っている。

件名が

「申し訳ございません」とか

「連絡です」というのはドキツとする。

しかし、今日はまだそういうメールはない。

質問、納品、クライアントからの発注。

こういうメールは、事務的にこなすことができるから楽だ。

100通ほどのメールを処理していると、あっという間に1時間以上は過ぎる。

どんな些細なメールにも返信しなければ、あとから見た時に返信したかがわからなくなってしまうから、送られてきたメールには、必ず返信をするようにしている。

部屋の天井のスピーカーからは、BGMとして有線放送が流れてい

る。

チャンネルはどこにでも合わせられるが、やはり日本のものに落ち着く。

（やっぱり、この部屋、ヘン）

キーボードを打つ手を止めたのは、翔からの電話だった。

「あ、オレ。今ついたんだけど、部屋って？」

「うん。フロントに聞いてもらえればわかると思うけど……行くね」

美香は、パソコンをそのままにフロントへと向かった。

フロントにいる翔に声をかける。

翔は軽く手を上げて、美香のほうへと歩いてくる。

「お疲れ！」

「割と早かったねえ」

サングラスに帽子は、お決まりの格好だ。

エレベーターの中で、翔はサングラスをはずして言う。

「なに、ここ。城？」

その言葉に、美香は返した。

「部屋入って。もっとびっくりするから」

案の定、翔も各部屋を急いで周り、トイレまで覗いていた。

「なに、ここ。すげえ！」

フッフ、と笑う美香に、翔は続けた。

「…でも、なんかヘンじゃね？」

「そうなのよ…」

「この部屋に岩風呂って、アリ？まあ、嬉しいのは嬉しいけど。しかし、このお姫様ベットもすげえな」

「そうなのよ」

「誰が選んだの？」

「タニさん」

「あー、タニさんの趣味か…」

「そうなのよ…。あたしも今日気がついた。こういう趣味だったんだって」

二人で笑う。

翔ちゃんが荷物を置いてタバコの火をつけた時、美香は「ねえねえ」と、クローゼットのほうで手招きをした。

タバコを手に持ったまま歩いてくる翔ちゃんに、クローゼットを開けてみせた。

「浴衣？」

「そう。翔ちゃん、着る？」

「コレって、寝る浴衣じゃないよね。普通の浴衣？」

翔は無造作に一枚を取って、広げた。

「美香のもあんの？」

「うん。いろいろあるの」

「おー、すげー。着て着て」

翔は持っていた浴衣を投げ捨て、女性用の浴衣を選び始めた。

「あたし、今年の夏、全然夏らしいことしてないから、着たいんだよね。浴衣自体、何年ぶりかな」

「マジ？よし、着よう。今着よう」

一つ一つの浴衣を、美香の前に持ってきて選ぶ翔。

「あ、コレ。コレがいい」

選んだのは、黒地に淡いピンクの柄が入ったものだった。

「了解」

美香は、着れるのならどれでも良かった。

「翔ちゃんも着てよね。どれでもいいから」

「え？選んでくれないの？」

言う翔を背中に、美香は翔の手から浴衣を取って、さっさとトイレに駆け込んだ。

自分で浴衣を着るのは初めてだ。

しかし、やってみると案外うまくいく。

（あたし、器用なのかも）

昔、着付けを習っている友達に着せてもらったことがあったが、その時の言葉を思い出した。

「ここ。この紐だけはぎっちり結んでおけば、あとは崩れてもなんとかなるから」

帯の結びは出来ているものを差し込むだけだ。

「見て見てー！」

あまりに嬉しくて、美香はトイレから飛び出した。

その時の翔は…

「あ…」

上半身裸、パンツ一丁だった。

瞬間、美香は何も言わずに後ろを向いた。

「何やってんの！早く着て」

言いながら、たった今日に映った翔の上半身の映像が甦る。

筋肉質な肩と腕。

それと比べるとくびれた腰、でもがっちりした腹筋。

まざまざと男を見せつけられて、心臓がバクバクしていた。

「いいね、かわいい」

美香の後ろで言う翔の言葉に、振り返った。

「ちょっと！着てよ！」

「選んでよ」

翔はまだパンツ一丁だった。

そのまま、椅子に腰掛けている。

「もう！」

美香はクローゼットまで急ぎ、適当に

「これこれ」と渡した。

「ちゃんと選んだのオ？」

翔は間違いなく、美香の反応を楽しんでいた。

「選んだ選んだ。最高」

言って、美香は窓のほうに歩いて行った。

翔は笑いながら浴衣に着替えると、美香が立っている窓のほうへ歩いた。

「着たよ。浴衣じゃなかった。甚平だった」

振り向いた美香は、

「ビミョー」と苦笑いをした。

その言葉に、翔も

「だよなア、微妙だよなア」と、頭を下げて自分の甚平を見た。

6時半が夕食の時間だった。

テーブルには、コース料理がどんどん運ばれてくる。

「飲め飲めえ！」

と、シャンパンやらワインやらを、どんどん注文する。

浴衣でナイフとフォークで食べる料理。

「袖、つきそうで怖いなア……」

「まくれ、まくれ。ガーッとまくれ」

言う翔に、美香は

「やだよオ」と笑った。

いつもお腹がすいている翔ちゃんは、

「どんどん持ってきてください」と頼むと、ペロペロとたいらげた。

「追いつかないんですけど…」

翔のと一緒に美香のも運ばれてくるのだ。

美香の前には今にも冷めそうな料理が並んでいる。

翔ちゃんは、すっかりデザートまでたいらげたのに、美香の前にはまだ肉料理が並んでいる。

手つかずの料理がテーブルいっぱいに並んで、ワインのグラスを置く場所もなくなりそうだ。

「ちょっと！何一人で食べ終わってんの？」

「腹減ってた…」

「もー！」

美香は、係員に無理なお願いを言ってみた。

「すみません、この人勝手に先に食べ終わっちゃったんですよ。なんか、大きいお皿にまとめてもいいですか？」

係員は笑顔で、大きな一枚皿を持ってきた。

「まとめますね」

料理を一つの皿にまとめて、空いた皿を係員に渡した。

「あ、あとワインもう一本ください」

二本目の白ワインだ。

伊勢海老があるから、ワインもすすむ。

「なんかさ、居酒屋感覚になってきたよね」

「おばちゃん感覚だよな」

「誰が？」

「みーか」

「なんで？」

「だって、取り分けんだぜ？一つにまとめてさ、これをツマミに飲みましょう、みたいな」

「いーじゃん。誰かさんが先に全部食べたからでしょう」

「…はい、すみません」

責める美香に、翔は頭を下げた。

「もう風呂に入ったの？」

BGMをいじりながら、翔が聞く。

「ううん。まだ。エステして…仕事してた…」

「仕事？」

「なんか、時間もてあましちゃって」

「仕事してないと、不安なんだ？」

「うーん、なんとなくね…。ま、大したことしてないけど」

美香の言葉に、

「ふーん」と頷いた翔は

「ここがいいな」とやっとBGMのチャンネルを合わせた。

ワインは、二本目がなかなか減らない。

「どうだったの？エステ」

翔は、ソファに座ってこちらを見る。

美香は、タバコを吸いながら

「良かったよー！最高」と大きな声で言った。

「なに、何したの？」

「なんかねえ、オイルで全身マッサージしてえ、あつたかい石でコロコロしてえ、顔もパックしてえ、足もマッサージしてえ。…あとなんだっけ…あ、アレだ。腕のマッサージが最高に気持ちよかったよオ、ほんとに最高」

首を左右に振りながら、リズムカルに言う美香に翔は目を細めた。

「どんだけ気持ちよかったんだよ」

「もうもう、すごい気持ちよかった！たまにはいいね、やっぱり」

「普段は行かないの？」

「うん…。わざわざ行くこうと思わなかったけど、行きたくなくなったね。頑張って稼がないと」

翔は笑いながら立ち上がり、クローゼットからバスタオルを取って「風呂入っていい？」と聞いた。

美香は頷いて、岩風呂へと向かう翔を見送った。

（あ…）

オプションプランのバラを思い出した。

（今でも大丈夫なのかな）

思いながら、美香はフロントに電話をかけてみる。

「ご予約いただいていますよ」という明るい声が返ってきた。
どうやら、タニさんが追加で予約していたようだ。

（タニさん…あなたって人は…）

5分後、運ばれたバラは本物だった。

大きな紙袋いっぱいに詰まったバラは、その香りを部屋中に広げる。

受け取った美香は、翔が入っている岩風呂のドアを静かに開けて、

中を確認した。

（着替えてるってことはないよね、さすがにもう入ってるよね）

裸の翔がないことを確認して、さらに奥のドアから呼んでみる。

「翔ちゃん？」

「はい」

「ちょっといい？」

「いいよー。何、一緒に入るの？」

「ちがーう。いいものあげる」

言って、ドアを開けた。

岩風呂からは湯気が立ち上がり、中は温泉独特のムンとした熱気だった。

窓はガラスになっていて、外の景色が一望できる。
暗闇の中でも、キレイな夜景が見えていた。

「わ！すごいね、外」

「だろー」

言いながら、翔はくるっと体を美香のほうへ向けて、岩風呂の縁に両腕をあげてこちらを見上げていた。

そして、美香が持っている紙袋を見て

「何ソレ」と言った。

「いいよ、向こう向いてて。あ、あとちゃんと隠して」

美香の言葉通り、翔は窓の外を向いて、大事なところをタオルで隠した。

「いい？入れるよ？」

やっと岩風呂まで歩くと、一気に紙袋を逆さまにした。

「うわッ！なにー！」

勢いよく落下するバラに、翔はビックリして体をよけた。

「すごいでしょー」

紙袋を置いて、しゃがんで湯船を軽くかきまわす。

「なんだよコレ」

「バラだよ、バラ。バラだけにバラバラっ」と

「…?」

見る翔に、バラを一つ投げた。

「うわ。…ってかさ、いいよ、なんだよ。ヘンだよ、ヘン」

「いいじゃん、普通できないよ、こんなこと」

「できないけど…。岩風呂なのにバラア?」

美香は、笑いながら頷いた。

「なんか、今入れたくなっちゃった。ちょっとヘンだけど、いいじゃん」

「オレ、今すっかり和の気分だったのに…。岩風呂から夜景みてさ

…」

「あ、夜景キレイだねえ。あたし見たときは明るかったから、あんまり気がつかなかったけど…。」
いいねえ、夜景も見え…うわわわーッ！」

瞬間、美香はお尻から湯船に落ちた。

ゲラゲラと笑う翔を、開いた口をふさげないまま、見つめた。

「バツカじゃないの？最低、最悪ッ！もー！」

バラを手当たり次第に翔に投げつけた。

濡れた浴衣の袖が重くて腕が上がらない。
投げれば投げるほど、美香の顔にしぶきがかかって、投げるのをやめた。

笑う翔の前で、美香はうつむいていた。

「…あがる…。浴衣、着てたかったのに…。…もう、翔ちゃんなんてキライ」

美香の言葉に、翔は真顔に戻り

「ごめん！」と、体を起こして美香の肩を掴んだ。

その瞬間に、翔の下半身を隠していたタオルがユラユラと流れた。

美香は、数秒凝視したあと、

「ああ…」と目を反らして、露天風呂から上がった。

せつかくの浴衣はびしょぬれになってしまった。

美香は、脱衣所で浴衣と下着を脱ぎ、翔ちゃんが持ってきたバスタオルで体を巻いた。

（使ってやる）

浴衣は絞らなければ、床が濡れてしまう。

脱衣所の洗面台で浴衣を絞る。

絞っても絞っても、どんどんお湯が垂れる。

（もー…）

ため息をつきながら、なんとか雫がおさまったところで、浴衣を軽くたたもつとした。

その時、ドアが開いた。

すっぱんぽんの翔が、タオルで頭を拭きながら出てきて、美香と目があつた。

「あ…」

瞬間、美香はその場に座り込んだ。

「もー…」

ほとんど涙目になっていた。

ゴメンと言いながら、翔はドアを閉めた。

「いると思わなかったんだって！」

「ズブ濡れのまま、どこに行けつてのよ！」

「ごめん！ホントごめん！」

「いいって言うまで来ないで！」

「わ、わかった…」

心臓がバクバクする。

息もあがっている。

翔の裸が脳裏から離れない。

美香は胸を押さえながら、静かに立った。

押さえた胸には、バスタオル。自分の姿に気がつき、またため息をついた。

カバンから下着を取り出して、着替える。

バスローブを羽織って、浴衣はまだ脱衣所だ。

「いいよー」

脱衣所で翔に声をかけて、すぐに出た。

絞った浴衣は、帯と一緒に脱衣所のかごにいれて部屋の入り口の前に置いた。

（最悪だ…）

美香は、テーブルの上にある飲み残しのワインを一気に飲んだ。

翔がガチャッと脱衣所のドアを開けて、顔だけを出してこちらを覗く。

「まだ怒ってる？」

翔の小さな声に、美香は

「別に」と低い声で答えた。

「…怒ってんじゃない」

「怒ってないよ」

「怒ってるって」

「怒ってないって」

「いや、怒ってる」

「怒ってない」

「じゃあ何でこっち見ないの？」

「恥ずかしいだけ」

「…ごめん…」

どんどん小さくなる声に、美香は思わず笑ってしまった。

「いいよ、もう。びっくりしただけだから。当たり前だもんね、あ
あいうのがついてるのは」

「…オレの息子はいいい子だよ…」

真顔で言う翔に、美香は爆笑した。

その声に安心した翔は、言った。

「あ、あのさ。バスタオル、ないんだけど…」

「あー、ごめん…」

クローゼットから新しいのを手渡す。

裸であることを想像して、美香は目をあわさないで、バスタオルだけを差し出した。

「サンキュー」とドアを閉めた翔が、少ししてから出てきた。

タバコに火をつけて、さっきの翔の裸がまた頭をよぎる。

（あー……。勘弁してえ）

また心臓が高鳴る。

男性の裸を見ることが自体、かなり久しぶりだ。
健太郎と別れてからだから、もう1年だ。

ちょっと免疫が切れてきている時期なのかもしれない。

いきなり全裸は刺激が強すぎた。

ガチャっというドアの音と一緒に、脱衣所から翔が出てきた。

美香は、その翔の姿を凝視した。

タオルで拭かれただけの髪は、まだ少し雫が垂れている。

バスローブが大きく開いた胸元は、全裸よりもセクシーだ。

なんと言っても、黒いバスローブがよく似合う。

「どうした？」

「う、ううん。なんでもない」

心臓のバクバクは、口から飛び出しそうだった。

きつと、何か喋れば噛んでしまう。

美香は、自分でワインをついで飲み干した。

「ねえさん、大丈夫？」

翔はソファに腰掛けて、タバコに火をつけた。

「ところでさ、まだ10時だけど？いつまで飲んでんの？」

翔が、自分のグラスに残っていたワインを一口飲んだ。
「ヌルイ」と言って、顔をしかめる。

「うーん。てつきり酔ってきたよ」

翔の裸と、一気に飲んだワインが効いた。

美香は、両腕をバンザイした。

「酔い覚ましに散歩行く？」

翔の提案に、

「行く行く」と立ち上がった。

第21章：距離

酔った身体に夜風が気持ちいい。

二人とも、バスローブを着替えてきた。

ただ、なんとなく歩く。

ホテルの周りには、何もない。

箱根独特の雰囲気。

観光地なのに、宿の周りには何もない。

ただ、まっすぐな道が続くだけだ。

少し先の、自動販売機が目につく。

「あー。コーヒー飲みたい！」

数種類ある中から、吟味して一本を選ぶ。

取り出したコーヒーを、飲みながら翔を見た。

「自分だけ…」

翔は笑いながら、自分でコーヒーを買った。

「あ、ごめん…。飲みたくて全然気づかなかった」

「優しくないんだよね、ミカさんは」

笑いながら言う翔に、美香もエヘへと笑った。

自動販売機の前にしゃがんで飲む翔は、美香の足元を見て言った。

「スカート、初めて見た…」

「うん、あんまりはかない」

「なんで？」

見上げる翔の隣に、美香も座る。

「面倒だから」

「何が？」

「いろいろ。サンダルあわせたり、ストッキングはいたり」

「女の子って、そういうのが楽しいんじゃないの？」

「…すみませんね…女の子なんですけど…」

「（笑）。なんで、今日はまた？」

「今日は…温泉だし、楽しみにしてたし、たまにはこういうのもいいかと思って」

「ふーん…」

「何？」

「いや、別に」

「一応ね、頑張ったんだよね。ネイルサロンにも行っただし、足だけコレだって買ったんだし、美容院だって行っただし」

「へえ。爪？何もしてないじゃん」

翔は、美香の缶コーヒーを持つ手をじっと見る。

「あ、手はね、何もしないの。爪も短いよ。キーボード打つとき邪魔だからいつも短いの。足だけ、塗ってもらったんだ。あたし上手くないから」

「あ、ほんとだ」

「手の爪はね、なんか小学生みたいだよ（笑）」

言って、美香は自分の両手を広げる。

「ほんとだ…キレイに、伸びてない（笑）」

「ね（笑）。ちょっと、色気ないけどしょうがない。爪伸びてると、かぶれるんだよね、顔が」

「なんで？」

「爪の中にバイ菌いるからじゃない？」

「えー！」

「手って汚いんだよオ。身体の中で一番汚い場所なんだってよ。誰かが言ってた」

「そうなの？」

「うん。だから爪伸ばしていると、顔にブツブツできたりするもん」

「そうなんだ…」

「まあ、あたしの爪が汚いだけかもしれないけど…」

翔は、笑った。

「どれ、行きますか」

ゴミ箱に空き缶を捨てて、歩き出す。

来た道を、ただ戻る。

なんとなく、無言になった時、翔の左手が美香の右手を取った。

翔を見る美香に、笑いながら

「爪伸びてないから、バイ菌いないでしょ」と。

「ひつどーい！」

美香は、翔の手を振り切って立ち止まる。

「うそぞ、コメン」

うつむく美香の右手を取って、また歩き始めた。

「バイ菌つけてやる」

美香は、強く握った。

「自分で言っでんじゃん！」

笑ったら、腕と腕が交差した。

そして、そのまま歩いた。

「あたし、お風呂入るね」

先に身体を洗ったあと、岩風呂にゆっくりと入る。

バラがたくさん浮いた岩風呂は、やっぱりどこか可笑しいけれど、窓から見える夜景も、お湯の温度もちょうどよくて、美香は心地いいため息をついた。

バラを両手ですくう。

すくった右手は、さっきまで翔の左手とくっついていた。

腕に残る感触も、思い出せる。

エステした後の肌は艶やかで、ぷっくりとやわらかい。

翔の腕は、筋肉質だったけど、ちよつとだけやわらかかった。

（あとは、寝るだけだね…）

部屋の隅にある、天蓋付のお姫様ベッドを思い出した。

（アレに寝るのか…）

ベッドは二つあった。

もちろん、別々に寝る。

まだ付き合って1週間だ。

たった今はじめて手をつないだばかり。

キスもまだなのに、いきなり全部コミコミってのは、急すぎる。

それに、翔にまだ慣れない。

いや、どんどんどキドキが加速していく。

ふとした表情も、もちろん笑った顔も、覗き込む時も、その表情にドギマギしてばかりだ。

（恋、なんだなア…）

忘れていた感覚が呼び覚める。

自分の女の部分がどンドン湧き出てくるような感じた。

（どおすんだろ…今からこんなんで…）

脱衣所でキレイに身体を拭く。

寝る時にブラはつけない主義だ。

ただでさえ肩凝りがひどいのに、寝る時まで凝るようなものをつけていけない。

（別々だし、いいよね）

厚手のバスローブは、ブラをつけていなくてもわからない。

鏡でチェックしたあと、脱衣所を出た。

「スッピン？」

化粧台に座って化粧水をつけている美香に、翔が聞いた。

「そう…だけど？」

「ふーん」

「なに？」

「（笑）『なに？』が多いよね」

「言わせるように言うからじゃん」

言いながら化粧水を叩く。

「変わるね、化粧してないと」

一瞬、美香の眉間にシワがよった。

「…翔ちゃんってさ、たまにひどいこと言うよね、ホント」

怒る美香に、翔は弁解をした。

「違う違う、そういう意味じゃなくて！かわいい、ってこと」

「今さら遅いよ」

「違うって、ホントに。化粧してる時は美人系だけど、取るとかわいくなるってこと」

「ふーん」

「ホントだって！化粧してないほうがいいよ、マジで」

「ふーん」

言いながら、化粧水をポーチにしまつ。

（まったく…）

振り返つて立ち上がった瞬間、後ろに翔がいた。

「うわ」

「信じてる？」

向き合つて、今にもくつつきそうな距離に驚いて、美香は後ろにのけぞつた。

それを、翔が受け止める。

翔の真剣な顔に、美香は目を反らした。

「信じてる？」

「な、なにが？」

「さっきの話」

まだ、体勢が整えられない。

翔の左手が美香の腰にある。右手は美香の左手を掴んでいた。

「うん、うん。信じる、信じるから。ちょっと、待って…」

美香は、体勢を立て直すために、身体を前に起こした。

その瞬間、翔の左手に力が入り、引き寄せられた。

「わわわ…」

「オレ、美香のこと、好きだからね？」

「うんうん」

「意地悪言ってないよ？」

「うんうん」

翔の胸に、美香の胸が重なる。

下着をつけていないことを思い出して、美香は翔の胸を両手で離れた。

「わ、わかったから…」

言って、クローゼットまで急いで逃げた。

翔は、何もいわずにちょっとうつむいたまま、ぬるいワインを飲んでいた。

美香は、洗面所で歯を磨く。

（もう寝たい…）

心臓のバクバクが収まらない。

くっついた時の、翔の背の高さは、隣に並んでいる時と違う。両腕の中に、すっぽりと入ってしまった。

思い出せば思い出すほど、顔が赤くなる。

いつもの自分がわからなくなってくる。

10分も歯を磨いてしまっていた。

「寝ないの？」

美香が翔に聞く。

「…うん」

吸っていたタバコを灰皿に押し付けると、翔は
「美香？」と言った。

「なに？」

おいでおいで、と手招きをする。

それに従って、美香は翔が座るソファの前まで歩く。

翔が少し横にずれて、
「座って」と。

美香は、ゆっくりと腰を下ろす。

翔の顔は見れない。

（ま、まずい…まずい…）

自分のバスローブの膝元を見る。

翔が腰を曲げて、美香を覗き込む。

「はい…」

返事はしてみたものの、美香はまだ翔を見れない。

「オレのこと、キライ…？じゃないよね…？」

その言葉に、うんうんと頷いた。

「じゃあ、こっち見てよ」

首を二回横に振った。

「何で？」

固まった。

「オレ、怖い？」

首を二回横に振った。

「何もしないよ？」

翔は、うんうん、と頷く美香をしばらく見たあと、ポンポンと美香の頭を軽く叩いて

「寝よつか」と立ち上がった。

振り向きもせず脱衣所に入った翔の背中を見送ったあと、美香はベツトに滑り込んだ。

(うわーん、どうしよう…)

怒らせてしまったかもしれない。

がっかりさせたかもしれない。

自分がとった行動に戸惑っていた。

おちゃらけて、いつものように笑いながら答えれば良かった。

翔に心臓の音が聞こえているんじゃないかと心配になるくらい、ドクドクと音をたてる自分の心臓をなだめようと、美香は大きく深呼吸を繰り返した。

「電気消すよー」

翔の声のあと、部屋の電気が消え、ベットサイドの小さなランプだけが優しく光る。

翔が隣のベットに横になる。

見ていた美香は、クスツと笑った。

「お姫様ベットに寝てる…」

「うん、ちょっと気持ち悪い」

フフフ、とまた美香は笑った。

そして、ゆつくりと口を開いた。

「翔ちゃん、さっきは…ごめんね…」

「ん？」

布団の上で、左手で頭を支えたまま、翔はこちらを向く。

「や…別になんでもないんだけど、とにかくゴメン…」

「なんで謝るの？」

「…なんとなく」

「何が？」

「…質問の意味がわかりません…」

「（笑）…なんで謝るの？」

「…なんとなく」

「戻ったな…」

「うん…」

美香の返事に、翔は

「なんだよ、ソレ」と笑った。

「でも、楽しかったよ、今日」

美香が話題を変えた。

「うん」

「いっぱい飲んだし」

「うん」

「エステもしたし」

「うん」

「伊勢海老も美味しかったし」

「うん」

「岩風呂も良かったし」

「うん」

「夜景もキレイだったし」

「うん」

「バラも体験できたし」

「うん」

「だから、楽しかった」

「…オレは…?」

「ん?」

「オレ、今いなかったよね?」

「ん?そう?」

「いなかった、いなかった!」

「翔ちゃんにも会えたし」

「うんうん」

「緊張したよ、ホント」

「緊張!?」

「そう。こんな緊張したの久しぶり」

「なんで?」

「わかんないけど…」

美香は翔を見る。

二人の目が合う。

「や、その目がさ……。目がダメなんだよ……」

「ダメって!?!」

「ダメなのよ、ホント。緊張しちゃうの。さすが芸能人だよまったく……」

美香の言葉に、翔はキョトンとした。

「その目じゃ、ファンもたくさんいるよ、そりゃ」

「……どういう意味?」

「かつこいい、ってコト!褒めてんの!」

「あ、ああ……。アリガト……」

「ま、言われ慣れてると思うけどさ」

「美香も、スッピンかわいいよ」

「……ハイ……」

恥ずかしくなって、鼻まで布団で隠す。

「まつげ長いもんね」

「……ハイ……」

「目が笑つとこうなるよね」

翔は、右手の人差し指で山を二つ書いた。

「…ハイ…」

「肌キレイだもんね」

「…ハイ…」

また言おうとする翔よりも、美香のほうが早かった。

「また緊張するから、もう言わないで」

「オレもちよつと緊張してるよ…。でも、すっぱんぽん見られたら『もついいや』ってなったけど」

美香の頭に、その画像がちらつく。

「もー…。翔ちゃんはキレイな女優さんとかたくさん見てるから慣れてるかもしれないけど、あたしはしばらく免疫ないんだからさ…」

「だから緊張してんの?」

「…だと思っけど…。なんか、ダメ。心臓がすごい」

言いながら、翔の顔を見て、また心臓がバクバクしてきた。

「あア…ほら、ダメだ…」

横にしていた身体を起こす。

また大きく深呼吸をした。

「何やってんの？」

「おさめてんの」

「何を？」

「心臓」

大声で笑う翔に、美香は真剣に言った。

「ちょっとオ！人ごとだと思って！あたしさつきからずっと大変な
んだから！」

真剣な美香に、翔ははにかみながら言った。

「オレも心臓バクバクするよ」

「いや、違う。たぶんあたしのほうが、ひどい。絶対」

「なんでわかんだよ」と言いながらまた笑う。

「おかしいもん、コレ。ホントに。一緒にいて毎回こんなになって
たら、無理だもん」

「何が？」

「や、だから、一緒にいけない」

「緊張して？」

「そう」

その言葉に、翔がまた笑う。

美香は、

「もー」と言いながら、またベットに横になった。

翔は、ベットから起き上がると、冷蔵庫へ向かった。

「はい」

美香の顔の前に、ペットボトルの水を差し出す。

「あ、アリガト……」

起きて、ゴクゴクと飲む。

「のど、鳴ってるぞ……（笑）」

「あー……」

三分の一を一気に飲んだ。

「オレも」と、翔は残りを少し飲んだ。

美香のベットに腰掛ける翔をマジマジと見る。

髪の毛が少し目にかかる、その奥から見える瞳は、いつも優しい。

黒いバスローブがよく似合う、

たぶん、この前までは気がつかなかったかっこよさだ。

恋というものを実感してから、どんどん加速するドキドキはどこまでいくのだろう。

「慣れるのかな…?」

「ん?」

「翔ちゃんに、あたし慣れると思う?」

「慣れるんじゃない?」

「翔ちゃんは、もうあたしに慣れた?」

「んー…。半々」

「どこが慣れない?」

「ええ?どこ?…なんだろ…スカート、とか。スッピン、とか?…
今、とか…」

「今？」

「スッピンだから」

「なによ、さつきからスッピンスッピンって」

「や、ホントにスッピンかわいいよ？」

言う翔に、美香は笑った。

こついうことを言ってみたり、岩風呂に突き落したり、予想もつかない行動をする翔。

考えれば考えるほど、頭の中がごちゃごちゃしてきた。

「いいや、もう。一緒に寝よっか！」

「えッ!？」

目を真ん丸くして驚く翔に、美香は翔の入るスペースをあけて、布団に入った。

「寝てみよ、慣れるかもしれない。一番てつとり早いかも。なんかもう、考えるの面倒臭くなっちゃった」

「はい、ホラ、寝た寝た」

隣をポンポンと叩く。

翔は、少し考えてから言った。

「オレ、一応、男の子だけど…」

「うん。あたしも、一応、女の子」

「何もしない約束ってのは…ちょっとできない、かも…」

「翔ちゃんの息子は、いい子なんでしょ？」

言う美香に、翔は吹き出した。

「まあ、色んな意味でいい子って意味で…」

「うん。よくわかんないけど、いい子なら大丈夫なんじゃない？」

美香はすっかり開き直っていた。

自分が先手になると、強い。

「だな！なるようになるだろ！」

翔は、勢いよく、美香の隣に滑り込んできた。

キングサイズのベットは、二人が余裕でおさまる。

美香は右を向いて、翔は左腕を自分の頭の下にして左を向く。

身体ごと、向き合っていた。

十秒くらい、見つめあったまま無言だった。

先手を切ったのは、美香。

「なんか喋ってよ」

「あいうえお」

真顔で言う翔に、美香は声を出して笑った。

少し顔が近づく。

「あ、翔ちゃんいい匂いする」

美香は、フンフンと鼻をすすった。

「…たぶん、美香のほうがいい匂いしてるよ」

「おんなじシャンプー使ったから、おんなじ匂いなんじゃない？このシャンプーいい匂いしたもん」

美香は、自分の髪を少し手にとって鼻の前に持ってくる。

そのしぐさを見た翔が、思わず言った。

「チューしていい…？」

「ダメ」

「えー！！」

翔は勢いよくうなだれた。

笑った美香は、

「翔ちゃん？」と呼んだ。

翔が顔を上げる。

美香が、翔の肩につかまり、軽くキスをした。

そして、身体を離そうとした瞬間、翔の頭の下にあった左手が美香の身体を抱いた。

「おっと」

翔の胸と、美香の胸が重なりそうで重ならない。

数センチの隙間をあげただけの、顔と顔の距離。
おでこは、くつついてる。

二人とも、上目使いでお互いを見る。

「もう一回」

「ダメ」

「なんで？」

「おしまい」

「やだ」

言って、翔は自分の顔を少しだけ傾けて、美香に近づいた。

一度くつついて、少し離れる。

目を見て、またくつつく。

何回か繰り返したあと、美香の左腕は翔の右腕の下を通っていた。

美香のやわらかさが、翔に伝わる。

美香の背中に回っていた翔の右手は、ゆっくり引かれて、美香の前に回ろつとした。

「ん……」

くっついていた顔を離し、美香は左手で翔の右手を止めた。

「ストップ」

さっき冷蔵庫から出した水は、少しぬるくなっていた。

翔が、やっと諦めて起き上がった。

水を飲んで、美香を見る。

「マジで?」

「うん、マジで」

美香は、ストップを5回かけた。

5回ねばった翔も、諦めざるをえなかった。

「ホントにダメなの？」

「うん、ダメ」

「なんで？」

「なんで、って…。急すぎるから…」

「急？」

「だって、今日で全部コミコミなんて、そんなお買い得みたいな感じ、やだ」

「えー！オレそんなこと思わないよ！」

「あたしと思うもん」

「寸止めかよ…」

「一緒に寝ないほうが良かった？」

「…いや、そういうわけじゃないけど…」

「じゃ、あとはそっちのベットで寝てね」

「えー！」

翔が不満気に美香を見ると、笑っていた。

「っていつか、開き直って強くなつたな」

「そう?」

「うん。さっきまでのかわいい美香はどこへ?」

「え、もうかわいくないの?」

「いや…かわいいけど…なんか…なんか…オレ、遊ばれた?」

「違う違う!遊んでない!」

「…そう…」

「だって、今日はその約束でしょ?」

「…まア…でも、事と次第によっちゃア…」

「よらない、よらない」

「…そう…ですか…」

「はい。じゃあ寝よ?もう3時だし」

美香の言うままに、翔はまた布団に入った。

翔の左手は、美香の頭の下に。

右腕は、美香の背中に回っていた。

「アレ？オレ、普通にこうしちゃったけど…」

「うん？」

「寝れねえよ…」

美香は翔の腕の中で、クスクスと笑った。

二人の距離は、0 c mだった。

第22章：過ち

東京までの道のりを運転する間、翔はずっと思い出していた。

ホテルのロビーに向かって手を振る美香。

エステは気持ち良かったと、最高に幸せそうな顔をした美香。

「食べるのが早い！」とプンス力怒った美香。

すぐムキになるから面白い。

初めて見たスカートから伸びた足は、形のいいキレイな足だった。

つないだ手も、小さく、柔らかかった。

スッピンには本当にビックリした。

肌の艶やかさと、あの上目遣いは反則だ。

それに何よりも、浴衣や思いがけず見てしまったバスタオル一枚の姿、バスローブから見えそうで見えない胸。

そして、抱きしめた感触と、唇の感触…。

そこを思い出して、またニヤつく。

寝れるわけがないと思っていたけれど、案外眠れたことにも驚いた。あつという間に、腕の中でスヤスヤ眠った美香を見て、なんとなくホッとしたんだ。

いつもは普通の友達のように、サバサバしているのに、急にしおらしくなったり、開き直ったり、ムキになったり、照れたり、忙しく変わる表情と口調が見ていて飽きなかった。

翔はまた思い出して笑う。

（バイ菌、って…）

爪が伸びていない手は、本当に小学生の手みたいだった。

仕事のために、女という部分を潔く犠牲にしているところは、かっこいいと思う。

今まで出会ってきた中で、間違いなく初めてのタイプだ。

お金という面での依存ないだろう。むしろ、自分で払いたがるクセがあるが、それは美香のステータス

であり、ビジネスへの意欲がなければ出来ないことだ。

きつと、美香は自分と対等の立場で、物事を判断できる女性なのだ。

ツンデレ、という言葉聞いたことがある。

（美香みたいなのが、当てはまるのか…？）

どちらでも良いのだが、自分が美香に惚れていることは間違いない。

翔は、ニヤつく口元を手で押さえながら、車を走らせた。

サエから電話があつたのは、10日後のことだった。

仕事が終わる、久々に自宅でゆっくりくつろぐはずが、
「美香ちゃんの家に行くんだ」の一言で家を出た。

美香の家に入るのは、初めてだ。

マンションの前まで行ったことはあるが、中に入ったことは一度も無い。

（どうして、サエが…？）

こういう疑問は、拭いきれない。

サエと美香はそれほど親しいわけじゃないだろう。

昨日も美香とは電話で少し話したが、今日のことなど一言も言っていないかった。

相変わらず仕事が忙しいようで、スタッフ数人が辞めたりしていてちよつと大変らしい。

そんな中で、サエやコウ、ヒロを呼んで大丈夫なのだろうか…？

美香の家の前近くまで来たところで、翔はタクシーの中から電話をかけた。

「もしもし？オレだけど、行っているの？…ってか、もう着くんだけど…」

「…あー。701だから。番号押して。自動ドア開けるから。あとは7階まで来て」

いきなりテンションの低い美香の声に、思わず凍りついた。

（おいおい…。大丈夫なのかよ…）

エレベーターを降りて、まっすぐに進む。

701号室は、角部屋だった。

チャイムを押すと、数秒後に

「いらつしゃーい！」という声とともに、満面の笑みでサエがドアを開けた。

「お、おう…」

広い玄関で靴を脱ぐ。

男物の靴が3足、女物の靴が3足あった。

コウとヒロ、それに、昔一度だけ会ったことがある、2つ年下の亮平がいた。

女性人は、サエと京子と真理絵。いつものメンバーだった。

玄関からリビングまでつながる、廊下を少し歩くと、10畳ほどのリビングが姿をあらわした。

ソファには、みんなそれぞれが腰掛け、ビールやワインがこれから空けられようとしていた。

挨拶もそこそこに、翔はソファへと促される。

美香の姿を探すが、見えない。

部屋の隅のほうにある、通常よりも広いパソコンデスクには、3台のモニターがあった。

電話、FAX、プリンター、スキャナー、書類などが乱雑に置かれた棚は、いかにも美香らしい仕事風景だ。

しかし、そこにも美香はいない。

リビングと続きになっているキッチンのほうを振り向くが、よく見えない。

コウから、ビールが入ったグラスを手渡される。

なんとなく乾杯をして、

「美香は？」とコウに聞くと、トイレという返事。

納得して、冷たいビールを飲み干した。

まだ何も食べていない。すきつ腹に冷たいビールがよく効く。

向かいに座る女性人の華やかさは、今日は特別だ。

ミニスカート、胸元が大きく開いた服に、濃いメイク。

ちょっとした合コンを想像させるような、そんな感じだった。

サエからのお酌をもらっていると、足音がした。

振り向くと、10日ぶりの美香の姿があった。

美香は、一瞬だけ翔を見て少し微笑んだあと、すぐに電話をかけ始めた。

「ピザ、適当に取ったから来たら受け取って。買い物行ってくるから」

コウに告げると、美香は財布と携帯だけを手に持ち玄関へ向かった。

「オレも行くよ」

久しぶりに美香と二人になりたい翔の願いは、サエに遮られた。

「えゝ。今来たばかりなのにい？」

サエの言葉に、美香は

「一人でいいよ」と振り返らずに言い、玄関のドアを閉めた。

「……ってか、なんでまた？」

翔は、疑問を素直に聞いた。

「ここに集まってるか、ってこと？それはサエに聞いて」

コウは、テーブルの上のお菓子をつまみながら言った。

「んゝ。なんとなく、かな？」

サエがおしぼりで手をふきながら言う。

「なんとなく？」

「うん。美香ちゃんに電話したら、いいよって。」

「へえ……」

「でもさア、すごいよね、ここのお部屋。あたしもこんなところ住んでみたアい」

京子の言葉に、真理絵が頷く。

「あたし達なんて、ワンルームだよオ。OLのお給料で、都内じゃソレが限界だよ」

「ホストクラブとか行ってるみたいだしね」

サエが、マッチをヒラヒラさせて言った。

「ホスト？」

翔が食いつく。

「うん、ほらマッチ。”ローズ”って書いてあるよ。あそこでしょ、新宿の」

確かに、そのマッチにはローズと書いてあった。裏の住所も新宿だった。

「ローズって有名だよ。テレビとかにも出てるしさ。かなり高級ホストクラブみたいだけど」

「美香ちゃんって、お金あるから、そういうトコにも行けるんだね。」

結構貢いでたりして」

「ありえるかもオ。お金ある人って、使いたがるって聞いたことあるし」

女性陣の会話を聞きながら、翔はマッチを見ていた。

（ホスト、とか行ってるのか…？）

もし、そうだとしたら、ショックを受けないわけではない。
流星群の下で、交わした約束は何だったのだろうか。

「それに、あたし見たんだよね。美香ちゃんがスーツ着た男の人と楽しそうに歩いてるの。アレってホストの人だと思うよ。だって金髪だったし、超ホストっぽかったモン」

サエの言葉に、翔の不安はさらに大きくなった。

その時、家の電話がなった。

全員が会話を止める。

「…出る？」

「出ないでしょ、普通」

「ピザ屋だったら？」

「…」

「…留守電にならないね」

結局、サエが取った。

いつもお世話になっております、と丁寧な対応をしていることだけは分かったが、内容はわからない。

「なんか、仕事の電話みたい。あとで美香ちゃんに伝えておくよ」
サエはまた、ビールを飲み始めた。

30分後、戻ってきた美香はすぐにキッチンに立った。

注文していた3枚のピザは、もう半分程度しか残っていない。

ガサガサと音がするキッチンには、誰も行こうとしない。
コウもヒロも、すきっ腹に飲んだのだろっ、ホロ酔いで女性陣と会

話が弾んでいる。

亮平は、ソファの端っこで赤い顔をしてもたれかかっている。

翔はゆっくりと立ち上がり、キッチンへと向かった。

「手伝う？」

「いい」

振り向かないで言う美香に、翔は確信した。

「なんか、怒ってる？」

「別に」

「…あ、そういえばさっき電話あった」

「そう」

「サエが取ってた」

「え？」

美香がやっと振り向いた。

しかし、その顔は険しかった。

美香はキッチンから出て、サエに近づき

「電話、あつたの？」と。

「あー、そうそう！えっとねえ、…アレ…何て人だっけ…？なんか、15日が納期の件で、って。折り返し連絡くださいだって」

「名前は？」

「…ごめんなさい、忘れちゃった…。なんか、珍しい苗字の人だったんだけど…」

美香は、クライアントの苗字を10個程度言った。

サエは

「わからない」と言った表情で首をかしげる。

今度は、スタッフの苗字数えきれないほど言った。

サエは、

「ごめんなさい」と茶目つ氣たつぷりの表情で謝った。

それを見た美香は、ゆっくりと、そして静かな口調で言った。

「15日が納期の仕事はたくさんあります。クライアントへの納品分なのか、スタッフから私への納品分なのか。両方含めると、20も30もあります。あなたは、私の仕事に対して責任を取れるから、私の家の電話を勝手に取ったのよね？この電話の件で、多少なりとも損害が出た場合、私に対して責任を取れるから、電話を取ったのよね？」

「え…？」

笑っていたサエの表情が曇る。

「もし、損害が出た場合、請求させていただいてもいいということよね？私のビジネスにちょっかいを出したんだから。」

呆然と立ちすくむサエを、京子と真理絵が座るように促す。

「ごめんなさい……」

サエは、かすれそうな声を出した。

聞いた美香は、サエの隣にしゃがみ

「今回はいいけど、今後は、気をつけてね」と笑顔でサエの肩をポンポンと叩いた。

その美香の表情に、サエにもなんとか笑顔が戻った。

キッチンに戻ってきた美香は、まだ険しい表情をしていた。

翔は、その威圧感にしばらく声が出ない。

（ビジネスの世界というのは、こんなに厳しい世界なのか…？）

呆然と、美香の表情だけを見ている翔に、厳しい声が飛んだ。

「ちょっと！どいて、邪魔」

冷蔵庫の前に立っている翔の腕を軽く叩く。

「あ、ごめん」

「いいよ、一人で出来るから。飲んでて」

「手伝うよ」

「いいって」

「何で？」

「ごめん。今イライラしてるから、ちょっと…一人のほうがいい」

翔の顔を見ずに言う美香に、翔は軽く頷いてリビングへと戻った。

美香の言葉の威圧感がまだ残るリビングで、サエは亮平に絡んでいた。

「ねえねえ、亮くんはどう思う？やっぱりサエが悪い？」

「い、いやア…どうツスカね…」

亮平の隣でクダを巻くサエのミニスカートからは、大胆にも太ももまでがあらわになっていた。

亮平は、その足が気になって仕方が無い様子だ。

「確かにい、あたしも少しは悪いと思うけど、あそこまで言う必要はないと思わない？」

「ま、まア……」

「なんか、社長だからってお高くとまってるって感じい」

サエの言葉を聞きながら、翔はコウを見た。

しかし、一番あてになるコウもヒロも、すっかり酔っていた。

テーブルには、ワインのボトルが3本、ウイスキーのボトルの中もあと少ししか残っていない。

サエもかなり酔っている。

ワインも一人で空けているようだった。

「飲みすぎなんじゃない？」

「だ〜いじょうぶ！」

翔の言葉に、サエがうつろな目で答える。

「それよりさ、王様ゲームしよ〜！」

サエの言葉に、コウもヒロもワーツと拍手をするが、一番大きな歓声をあげていたのは、亮平だった。

クジ代わりにされたコウのタバコは、１本だけフィルターが切り取られた。

これを引いた人が王様というわけだ。

最初に王様になったのは、コウ。

「いいーい」と言いながら、

「２番の人が、残りのウイスキー一気飲み」という難題を出した。

翔は、その場でうなだれる。

「オレー！マジかよ！」

と、ウイスキーのボトルのまま、ゴクゴクと飲み干した。

何度あるのだろう。のどの奥がヒリヒリと痛む。

それがおさまった瞬間、頭がグワンと大きく揺れた。

「やばい、一気に酔った」

ソファの背もたれに大きく身体を預け、天井を見上げる。

天井の格子模様がぐにやぐにやに見える。

次に王様になった亮平も、同じく一気飲みを指定した。

翔は自分の不運を呪いながら、グラスについてあったワインを一気に飲み干した。

「あー、オレもうだめ…」

空っぽの腹の中で、アルコールがジワジワと吸収されていくのがわかる。

自分の身体を支えることもできないくらいに、力が抜けて、ソファの背もたれに身体を預けたまま動けない。

そんな翔を見向きもせず続ける王様ゲームは、一気飲みのほかにほっぺにチューや肩揉みなど、さまざまな指示だった。

幸い、翔には何も回ってこない。

クジのタバコを引くのがやっとだった。

亮平の楽しそうな声が、キンキンと頭に響く。

「ちよつとオ、そこ片付けて」

美香の声に、翔はやつと身体を起こす。

土鍋をこぼれないように持ち、そろそろと歩く美香のために、みなテーブルの上を片付ける。

「おー、うまそう!」

「すごおい、おいしそ〜」

「何もないから、コレだけだけど、うどんも向こうにあるから」

酔っ払っていても、この美味しそうな匂いに一瞬目がさえる。

みんなおもむろに鍋をつつき、無言で食べた。

美香がクーラーの温度を下げる。

涼しい部屋で食べる、夏の鍋は最高だ。

「イって！」

翔は、太ももの痛みで目が覚めた。

振り向くと、美香がまだ太もみを蹴っていた。

「痛いって」

翔の声に気がつき、蹴るのをやめる。

翔は振り向いたままだった姿勢から、前を向きなおして、思わず声を上げた。

「ええ！？」

自分の腕の中に、サエがいた。

横たわっているベットは、おそらく美香のベットだった。

状況を飲み込めないまま、翔はベットから飛び起きた。

その瞬間、サエも目を覚ました。

「なアにい？」

サエの甘ったるい声が鼻につく。

美香は、

「バツカじゃないの」と二人に吐き捨てるように言い、寝室を出て行った。

翔は呆然としたまま、美香が出て行くのを見終わると、隣で自分の髪をいじるサエに

「どういうこと？」と聞いた。

「ん？なんかね、寝ちゃったみたい」

「いや、寝てたのは分かるけど、何でお前がここにいんのかってことだよ」

「サエもよくわかんない。でも、翔くんがサエに抱きついてきたからア……」

「えッ？」

「急に、ギューって」

言いながら、翔の腰に手を回したサエを振り払う。

「オレ、何かした？」

「えゝ。覚えてないのオ？」

翔は思わず自分の服を見た。ズボンもはいているし、Ｔシャツだつて着ている。

サエも、とくに乱れた様子はないようでホッとした。

「何も、してない…よな？」

「…したよ」

「なにを？」

「ちゅー」

「マジでか？」

「マジで。何回もしたよ」

暗くてよく見えなかった美香の表情を思い出す。

しかし、思い出せない。

「あと、おっぱいも触ったよ」

「え？」

「触つて、寝たよ。翔くん」

「…ごめん…」

最悪だった。

全然覚えていないから、タチが悪い。

サエの言うことを信じるしかないだろう。

翔は、また身体をベットに投げ出した。

「最悪だ…」

つぶやく翔に、サエは乗っかって言った。

「ちょっと、ソレってひどくない？」

サエの胸元から、谷間が見える。

翔は目を閉じて、サエの身体を自分からゆっくりと引き離れた。

「ごめん」

「何が？」

「いや、だから…いろいろ」

「ちゅーしたこととか？」

「そう」

「いいよ、別に」

笑うサエに、翔はまた謝って部屋を出た。

リビングには、まだ明かりがついている。

腕時計は夜１１時だ。

みんなは帰ったようで、リビングには誰もいない。

キッチンで洗い物をする美香の後ろ姿に、翔は声をかけることができない。

「美香ちゃん、あたし、帰るねえ。翔くん、帰ろ」

翔はサエに腕をとられ、

「送ってよ」とそのまま玄関へ連れて行かれた。

財布と携帯がポケットにあることを確認して、翔はサエに連れられるまま部屋を出た。

エレベーターの中で、腕を組もうとするサエの手をさりげなくよけ

る。

それでも、ぴったりとくっついて離れないサエを、そのままにしてタクシーを止めた。

「一緒に乗ってよ」

サエは、タクシーに乗り込まない翔に不満気に言った。

「今日はゴメン、ホント」

言って、翔はドアを閉めた。

しかし、またドアが開く。

「帰るんでしょ？一緒に帰ろうよ」

「あ、あア、帰るよ。別のタクシー拾うから」

「また部屋に戻らないよね？」

「…戻らないよ。帰るよ」

何故こんなことを言ったのかわからない。

戻ると言っても良かったが、自分がしたことを考えるとサエとこれ以上面倒なことにはなりたくなかった。

サエを乗せたタクシーが走り去るのを見送って、翔はまた美香の部

屋番号を押した。

「帰って」

インターホンから答える美香の低い声。
自動ドアは開かない。

「ごめん、頼むから開けて」

「帰って」

「開くまでここにいろよ」

「じゃあ一生そうしてれば」

言って、ブツッと切れた。

翔はまた番号を押す。

しかし、美香の声はもう聞こえなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5788c/>

明日を描こう

2010年11月20日02時50分発行